

# 山岳

第二十九年

第一號



山  
岳

第二十九年第一號



目次 (第二十九年第一號 昭和九年五月)

本欄

上高地は神河内が正しき説  
アルバート遠征の追想(一)  
南湖大山の記

小島水 一頁  
三田幸夫 三三  
田中薫 三五

雜錄

僕達の造る小屋の事を  
冬の八甲田山  
勝道上人と日光の開山  
耳二ツの寫真に就て  
上越國境の山名二三

大島亮吉 七  
額田敏 九  
武田久吉 一〇  
武田久吉 一三  
武田久吉 一五

# 追憶

平福百穂氏を憶ふ

茨木猪之吉 二三

東京農業大學山岳部員の奥穂高遭難（東京農業大學山岳部）

三五

## 會報

會務報告（一三〇） 本年度役員並に事務分擔（一三〇） 定例理事會（一三〇） 第六十回小集會記事（一三二） 第六十一回小集會記事（一三三） 會員大會（一三三） 新舊理事送迎會（一三四） 新入會員（一三五） 會員計報（一三六） 退會者（一三六） 「山岳」投稿規定（一三八） 日本山岳會々則（一三九）

## 圖版

「善光寺名所圖會」第一卷所載穂高嶽及神河内の記録

對頁  
八

「善光寺名所圖會」第一卷にある鉛穂高及び神河内等の挿繪

九

バドツノフ山北方の緩傾斜面、バドツノフ山北面より北望

田中 薫 三〇

シラガン溪源頭の氷河性谷壁と堆石及び捨子石

田中 薫 三〇

南湖大山主峯とカール1、下部に堆石の一部見ゆ

シロン マハヤヘン

葛川の上流、標高九〇〇米附近よりの展望

井戸岳の火口壁

駒ヶ峯より見たる八甲田大岳、小岳

駒ヶ峯との鞍部より櫛ヶ峯

駒ヶ峯の頂上

勝道上人木像

月夜野から望んだ耳二ッ

故平福百穂氏

### 挿 圖

第一圖 南湖大山々橐略圖（圈谷、堆石堤の分布を示す）

第二圖 谷水河位置想像圖

第三圖 氷帽説による氷蝕状態の想像圖並に現在する熱帯高山の氷帽

第四圖 ムルロアフより南湖大山に至る稜線上の小地形を示す

第五圖 ムルロアフ、南湖大山間稜線上の地塊運動見取圖

田中 薰 三

田中 薰 三

額田 敏 九

伊藤 健 夫 一〇

伊藤 健 夫 一〇

額田 敏 夫 一〇

額田 敏 夫 一〇

武田 久 吉 一三

武田 久 吉 一三

武田 久 吉 一四

八甲田山附近圖

谷川コイ澤左岸の堤上から仰いだ谷川岳（武田久吉）  
現場概念圖

カ  
ッ  
ト

坂  
本  
直  
行

## 上高地は神河内が正しき説

(この一文を故辻村伊助君に捧ぐ)

小 島 水

今から約三十年前に、上高地といふ地名は、如何なる地圖にも、地理書類にも、記載せられたことを、見出し得ない、然るに今日では、上高地といふと、或は日本三景や、近江八景以上に、高名になつてゐると思はれる、然らば上高地といふ地名は、何處から起つて、いつ頃から記録に顯はされるやうになつたのであらうか、私は、土地の人でないから、其の地方の古い記録に溯つて、調査する便宜を有しないが、私などは、明治年代になつてから、上高地へ足を踏み入れた方では、先づ早い方だらうと思ふし、且つ私は、神河内或は上高地などいふ文字を使用したことに就いても、責任があるから、私自身に關する事から始める。

實は、此の問題は、今日に至つて擔ぎ出されるまでもなく、可なり前から、上高地なる地名に就いて、私は慊焉の情を抱いてゐた、といふのは、上高地といふ文字の、平凡なのはどうでもいゝとして、實際の地形に合つて居らないのみならず、却つて正反對の名になつてゐる、凡ての地名は、必ずしも實際の地形を、正しく表現してゐるとは限らないが、上高地なる地名は、その使用の始めから、至つて曖昧であつた、上高地は、穂高岳麓、梓川

溪谷の一部を形造る谷盆地で、周囲の山々から、瞰下される窪地だ、即ち上と謂はむよりも下、高地と謂はむよりも低地である、初めて上高地へ遊んだ人たちの口から、往々、上高地といふから、高山の頂上のやうなところで、遠望の利く高臺かと思つたら、丸で反對で、山に取り圍まれた窪地であるのは、意外だ、といふ感想を聞くことがある、其の人の準備知識の足りないのは、ともかくとして、單に地名から想像してかゝれば、無理な錯覺でも、無いと思はれる。

私が明治三十五年に槍ヶ嶽に登山した時の紀行文は、翌三十六年の一月から、雑誌「文庫」に、十回に亘つて連載されたのであるが、凡て取り纏めて、私の山岳紀行文集「山水無盡藏」に載せてある、この本は明治三十九年の出版で、既にその頃、上高地なる文字が、多く行はれんとしてゐる際であるが、三十六年の原文の儘で收めてあるから、對照と追蹤に、不便を感じない。

今この本で見ると、第四回「梓川を溯る記」で、島々村の清水屋で、槍行きの路を聞くところがある、清水屋の主人らしい男の返辭に「獲師はカミウチまでは、誰も行くが、嶽へ登るのは澤山はない(五三頁)といふ言葉がある、私が徳本峠の路を取らないで、一旦、白骨へ廻り、そこから霞澤を経て、槍へ行くことにしたのは、島々で、獵師の嚮導を得られなかつたためである、それから橋場より稻核へ行くところで、思ひがけなくも、農商務省吏員の三角測量班の御供をして、槍へ登つて歸る途中といふ夫人に遭遇し、槍ヶ嶽の模様を聞くところで

梓川は、源流を槍ヶ嶽に發す(余は是に於いて愈々、坊間の地理書に、乗鞍嶽より發源すと記せることの、非なるを確かめぬ)るが故に、梓川に沿うて、溯れば、必ず到り得べし、その路は、島々より發程するを、最も可とす、島々より六里許、カミウチ(清水屋の亭主もしかく呼びぬ、地圖には載せず、神河内を約めて、土人

しかく呼ぶなり)。(五八頁)

とある、これが、カミウチに對して、神河内なる文字を宛てた、最初のものである、當時、私は上高地なる文字を使用しなかつた。

第六回白骨温泉の記で、大石屋の主人に、槍ヶ嶽行の案内を頼むところに、彼(大石屋)曰く、槍ヶ嶽の麓なるカミウチまでは、路を知りたれども、槍ヶ嶽へは、未だ登りたることなし、併しともかくも、カミウチまで行き云々(八八頁)、第七回霞澤の急湍を渉る記の末節に「導者指點していふ、かしこの白澤を過ぐれば、神河内にして、則ち今夜我等の野宿するところなり」と(一〇七一—一〇八頁)振假名は、原文の儘である。

それから「是より霞澤山を下るに決す、下り終るところは、即ち穂高山の麓なる神河内にして、云々」といふ句が、第八章「梓河畔に立ちて穂高山を觀する記」のところにある(一〇八頁)、その後にも、神河内の文字を、凡べて本文に用ゐてゐるから、私の「槍ヶ嶽探検記」以前に、邦文を以て書かれた上高地の記載がない限り、上高地の發音は、カミウチであつて、高地の意味は毫も含まれて居らず、又漢字の宛字<sup>あてじ</sup>としては、神河内が、最初に私によつて使用されたのである。(私の原文は、凡べて、槍ヶ嶽を、鎗ヶ嶽と書いてある、今引用に當つて、現用の槍に改む)

然らば、私は何故「神河内」なる文字を使用したかといふに、説明は、私の後作「梓川の上流」に出してある、この一文は明治四十年五月の「早稻田文學」に寄稿したのを、單行本「雲表」(明治四十年七月刊)に収録した、左に原文のまゝを抜く。

土人は、カミウチ、或はカミグチとも呼んでゐるが、今では上高地と書く、高地はおそらく、明治になつて

からの當字あたじであらう、上も高地かみかうちも、同じ意味を、二つ重ねただけで、此の地を支配してゐる水や河といふ意義はない、穂高山麓の、宮川の池の邊に、穂高神社が祀つてある、その縁起に據ると、伊邪那岐命いざなみことの御兒大綿津見おほつみの生ませたまふ穂高見ほたかみの命みことが、草創の土地で、命は水を治められた御方であるから、今でも、水の神として祀られて在あります、神孫數代、宮居を定められたところから「神垣内かみかきうち」と唱へるとある、綿津見は蒼海あだつみのことで、今の安曇郡は、蒼海あつみから出たのであらう、自分は土地に傳はつてゐる神話と、地形から考へて、「神河内」なる文字を用ゐる、高地には純美なるアルプス溪谷の意味は少しもない、「河内」は、天龍川の支流、和田川の奥を、八重河内といふし、金森長近が天正十六年に拓いた飛驒高原川沿道を、河内路かうちみちと唱へてゐるから、此の地に最もふさはしい名と考へる。

私は、その後も、日本アルプス第三卷（明治四十五年刊）に於て、本卷のために新作した「谷より峰へ、峰より谷へ」のうち「神河内」なる一章を設けて、この谷盆地の變幻せる光景に就いて、詳しく説くところがあつたが「上高地」なる文字を出来るだけ、回避してゐる、（後年、上高地が一般に通用せられる時になつてから、獨り異を樹てるも、どうかと思つて、上高地を使用するやうになつたが）亡くなられた辻村伊助君は、徹頭徹尾「神河内」なる文字を用ゐて「上高地」を汚れた方面を表はすときにのみ、用ひられてゐる、同氏の「神河内と常念山脈」なる一文に云ふ。

神河内は、林道が直線に貫かれてから、河童橋が、田舎臭い釣橋に變つてから、……茶代の受取りが、活字で組まれ、茶碗に温泉の名が焼きつけられ、手拭が間違ひだらけの横文字で染められて、温泉は「上高地」と云ふ名と共に、しかく俗了してしまつたのである。

又曰く

余は主義として、こんな俗了した「上高地」や、そこにある温泉のために、幾頁を費やしはせぬ、余の筆をとるのは、神河内の昔を憶ふ人の爲めにしたので、云々、くれぐれも云ふ、神河内ならぬ「上高地」は、不快なところである。(以上、大正元年十二月刊「山岳」第七年第三號)

扱、今度は上高地の文字の詮索になるが、誰が始めて之を用ゐたか、又如何なる根據に依つて使つたかは、明らかでないが、私の考へでは、明治三十八年に、温泉宿が出来て、その名乗りを、上高地温泉株式會社としたのが流布の原因となつたのではあるまいか、その頃、温泉會社が、右の名を以て長野地方の新聞に廣告し、注意を惹いて、神河内即ち上高地なるかと、疑はしめたのは、左の一文に依つて伺はれる。即ち「山岳」第一年第三號、日本アルプスの卷(明治三十九年十一月發行)に河邨白水氏の「徳本峠と槍ヶ岳」の文中

知己の家に、元巡查をして、白骨からあの邊の山の中を歩いた人が、居たので、種々話をしてゐる内、急に上高地温泉の話が出た、僕は、白骨以上、梓川の岸には、人の住む様な、家はあるまい、よしあつたとしても、豚小屋然たるものであらうと思つて居たのに、長野日報に、廣告まで出して居るからは、せめて鹽原の、元湯位の家はあるのだらう、元巡查の先生に聞いても、何しろ十年も前の事で、其の頃は、小さな家が一軒あつたばかりと云ふ事だけで、今の様子はわからぬ、多分去年あたり、建てたのであらうとの事であつた、考へて見ると、烏水子の紀行文に神河内と書いてあつたのは、そこであらう、(中略)新聞には、鳥々から上高地まで、林道が出来て、婦人小兒も樂だと書いてある、して見ると、其の間にあると云ふ徳本峠も、何でも無い、今日は、樂に、日の中に上高地へ行ける。(圈點は私が附した)

そして同氏は、所謂上高地に赴かれて見ると、林務所郵便局を右にして、突きあたると、其處に新らしい木に、上高地温泉株式會社と書いて、横の家には、上高地行荷物運搬所と云ふ札の懸つてゐる家があると、しるされてゐる。

「山岳」同號の、林並木氏の笠ヶ岳・燒岳・穗高岳紀行には、上高地温泉の一章を設け、上高地温泉場カミグチ（上高地温泉株式會社）の名をしるされたが、河邨氏は、同じ上高地にしても、振假名だけは、カミグチであるのに、林氏に至つて、振假名も、カミカウチとなつてしまつた。

この明治三十九年には、信州松本市の高美書店から、丸山注連三郎氏外二人の合著に成る「槍ヶ嶽乃美觀」といふ單行本が、刊行せられ、徳本峠を徳五峠トクイノ、萬年雪に對して氷河カミカウチと稱し居るほどの、奇書であるが、この書にも、上高地の文字を用ひてゐる。

更に明治四十二年三月發行の「山岳」第四年第一號に、高野鷹藏氏の「上高地の記」出で、記述詳細をきはめ、上高地の勝地を、天下に紹介せられ、上高地の名が、益々普及するに至つたが、その次號、即ち同年六月發行の第二號には、長野縣南安曇郡上高地「上高地温泉場」として、全頁大の廣告が「山岳」に出てゐるが、その時には、清水屋主人加藤惣吉氏が、經營の主任に當つてゐる旨を記してある、そこで私の推斷が誤まつてゐないと思はれば、カミウチ、又はカミグチの、土人稱呼は、カミカウチを約めたものであるにせよ、之に對して、上高地なる宛字を使つたのは、明治三十八年、林道が開けて、路がよくなり、温泉株式會社が、設立してから、後であらう、即ち同じカミカウチにしても「神河内」が私に依つて明治三十六年に始めて用ひられ、「上高地」は温泉會社に依つて、三十八年以後に、用ゐられたものと思はれる、併し同じ温泉宿にしても、五千尺旅館の丸山氏の如き

は、今でも、神河内の文字を用ひ、上高地とは、言つてゐないやうである。

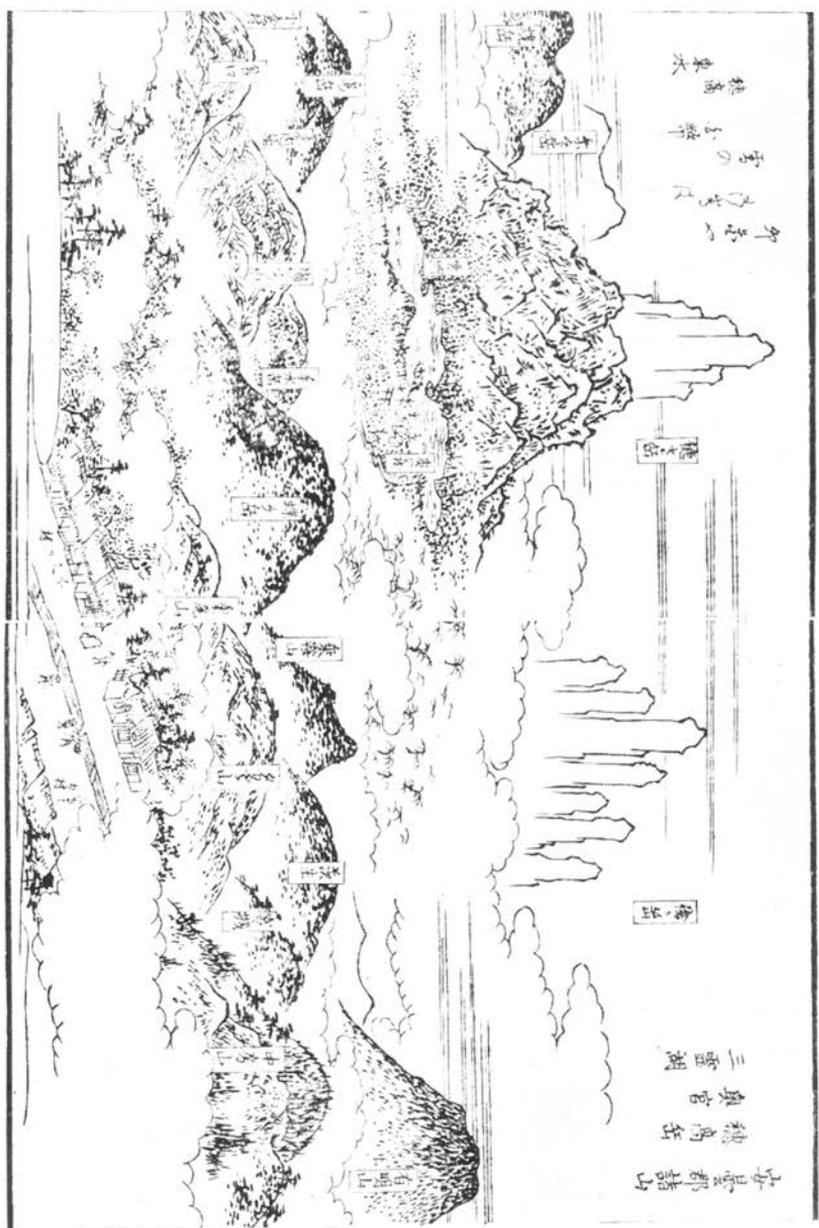
併し神河内の文字が先に出て、その地名に、相應の根據があるにせよ、又上高地の文字が後出して、實際の地形と相反するにもせよ、要するに、兩方とも宛字に過ぎないとすれば、結局は、宛字の適不適の問題でしかない、私は、その範圍の検討で、満足するものでないから、古文書舊記録に、神河内、又は上高地、或はその以外の文字で、書き現はされてゐることはないかと、多年それを搜索してゐたのである、明治八年、吉澤好謙撰するところの「信濃地名考」にも、安曇の解はあつても、神河内（又は上高地）は無い、近くは明治年間の大著述、吉田東伍先生の「大日本地名辭書」にも無い、ウエスタンの「日本アルプス」は、素より漢字検索の足しにはならぬが、「カミカウチ」の地名すら無い、そして、私は信州の人でないから、彼地の官府、又は舊家の古記録などを、披閲する便宜に恵まれてもゐない、一に坊間の古本（刊本）に依るより外はないのだが、偶々友人高頭仁兵衛君撰する所の「日本山嶽志」（明治三十九年刊）を閲して、穂高嶽の項目に、高島章貞といふ人が、文政丁丑（文政元年にして、文化十四年に當る）の夏、穂高嶽に遊んだ紀文（漢文）を挟むであるのに氣が付いた、尤も穂高記事は、高頭君の原稿を、私が潜越ながら、檢閲増訂を加へたときにも、一讀して、おぼえてゐたものであるが、これは穂高嶽記とあつても、實は上高地の記なので、嶽の記事では無い、上高地の記録としては、私の見聞する限り、最古のものであるが、それにすら、肝心の神河内、又は上高地の文字は、一も見當らない、併しこの紀文を高頭君は、何處から搜出されたか、それが解れば、自然、問題の焦點に觸れて來るとおもつて、同君に訊したところ「善光寺名所圖會」から採つた旨を、教示せられた。

これは、私には意外であつた、名所圖會類には、可なり多く目を通してゐた筈の私も、善光寺とは氣が付かな

かつた、のみならず、私は生憎善光寺名所圖會を、所藏してゐない、東京切つての有名の書肆、淺倉屋の令嗣、吉田直吉君（日本山岳會員）に買ひ入れ方をお頼みしたら、幸ひに、藏品があると言はれて、同君から一部送付を受けた、取るも遅しと、開卷して見ると、その第一卷に、正に高島章貞の紀文があるのみか、鎗ヶ嶽と穂高嶽の挿繪もあるし、又穂高嶽の記事中に、正しく「神河内」なる文字を見出した、たとひ「かんかうち」といふ振假名はあるにもせよ、上高地で無くて、神河内であつた、私の悦びはどうであつたらう、有つたぞ、有つたぞ、と本を抱へて、子供らしく書齋の中を歩き廻り、庭へまで飛び出して、繰り返へして讀んだ。

善光寺名所圖會に就いては、吉田さんも、名所圖會の中では、少ない方でせう、と云はれた如く、敢えて稀本とは謂はないが、流布は多い方でない、本書の著者、姓は豊田、名は利忠、庸園と號す、美濃國今尾藩の人、文化の頃、京洛の人、秋里籬島に、木曾路名所圖會の著作あつて、大いに世に行はれてゐるが、圖會には、京師から江戸に到るまでは勿論、傍ら香取、鹿島、日光、筑波にも及んでゐるにも抱はらず、善光寺に至つては、洗馬の岐途から、看過し去つて、之を載せないのは、遺憾であると言つて、本稿を起した趣を自序に述べてゐる、序文には、天保十四卯とし仲秋日とあるが、全部五卷が出版されたのは、嘉永二年の秋である、著者自身で、圖畫を描き、春江忠近なる人にも、補畫を依頼し、彫工は、一と五の卷を、名古屋の中村屋治助、二と三の卷を京師の井上治兵衛、四の卷を名古屋の眞崎普房に、囑したことは、奥附で明らかである、鎗ヶ嶽、及び穂高嶽、並びに神河内の一部分なる靈湖、燒嶽、乘鞍嶽を遙かに示した問題の圖畫は、著者自身の筆に成る、神河内にしても、著者自身が、游行したわけではなく、聞き書きに過ぎないから、圖畫も空想畫であるが、鎗や穂高が、九天高く聳ゆる御幣の如き形で、あらはされてゐるのも、意味があり（殊に御幣岳の名を有する、穂高にあつては）鎗ヶ

○穗高嶽（奥岳）も安曇郡西の方飛弾園小坂合（みけ）作（み）の靈岳雲を凌（ま）ぎて  
幣帛のびやく中空に秀（ひ）く群山（群）蒼々（蒼々）見（見）まは神号も爰（爰）小檜（小檜）嶽  
に三乃湖水あり上他中他俱小大さ九徑百四五十間檜二百間を（を）考  
石岸を繞（繞）りて自然の林泉を成（成）せり魚多くあり（あり）常小筏を（常）浮  
糸（糸）く私人等（私人等）も休（休）渙（渙）る大なるものもま（ま）尺四五寸斗下他も大（大）さ上  
池の半（半）とい（い）石南花他の園（園）小繁（小繁）茂（茂）して花の色殊（殊）と（と）穉（穉）と（と）以（以）て（て）夫（夫）より  
東北の廣野（廣野）を神河内とい（い）ひ神ヶ平（神ヶ平）とい（い）ひく柵林（柵林）あり湖（湖）を  
に小洞（小洞）あり糸（糸）よ本の皮（皮）を剥（剥）く枝（枝）をりく是（是）を竹（竹）に大靴（大靴）の代（代）小  
用（用）とい（い）近（近）き以（以）穂高村の鑿（鑿）師高（高）寫（寫）氏友（氏友）達小誘（小誘）引（引）く彼（彼）灵（灵）岳  
小登（小登）り其地理（其地理）を写（写）し且（且）一章（一章）の文（文）を作（作）せり



「善光寺名所圖會」第一卷にある鎗・徳高及び神河内等の挿繪

嶽が、七本槍になつてゐるのは、一寸駭く、別に本文第二卷には「仁科の奥、高瀬川の水源、鎗ヶ嶽の麓に、湯股澤水股澤の二谷あり」として湯股澤で、霰石を採る聞き書きや、圖畫がある（この分は春江補畫）霰石のことまで書いてゐるのは、これも意外である。

それは、それとして、同書所載、穂高嶽並びに神河内の記載全文を、左に引く。

穂高嶽奥岳は、安曇郡、西の方、飛驒國に坂合ふ、仰ハ、靈岳雲を凌ぎて、幣帛のごとく、中空に秀て、群山麓に兒立す、神號も、爰に據か、嶽に三乃湖水あり、上池、中池、俱に大さ凡徑百四五十間、横二百間ほど、奇石岸を繞りて、自然の林泉を成せり、魚多くあり、といふ常に筏を浮めて、仙人等、これを漁る、大なるものは、壹尺四五寸斗、下池は、大さ、上池の半といふ、石南花、池の周に繁茂して、花の色殊に麗しといへり、夫より東北の廣野を、神河内といひ、神ガ平ともいひて、柳林なり、湖邊に小祠あり、祭にハ木の皮を剝て、枝をもて是を叩き、大鼓の代に用といふ。（振假名は原文のま、但し原文に句點なし）

附記して云ふ、明治二七・八年の頃か、野崎左文翁の編述せられた「日本名勝地誌」といふ本が、たしか十卷ぐらゐ、博文館から出てゐる、そのうちに、穂高嶽と神河内（といふ文字を用ゆ）のことが書いてあるのを後で發見したが、凡べて、前記「善光寺名所圖會」の引き寫しであるから、藍本たる「善光寺」の方を擧ぐれば、それで凡べてを被覆してゐるわけだ。

序でを以て、高島章貞の「穂高嶽記」も、高頭君の本に、全文轉載されてあるけれど、原本の方は、返り點や、送り假名が付いてゐるから、左に原本のまゝを掲げる、原文は、前掲穂高嶽の終尾に、行を改めないで、直ぐ接續してゐる、只だ併し、原文に高島等一行が「彼靈嶽（穂高のこと）に登り」とあるが、實際穂高に登山したか

否かは、頗る疑はしい、「穂高嶽記」とありながら、一言も、登山に言及してゐないのである。

「近き頃、穂高村の醫師、高島氏、友達に誘引て、彼靈岳に登り、其地理を寫し、且一章の文を作れり。

穂高嶽記 安曇穂高里人、高島章貞。

文政丁丑之夏、詣於穂高嶽、尋穂高神社之舊趾、夫穂高嶽者、我信中當正西、而極深接境于飛、蓋上古綿積神之子、穂高見命、雄據之地也、其神孫數世、至今存此焉、岳麓有稱三十塚者、號田代、穂高見命之後、阿曇連壘世墳墓之地也、岳之西北、自翁岳麓、岳之正南、至燒岳麓、其間六七十里、岳之正東諸岳之間、夾梓河、而地方七八里、若十二三里計、平坦莫高低、往昔生民居於此、而爲稼穡云、此岳乎、巍々然秀天外、雖盛夏積雪不消、白雲漠々常不見巔、青天朗日、偶然峻峯現、極目望之、危削特立似白幣、巖々神跡、可仰哉、岳之足有三霧湖、大小不レ等、上者湖面清冷、水底砂石可レ數、中者奇石怪岩如鳥獸、如累卵、如墻壁、如座榻、石楠花廻其畔、下者湖邊樹木陰森、雖白日、朦々乎、乘桴遊觀湖中、嘆山水之佳境、慨然發聲、賞揚不止、懷舊之際、卒然巒端雲起、湖面霧迷、微雨打面、昏黑不辨前後、惘然收息、躡偏于桴上、小時、而雲滅、霧散、雨亦晴、深山之躡相、從來雖若斯乎、更又如三神靈、嗚呼我穂高神岳、乾坤之精氣、其鐘於此乎、不爾然嶽與湖、何若斯神靈邪、何若斯絕景邪、其神靈、敬可遠、絶景清可近者、此神岳也、吁靈哉、景哉、斯述所レ觀、用以例記云。(原文には句點がない)

上述の如く、神河内が、既に約九十餘年前の刊本に記録せられてある以上、上高地なる文字が、それ以前、又は同時代の記録に所見があるかを知りたいのである、そして、もし無いとすれば、古來の稱呼として、神河内の方が正しいことを、私は主張する、況んや實際の地形に照らしても、穂高明神とその土地の垂跡の關係から言つて

も、神河内に、その意義が認められるに反して、上高地に無いに於いてをやである、假に明治となつて私の推定より早く、上高地なる文字が宛てられ、それが今日の如く、普及したとしても、神河内の有する歴史的優先権を争ふ資格は無い。

挿圖は「善光寺名所圖會」第一卷所載を複寫したるもの



上高地は神河内が正しき説 小島

三

## アルバータ遠征の追想(一)

三田 幸夫

去年の七月廿一日、箱根の富士屋ホテルで細川侯を中心に私達の小さな集まりがあつた。

早川種三君、田村静一君(舊姓橋本君)と私。横有恒氏は不参であつた。

仙石原で夕方迄遊んだ私達は、富士屋の十九番ホールナインティーンズと云ふ部屋で、始めて静かな落付いた自分達を發見した。ウイスキーの盃グラスを嘗めて居る裡に、漸く夏の夜は更けて行く。追憶談と、和やかな氣分が段々と私達を八年前の此の日の出来事に迄呼び戻して行つて呉れた。

其の日、アルバータの頂に立つた六人の仲間の中、横氏の不在を除いて、岡部長量、波多野正信の二君は私の渡印中、病に斃れ、既に永久に相見るの機を失つて居たのは本當に寂しい事であつた。

私としては、去年頃には、もう仲間同志が、ヒマラヤの追憶談位やつても好い位になつて居て欲しかつたのである。それが、加奈陀の山話をしやうとするのに、六人の仲間が、四人に減つて了ふと云ふ寂しい變り方であつた。

然し乍ら、私達にとつては、當時の思出と云ふものは、恐らく、再び経験の出来ぬ楽しいものとなるに違ひな  
し。

先日私は、短い時間ではあつたが、役員會の合間に、山岳會の圖書室で、久し振りに横氏と當時の事を語り  
合つた。

私達當時の仲間が寄れば、短い會話の中にもその時々細い事柄が一つ一つ、鮮明に頭の中に繰り広げられて行  
く様な氣もする。然し、それも時日の経過と共に、少し宛乍ら、段々と薄らいで行く事は否めない。

纏つて書いたものがない事は、如何にも残念に思つては居る事であつた。が、遠征直後ならば私達の誰しもが  
未だ充分にその當時の氣分に浸り得る状態にあつたらうけれ共、今となつては、仲々筆を運ばせる勇氣を持合は  
せるものがない。

大體、アルバータ登山の成功と云ふ事は、私の口から云ふのも可笑しいが、實際問題として、當時としては、  
吾國の海外への最初の遠征登山の成功で、立派な記録であつたものと確信する。その纏まつた記録がなかつた事  
は誠に遺憾に堪えない。

當時、遠征直後、その記録は、横有恒氏に依つて纏めて發表される筈であつた。所が、加奈陀から歸つて見る  
と、歡迎會とか、講演會だのと云つて、公私頗る多忙を極められた時日の内に、何時とはなしにこの記録の事は  
立消えになつて了つた。

只、大毎、東日紙上に表はれた加奈陀からの通信や、歸朝後の横氏を始め隊員達の各地でなした講演を通じて、  
その登山の經過の大略が發表されたのみで、全體としての纏まつた記録としては私が加奈陀山岳會に送る爲に大

略を纏めてその英譯發送方を故大島亮吉君に頼んだものがあつた丈であるが、之は遂に送られず原稿もそのまゝ行先不明になつて了つた。

山の雜誌としては、登高行第六年に楨氏と、私が短いもの二編を書いてあるに過ぎない。

一昨年、私が印度から歸朝すると、又、此の記録問題が再燃して、到々私が山岳會の楨、伊藤兩氏から説得されて書く事になつて居たが、突然再度の渡印で御流れになり、今度は立消えと思つて居た處、先月の役員會の席上、又此の話が持ち出されて愈々、此の九年前の登山記の一部が此の山岳誌上の幾頁かを拜借せねばならぬ様な仕儀に立ち至つたのである。

私にとつては、當時としては隨分の大がゝりであつたエキスペディションを、然かも、九年前の記憶を喚び起しつゝ纏め様とするには到底不適當な仕事であるに違ひない。然し乍ら、來年になれば、又、來々年になれば、その新鮮味も段々薄れて行くに違ひない。それに、私としては、今日は、愈々駄筆に鞭を打たねばならぬ立場に迄追込まれて居る事を告白する。

従つて、私の此處に書かうとするものは、或は途中で尻切れ蜻蛉に終るかも知れない。又、出来る丈忠實に、當時の材料と、記憶を纏めて見る心算では居るが、勿論、纏まつた記録等は思ひもよらない。只隊員の一人に依る一篇の追想記に過ぎないものであると云ふ事を御断はりして置き度い。

### 計畫の起りから出發迄

アルバートタの發見者は、細川護立侯であつた。と云ふのは、こうである。

一九二四年の暮、赤倉のスキー行からの歸途、東窓から淺間がよく見える邊の頃、細川侯が一行の横氏達に示したパーマー及びソーリングトン著 *Climber's Guide to the Rocky mountains of Canada* の巻頭にあつたアルバータの寫眞こそ吾々の仲間の眼に映つたアルバータの最初の姿であつた。

ロッキーにも未だ「恐るべき未登峰」と云はれる程な峻峻な山岳が残つて居る。果して日本人の手に負えるだらうかと云ふのが事の起りであつた。

話は、翌年の五月になつて急轉直下に進行した。帝國ホテルで細川侯を中心に吾々六人、それに大毎の城戸元亮氏が會して大毎、東日も後援すると云ふ約を得、名目は日本山岳會主催、大毎、東日後援と云ふ事に決定した。話は薄々あつたにしろ、計畫が決定し、隊員も揃ひ、登山具、装備品等迄具體的にととのえると云ふのは並ならぬ仕事である。

人間、金、暇。手つ取り早く云へば此の三つのファクターは相關聯して必要缺く可らざるものである。

私達の場合には、話が本當に具體化してから、出發迄に僅か一ヶ月と云ふ間に、此の三つの要素が先づ申分ない迄にととのつた譯である。慾を云へば、軍隊に居た大島亮吉君が参加出来なかつた事は呉々も遺憾であつた。

隊員としては横、橋本、早川、岡部、波多野と私の六名。各々親しい山仲間であつた。そして大體に於て、皆、山に對する心と、身體との準備は出来て居た。

只、技術の點に於て、横氏を除く、他の五名は、外國の山に對する經驗と云ふものがなかつた。従つて、氷河と云ふものに對する知識も、岩らしい岩と云ふものに對する經驗も持ち合はせて居なかつた。が、只、當時、勃興しつゝあつた「冬の山」と云ふものを通して、或る特種のものとは皆揃つて持合はせて居た。之が果して大いに

役立つ事は後になつて解つた事である。

私達は忙しい時間を割いては寄り合つて細い<sup>こまか</sup>登路の研究迄した。登路の研究と云つても、その材料は極めて乏しかつた。

地圖としては、幸ひ、アルパイン・チャールナル二二八號に附隨して居た、加奈陀陸地測量部作製の六萬二千五百分の一の地圖が唯一の手頼りであつた。

文獻としては、ノーマン・コリー及びパーマーの左記の様な簡単な印象記が、只私達を嚇かさうと試みたのに過ぎなかつた。

「マウント・コロンビヤの北に當つて他の峰が発見された。夫れはマウント・アルバータであつて標高は一三、〇〇呎を越ゆる。此の山はマウント・コロンビヤと異り岩峯で頂上は平である。頂上は驚くべき懸崖を以て圍まれ特に其の北西面は豪壯の様である、即ち此の面はアサバスカの溪谷より殆ど八、〇〇〇呎に近く直立してをる。」  
「マウント・アルバータはマウント・コロンビヤの北十哩マウント・ウーレーとアサバスカ河との間にある、

未登攀なれども恐らくはキャナディアン、ロッキー中に於ての最も困難なる岩峯の一たるであらう。其の外観は極めて壯大であつて何れの側面も近寄り難く見ゆる。」(以上登高行記載横氏の譯文引用)

そして、その姿としては、前述、パーマーの案内記の巻頭の寫眞が一片あつたのみで、それは成る程恐しく近付き難い様な山貌を持つては居るが、又、何とかならぬでもなさ相な、漠然たる希望は皆の頭の中にも、御互に秘めて居た様であつた。

アルバータ自身に關する記録、材料と云つては全くそれ位のものであつたから、私達は加奈陀ロッキーに關す

る凡ゆる記録を片端から研究して準備を進める唯一の手懸りとした。

其の間の詳細に關しては登高行記載の楨氏に依る専門的な記述を参照せられ度い。

## 準備の開始

誰にとつても未知な土地丈に、それに伴ふ色々な不安も感じると同時に、又、それに倍加する緊張味が準備と云ふ仕事を小氣味好く進行させて呉れた。

私達は、丸ノ内の仲通り三號館にあつた久保田事務所の好意で其處に登山隊の本部を置いた。六人の隊員は、計畫、交渉、通信、登山具、寫眞、醫藥其の他に亘つて仕事を分擔した。

大體途中の時日を出來る丈節約して、往復二ヶ月、山中に一ヶ月、そして出發は六月十九日横濱出帆のO・S・K。パリ丸と云ふ極めて忙しい豫定であつた。

登山時期として、色々な事情から七月を逸する事は非常に損であると同時に、この計畫が先方へ洩れて、無意義な競争者の現はれる事は面白くないので、かくあわたゞしいスケヂュールが決定された譯なのである。

## 食糧品

私達は、食糧品に就いて可なり頭を悩ました。之は當然な事である。如何なるものを主要食として攝るか云ふ問題である。

楨氏は外國に於ける登山の唯一の經驗者として、食糧は出來る丈その土地のものを攝るべしとの意見であつた。

加奈陀なら、當然西洋食となる譯である。之に對して、私と、確か岡部君だつたかが反對の意見を持つて居た。米を常食として居る吾々が、相當の期間、之を完く抜きにして身體が続くかどうかと。私達二人は、今にして思へば滑稽な話だらうが、當時矢張り、味噌汁や、澤庵の未練から去り難かつたのであつた。

結局、一日三食の内、一食分の日本食糧品が準備される事に決つた。米も、味噌も、醤油も、漬物も吾々と加奈陀の山中迄行を共にする事になつたのである。

嗜好品、酒類、其の他勿論充分に用意された。

## 登 山 具

私達にとつては先づ商賣道具と云つた重要性を持つものである。が、之は平常使用して居るもので可なり間に合つた。

靴丈は、山崎をして特に念を入れて、トリコニー鋏、クリンケール鋏を打つたものを夫々一足宛作らせた。他に岩壁登攀用に、麻裏のクレッテルシュー一足宛、スタイグアイゼン、並びに靴修繕用の凡ゆる道具材料迄用意した。

繩も大小合はせて、約一千呎。それに捨て繩としてのザイルリング及び釘ナゲルを數種類用意し、不足の分は確か片桐で作らせた。

ピッケルは、幸ひ皆、自慢のシェンクを一本宛持つて居た。勿論、豫備のものも數本用意された。

天幕は、大體慶應山岳部のもので間に合はせ、ベースキャンプ用としては、震災の時米國から寄附された赤十

字の大型圓錐型のものを使用する事にした。之は、中に、六人の折疊み寢臺を並べて餘裕ある位の廣さで、登攀の勞苦、疲勞を充分に回復する事の出来る様に考慮された譯である。

寢具としては、當時私達が、雪の山の露營用として使用して居た馴鹿の皮の寢袋を携行する事にした。當時としては、之が最高級の携帶用防寒寢具であつた。

總ては、高度の低い加奈陀、それに夏季の事であるから、雪や氷に對する準備としては、ヒマラヤ遠征のもの等に較べれば大分簡略に濟ます事が出来た。

又、アルバータを中心とする地域が國立公園地帯となつて居る關係から、或は、場所に依つては薪木を得る事が出来ぬかも知れぬと云ふ豫想の下に炊事に石油焔爐を使用する事にした。

その他、細々した物迄、<sup>ニまぐ</sup> 匆忙の裡乍ら、充分慎重に準備された。

### 寫眞に關するもの

記録の一つとして最も重要な役割を演ずべき寫眞に就いても色々考究された。之は、岡部、波多野兩君の擔いで、寫眞は總てベースキャンプですつかり處理し得る様な細い藥品から、内部で二三人の人が仕事を出来る程な携帶暗室に至る迄用意された。此の準備は、望遠レンズの利用と相俟つて、登路研究等に可なり役立つた。

後援者側の大毎、東日は此の行を活動寫眞のフィルムに收め度い希望を充分に持つて居た。之は半ば新聞社の事業である以上當然の事ではある。そして、新聞社側としては、撮影技師を、同行が困難ならば麓迄でも、若しも、それも駄目なら最後の停車場迄でも同行させ度い意嚮であるとの事を傳へられた。然し之は大いに考ふべ

き問題であつた。と云ふのは、本來、相當の外國の山へ、然かもそれがどんな困難に遭遇するか豫測も出來ぬ様なものへ向ふ場合、登山隊員それ自身の撰擇が既に頗る難事である。餘程氣の知れた者同志の結合でなければならぬ。此の意味に於いて、突然、御互にとつて未知の人が参加すると云ふ事は、その人が假令、登山と云ふものそれ自身には一緒にならぬにしても、相當の期間、行を共にせねばならぬと云ふ事は可なり考へものである。私達は、此の問題ははつきりと斷はつた。私達は寫眞に撮られる事より、登頂の爲には出来る丈餘計なものを排除し度かつたのである。

然し、私達は、活動寫眞の機械を携行する事丈を餘儀なくされた。但し、何時でも、邪魔になつた場合は、捨て、來ても宜しいと云ふ了解を得た。

準備はかくして著々進行した。其の爲學習院、慶應山岳部關係の人達を始め、可なり廣い範圍に互る人々からの支援、激勵を受けた。新聞社が關係して居る丈、此の行は可なり華やかに喧傳された。仲間同志が、リュックサックを擔いで、呑氣な馬鹿話を交はし乍ら上野や新宿から出かけて行くと云ふ山旅の様な譯には行かなかつた。出發の日が迫るに連れて、送別會の數が矢鱈に殖えて行く。之を斷はつたり、受けたりするのに一苦勞した。旅券や、荷物の通關は新聞社が骨を折つて呉れた丈あつて極めて簡単に濟む。

到々出發の日がやつて來た。大正十四年、六月十九日である。

東京驛、横濱の阜頭。その出發の情景の賑やかさは御話にならぬ。書けば新聞記事そのままになり相だから之は省略させて戴き度い。只、熱心に見送つて呉れた先輩知己の激勵の聲や姿は今以て忘れ得ぬ感激の思出である。

## 航海

O・S・Kの巴里丸は、私達六人に乗せて薄曇りの静かな横濱の海を後にした。最後に挨拶をしようと居た富士も、丹澤も生憎姿を見ぬ裡に船は太平洋へ出て了ふ。

六人は漸く連日連夜の繁忙から解放されてほつとする事が出来た。そしてシャトルに着く迄の十二日間、私達は好く眠り、好く喰ひ、大きな仕事を前にして絶好な休養の機會を得た事になつた。

仕事としては時々の各自分擔の事務整理、登山具の點檢等がある丈で極めて長閑な生活の連続であつた。

出帆の二日目、御渡歐の途中、印度コロンボに御寄港の秩父宮殿下から

「カナディアン・ロッキードの成功を祈る」

と云ふ電信を戴いた一行は、感激措く處を知らず、登頂の決意は愈々固くなつた。

七月一日、元氣一杯、私達は北米沙市の阜頭に最初の土を踏んだ。

## バンクーバー

沙市、フライ・ホテルの一夜は、先を急ぐ私達にとつて決して短いものではなかつた。明くれば二日、朝の八時には私達は宮崎・東兩氏に送られてバンクーバー行の車中であつた。

午後二時、バンクーバーに着くと、直ぐホテル・バンクーバーに陣取つて準備の一端にとりかゝつた。

同地大陸日報の山崎氏や、佐藤副領事の助力を得てどしどしと豫定通り仕事を進める。

## 始めての名乗り

バンクーバー到着早々、横、橋本兩君が、第一番に同地の商業會議所に於て、B・C・M・C（ブリティッシュ・コロ  
ンビア・マウンテン・ヤリング俱樂部）會長、及びC・A・C（加奈陀アル・パイン俱樂部）同地支部長等と會見した。  
そして私達の目的がアルバートである事を始めて發表したのである。

彼等は、口笛を鳴らして、驚きの表情を示した相である。

其の後、彼等が發表した私達に對するステートメントの一節に曰く、

「一行を迎接したるB・C・M・C會長、C・A・Cバンクーバー支部長等は、何れも一行がその登山の技倆を發揮  
すべき場所として加奈陀を撰んだ事を喜ぶ。又、一行が登山の手初としてアルバートを撰んだ事は、一行の大野  
心のある處を示すもので、同峯は加奈陀ロッキー中の最も困難なる山であり、最高峯と云ふ譯ではないが、その  
山嶺を極はめることは非常に困難とせられ、實際登山家の技倆と、忍耐力とを試練すべき絶壁であり、今日迄何  
人もこれを征服する事が出来なかつた云々」と。

準備は着々として進行した。

三日の夜、日本人會の歡迎會を済まして、横氏一人がヂャスパールへ向つた。最後の停車場の交通、食糧品の補  
給等と云ふ點からの重要性に就いて、その實情を一行に先立つて充分に調査する必要があるからである。

私達は日本から携行した荷物の整理を續けた。

五日の夜ヂャスパールの横氏から

「All provisions here except photos」

なる簡単な電信が這入つた。

六日早朝から大活動が開始された。銀行との打合はせ、食糧品、諸雑品の買入れ積出し、活動寫眞器の試験映寫、フィルムの註文等文字通り眼の廻る様な繁忙の後に、私達は九時五十分の列車に乗る事が出来た。

汽車は殆ど廿四時間を走り続け、翌七日の午後九時四十五分、六人のものが、漸く揃つて最後の地點たるチャスパーに落ち合つたのである。

然も、一行は溢るゝ許りの元氣と、燃える様な覇氣に充ち充ちて居た。

そして、此の日初めて、吾等より先に同じ目的を志す者のあつた事を聞いて胸は厭が上にも躍らざるを得なかつた。〔續く〕

# 南湖大山の記

田 中 薫

## 前 言

昭和八年九月上旬私は會員鹿野忠雄君と共に左の日程で南湖大山に登つた。此の小文は山地を跋涉中、特に眼に觸れたる事物、心に浮んだ事柄を其の儘、正直に書き止めたまでのもの、云はば手帖の整理。紀文ともつかず、固より研究の發表とも云へぬものである。尤も氷河の痕跡に關する觀察は別途に一論文を草したが、(田中薫、鹿野忠雄「南湖大山々彙に於ける氷蝕地形に就いて」地理學評論 第一〇卷第三號昭和九年三月) 茲にはそれに洩れた處を主として書き纏めて置くつもりである。

### 登山日程

九月八日、臺北―羅東(泊)(快晴)

九日、羅東―(營林署鐵道)―土場―(徒歩)―シキクン駐在所(泊)(晴後曇)

十日、シキクン―クツシャ駐在所―ムルロアフ駐在所(泊)(雨後晴、夜に入りて再び雨)

十一日、ムルロアフ滞在(雨)

十二日、ムルロアフ―ゲリロー山―バドツノフ山北方、昭和八年五月建設陸地測量部第七號三等三角點附近に野營(晴後

南湖大山の記 田中

驟雨)

九月十三日、野營地―バドツノフ山―ゴングバユウ山―南湖大山北峯―アナツケ野營地(泊)(快晴)

十四日、アナツケ滞在、南湖大山主峯登山(快晴)

十五日、アナツケ滞在、南湖大山東南峯・タウサイ山登山(晴後雨)

十六日、アナツケ滞在、南湖大山北峯・東北峯・東峯登山(快晴後小雨、夜に入りて荒模様)

十七日、暴風雨の爲、アナツケより南澳蕃岩小屋に避難

十八日、シラガン溪を降り、タケジン附近にて普通登路に合し、キレットトイ野營(午後晴)

十九日、キレットトイエキジュウ駐在所―ビヤナン駐在所(泊)(快晴)

二十日、ビヤナン滞在(晴後曇)

二十一日、ビヤナン―シキクン―土場(泊)(曇)

二十二日、土場(颯風の爲鐵道一部不通)羅東―臺北(快晴)

地圖、臺灣總督府警務局三十萬分ノ一「臺灣全圖」、同五萬分ノ一、蕃地地形圖、「ビヤナン社」シルビヤ山」

同行者、鹿野忠雄、トタイ・ブテン(アミ族蕃人で、内地で教育を受けし青年、鹿野君の助手として参加)、岸本巖(タイヤル族蕃人巡查)、蕃人擔夫十名

## 一、南湖大山への傾倒

臺灣には僅か二十三萬の内人しか住まぬ處へ四百三十萬からの本島人が居り、更に十六萬と云ふ蕃人が居住してゐる。單に住民に就いて云つても我々には歐米以上の外國である。蓬萊の島と稱し、誰人にも何んとなく南懐しい感を起させる臺灣であるが、その上に三千メートルを越ゆる高山を五十幾座も載せてゐると云ふ事が近年

漸く明かにされるに至つた事は一つのニュースとしても、山人の血を湧すに足るのであつた。私などは此の蓬萊の島が、我國の領土であつて、關稅の障壁もなく、自由に出入り出来る處であると云ふ事だけでも寧ろ奇蹟とさへ思ひたくなるのである。今度、臺灣を視察する機會を得たので、どれか一山位は登つて歸らねばと願つたのは云ふまでもない。

臺灣の山地を知る事に於いて恐らく第一人者と云はずとも、これに最も近いと云ふべき會員、鹿野忠雄君の先導を得た事は私にとつて非常な幸であつた。同君は生物分布の調査を主なる目的とし、去る昭和八年五月、臺灣に渡り、紅頭嶼に病み、私の渡臺した八月下旬には既に全快して、臺東から知本チホ越えて北上の途にあつた。私が平地を一巡して臺北に歸つた時は同君も一息入れてゐる處であつたから、同行の約は都合よく成立した。

茲で私は何故に初の渡臺に當り、餘日の全部を南湖大山にのみ當てたかと云ふ事に就いて一言して置く必要がある。

第一に風景の問題である。始めての臺灣であり、一つしか登らぬからには一つ代表的な風景を持つ山をと願つたのは云ふまでもない。ところが臺灣の山は決して一樣ではない。極く大まかに考へて二方面がある。一つは南北の氣候的相異―南方は熱帯、北方は暖帯、南方の山は熱帯林から始まつて頂上に至つても未だ森林帯を脱しないが、北方の山は灌木帯に首を突込んでゐて、内地の高山と餘り變らぬ。第二は山容であるが、銳角の尖つた峯と、平鈍な圓い山とがある。前者はアルプス型のピラミッド（中央尖山の如き）と風化削剝作用に依る殘丘（大霸尖山の如き）の類で、支那人はちゃんと「尖山」「大山」の二語で區別して居る。

北部山地に入らんか、南部に走らんか、尖山に登らんか、大山に分け入らんか。趣味に委せる他はない。我々

には此の他に、も一つ條件があつた。それは氷河の香を嗅ぐと云ふ事であつた。何の邊に一番其の香が高いであらうか。事茲に至ると北部の山を、少しでも寒い山を目指さねばならない。大山と云ふ類の山々には平坦面や、疑問の窪地がある。五萬分ノ一蕃地地形圖でも凡その見當はつく。そこで自ら問題となつて来るのは南湖大山でなければならぬ。

私は平地の旅に出る前、臺灣山岳會の沼井鐵太郎氏に山のプランをお委せして置いたら、矢張り南湖と次高を入れた案を考へてゐて下すつた。鹿野君も南湖程しつくり来る山は少い。二度目だが此の山なら又行つてもいと云ふ。そこで私は此の二人の臺灣通の言に悉く従ふ事になつた。

## 二、氷河の香

會つて氷河の流れた跡と云ふものには確かに一つの香がある。我々は少しでも此の香の漂ふ處に行けば充奮する。その香を嗅げば直ぐ有頂天になれる。そこでこの香を發するのは何物であるか。圈谷(カール)、堆石(モレーン)、氷河擦痕(スコリーング)、羊背岩(ロシユ・ムートネ)又は瘤狀岩(ルンド・ヘッカー)、U字谷等と、地形學上の名稱は數々あるが要するに重い氷の層に磨かれた何處となく鈍い圓味を帯んだ岩肌、水を掬する掌の様に可愛く窪んで、その中に大事さうに残雪を受け止める彼のカールを連ねた遠山の眺め、秋の山の音もない谷に立つて邊りの岩壁を見廻す時、夕陽を浴びて山頂に坐す時、此等氷の氣配を感じたならば、そこに如何に永遠の美しさが湧く事だらう。

私は少年時代より小島烏水氏の文筆に教へられ、多くの氷河學者の論争を聞きかぢり、日本アルプスには既に

その美しさを見てゐる。そしてこの美を求むるの餘り、想像の翼は無限に擴がつて行きつゝある。東北地方や北海道の低い山にもカールが発見される。樺太や、千島に行けばスコットランドの様にカールは海岸に臨んでゐる程かも知れぬ。逆に南方に向つては雪線は次第に高くなつて、四國、九州の山々の上は素通りするが、若しや臺灣の高山は此に觸れてゐるのではあるまいか。此は私の空想ではなく、従つて創見でもなく、既に先學の暗示する處なのである。

矢部長克博士に依れば、臺灣海峡は陥没地溝帯であつて、支那側にも臺灣側にも「溺れ谷」 Drawned Valley が發達してゐる。下淡水溪の溺れ谷は海面下六〇〇メートルの深さまではつきり判つてゐる。それ故曾つて臺灣島には少くとも現在より六〇〇メートル以上高かつた時代があつたと想像される。「溺れ谷」と云ふものは海底沈積物に依つて少しづつ埋められて行くものであらうし、最近の隆起は二〇〇メートル程に達してゐるといふから、臺灣島の高さを現在より一、〇〇〇メートル位高かつたと見るのは一應不當ではない。

早坂一郎博士は現に、臺灣の高山の曾つての高さは五、〇〇〇メートル内外で、熱帯地の雪線に觸れてゐたものとなし、既往に於ける氷河の存在を肯定された。但し、熱帯性風化削剝の激甚なると、臺灣高山地帯を構成する地質が崩壊し易い粘板岩や砂岩であるから氷蝕地形が残つてゐるといふ事は望めまいと稍絶望的想像を註(1)されてゐる。

併し、早坂博士の想像には臺灣島が島全體の運動として昇降したものと云ふ假設が必要である。若し昇降運動が部分に依り異つて働いてゐるとすれば果して五、〇〇〇メートルを越える高峯は臺灣の脊梁全體に亘つて發達してゐたか否か。臺灣の高山は氷河時代に於いて最も高かつたか。部分的には現在の方が高いのか。その邊は甚だ疑問なのである。

實際の水蝕地形に就いては鹿野君が昭和六年に次高山に圈谷を發見して是を報じ、その他にも疑問とすべき地形の多い事を述べたのが先づ當初である。<sup>(註(1))</sup>

註(1) (1) Yabe, H. & R. Tayama: A Cartographical Study of the Submarine Relief of the Strait of Formosa.

[Records of Oceanographic Works in Japan, vol. 1, no. 3, 1929]

(2) Yabe H. & R. Tayama: On Some Remarkable Examples of Drowned Valleys found around the

Japanese Islands.

[Record of Oceanographic Works in Japan, vol. II, no. 1, 1929]

註(2) 早坂一郎「地形及地質に現れた臺灣島近代地史觀」臺灣博物學會々報、第十九卷第一一六頁(一九二九年)

註(3) 鹿野忠雄「臺灣高山地域に於ける二三の地形學的觀察」地理學評論、第八卷第三號(一九三二年)

斯くて私達の此の山旅は氷河の香を嗅ぎ求める行となつた譯である。

而も此の覺束ない、併し、多少期する處のあつた山行は果然次々と姿を現はした氷河の氣配に依つて豫期に數倍した亢奮を以つて終始したのである。私は日程に従つて此の久遠の過去に連る美しさを記して行かうと思ふ。

### 三、氷蝕地形

#### 1. 次高山脈のカーブ

それは先づムルロアフ駐在所の雨後の展望から始まる、此の駐在所は南湖大山から北方、大平山に連る稜線(臺灣では「尾根」「山稜」を「稜線」と云ふ。以下此の語を用ふ)上、二、三五〇メートル程の處、材木の跡の開放された山の端に建てられてゐるから雨に降り込められ、霧に巻かれた十日の夜から十一日の夕にかけては本



バドツノフ山北方の緩傾斜面、バドツノフ山北面より北望 田 中 薫



シラガン溪源頭の氷河性谷壁と堆石及び捨子石 田 中 薫



南湖大山主峰とカール1、下部に堆石の一部見ゆ

田 中 薫



シロシマハヤヘン

田 中 薫

當にうすら寒く、物悲しい、シベリヤ流刑地の様な感がしてゐた。處が一度亂雲谷に沈み、夕空が冴え返ると、此處の眺めはまたなく良いものであつた。次高山から大霸尖山にかけて、残雪を止めないインディゴウの臥龍にも似た連山が展開する。翌日の朝はその最高點、次高山の山頂が先づ朝日を受けて、薔薇色に輝き、やがて日高く差し昇れば連山全體は濃い董色に包まれて、益々香はしい。

先づ次高山を見る。南峯(三、九三〇・九メートル)、北峯の二つに分れてその間に窓を開けた様なギャップがあり、そこから下方に大きなカールが斜北に向つて大口を開けてゐる。此が鹿野君の既に報じた次高カールなのである。次高北峯の頂の圓みも甚だ氣になるものであるが、更に北に移つて北峯より二つ目と三つ目の隆起部の間に矢張り此方に向いて開いた小型のカールがある。岩屑がカール底に集つて、残雪の様に白く見える。之れからずつと右に離れて古城の様にしたつのが大霸尖山(三、五七三・三メートル)である。若し氷河が此の次高山脈を蔽つてゐたとすればさしづめ此の峯は氷を首に巻き「ヌナタツク」としてその上に奇怪な頭を擡げてゐたであらう。だから此の岩峯の首の邊りには氷蝕擦痕があつてもよい筈である等と早くも想像を逞しくしつゝ飽かず眺める。

九月十二日、空は残りなく晴れて、朝風が清々しく渡つて来る。ゲリロー山(二、四五一メートル)へはずつと材木跡の草原が續き、次高方面の展望をほしきまゝにする。ゲリロー山を越えると直ぐ原始林に入り、檜・コマツガ等から次第に高度を増してニイタカトドマツの亭々たる喬木林になる。九、五七八尺と記す山林課の三角點を経て、その次の初めての小峯には陸地測量部が昭和八年五月に建てた第七號三角點と云ふのがあり、その西側の窪地に蕃人の狩獵小屋がある。夕方早々此の小屋に入つて落付く。小屋といつても樹枝と枯草で葺いた片屋根のもの、固より吹きさらしであるが、焚火が出来るだけ天幕より寢心地が良い。

ムルロアフから今日来た稜線の明日の南湖へかけて行く道は、登山路としては殆んど知られてゐないものであるが、それでも蕃路が斷續してゐて案外樂に歩けた。此のルートが若し良ければ南湖大山の裏路として開いてもよいから良く見て来てくれと臺灣山岳會から云はれて来たが、割合に遠いし、森林に遮られて展望も十分とは行かず、まだ開く程の事はないと思ふ。併し地形學上は頗る面白い稜線であるから後から別に記すことゝしやう。

## 2. バドツノフ溪の大カール(?)

偕て一夜を明すべき小屋のある窪地は稜線に直交する一つの斷層線に基くものゝ如くであつて、小屋からダラ／＼と稜線に登れば其處は一つの鞍部をなし、ニイタカトドマツの疎林を透して南方に黒々とした一面の大岩壁が立ちほだかつてゐるのが見える。此はバドツノフ山(三、三三三メートル)・ゴンゴバユウ山・南湖大山北峯(三、六三三メートル)に抱かれた此の山彙中で最も大規模な崩壊である。

現在に於いては、大濁水南溪の源流、バドツノフ溪(假稱)の作る浸蝕谷として發達してゐるが、その原形には圈谷の疑ひが充分ある。夕闇に暮れて行くのをジーツと眺めてゐると益々疑はしい。翌朝は早くから小屋を抜け出し、此の鞍部に頑張つて此の疑はしい最初の獲物をにらんでゐた。東天から金線を射て来る朝の光は、此の谷の西半面を照し、東半面に漆黒の陰影を作つてゐる。明く描き出された西壁の上部即ち、ゴンゴバユウ山から北峯へかけての稜線附近は稍々緩やかな窪地狀の曲線を現はし、美しく草が生え、その直下千刃の荒れ狂ふ浸蝕面に、棚狀をなして臨んでゐる。此の大崩壊の原地形はカールであつて、恐らく、浸蝕によつて數倍の大きさに擴大されて今日の如き豪快を極めるに至つたものであらう。そして先に述べた西壁上の棚狀斜面はカールの一部であ

らうと云ふ様な考へが何時の間に街頭の中に形づくられて行くのであつた。偕て蕃人の朝の荷分けも整つて、バドツノフ山の登りにかゝる頃には日は頭上に来て、谷の陰影は次第に狭められ溪底（臺灣では「澤」「谷」を溪と呼び、その流水面を「溪底」と呼ぶ。以下その語に従ふ）の構造が明かになつた。瀧が幾段か懸つてゐる。溪底に棚状を呈する部分が二ヶ所ほど連続的にあつて、その部分に於いては流路が著しく曲り、手前の岩塊にかくされて溪水が見えなくなる。どうも溪底の構造も普通の浸蝕谷の型ではない。私共は遂に此の大溪谷を「破壊されたる圈谷」と見る事に一決した。そしてバドツノフ山に向つた。愈々蔽地に乗り込んだ氣構え、如何に微細な痕跡でも見逃すまいと岩の面を一々探しつゝ進む。

### 3. 最初の氷蝕條痕

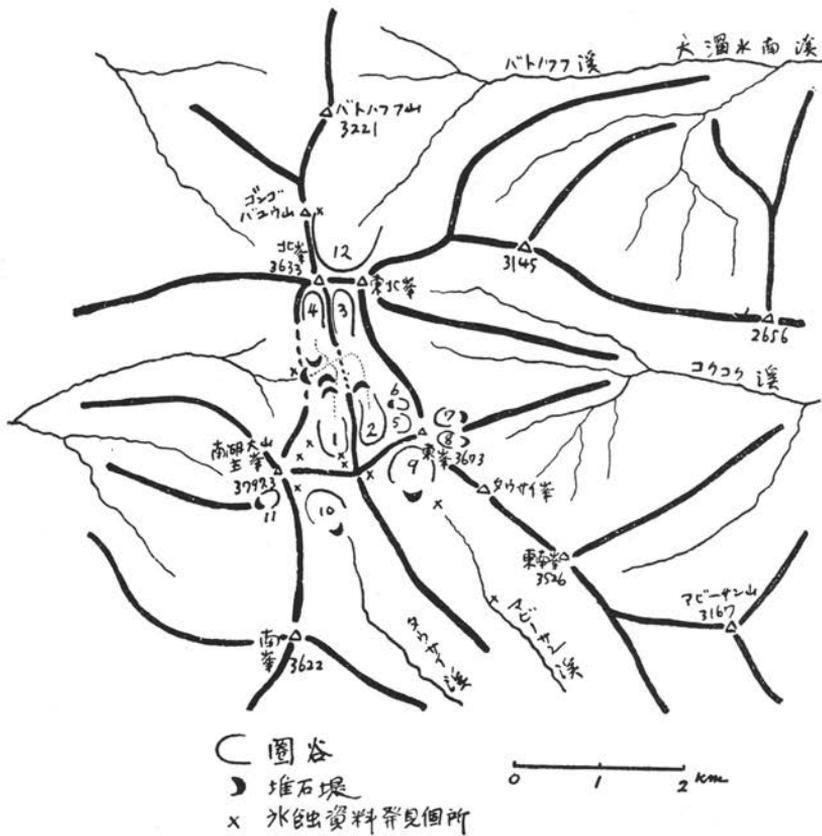
無爲の中にバドツノフ山を越えると、一旦稜線は急下降して再びゴンゴバユウ山の急斜面を起す、此の急斜面は密林に蔽はれてゐるが六分通り登ると東北斜面即ち上述した圈谷側の草原に出る。山頂へはもう八分通り登つてゐると思はれる地點、標高凡そ三、三〇〇メートル乃至三、四〇〇メートルと思はれる處に於いて我々は小さな崩壊面を横切らうとした。そして上方から重り合つて落ちかゝる夥しいスレートの轉石を見上げた。忽ち鹿野君の眼が光つて一つの岩に近づく中、私は數間先の別の岩塊に向つて突進してゐた。私の見たのはスレートの一大母岩で、その面は不思議にもペーブメントの様に滑かであつた。手を觸れて見ると良い感觸である。忽ち「しめた」と私は心の中で叫んだ。條痕が鮮やかに認められる。鹿野君もやつて来てクリノメーターを取り出す。岩面は四十五度半の急傾斜をなし、溪底に向つて落してゐる。鹿野君がハンマーを立て、ライカで寫す。近景・中景・遠

景と用意周到に撮る。四圍の地形を觀察する。明かに新しい山崩れの跡である。轉石の夥しい中に母岩が出てゐるのである。地點は上述した圈谷の上部に當つてゐる。條痕の方向は溪底に向つてゐる。圈谷面に圈谷氷河の殘した條痕が、岩屑に蔽はることによつて風化を免れて保存され、最近の崩壊でその原面を現はしたのだと考へたらどんなものだらう!! 此の岩の傾き、その位置、私は少年の時、梓川の畔に見た彼のヘットナー石を想起せずにはゐられなかつた。そして此も天然記念物として保存したい様な岩だと思ひ、標本は遠慮して岩屑に没した部分を態々掘つて其處から採つた。

#### 4. カールとモレーンの庭

此處で隨分手間取つたつもりであつたが、午後三時にはゴンゴバユウ山の頂に立ち、四時頃には北峯の上に立つて久戀の南湖主峯に相對した。

此處で我々は再び、釘付けにされてしまつた。それは前のは比べものにならぬ程立派な圈谷を眼の前に發見したからである。平穩な夕暮であつた。私共は幾枚かの寫眞を撮りながら降つて行つた。今、降りてゐる溪も亦、カールではないか。只、細い岩屑に埋れて、極めて淺くなつてゐるだけである。此を降り切つた處が平になつてゐて、此のカールの末部から流れ出す僅かばかりの滴水を頼りにビヤナン蕃社の狩獵小屋がある。俗にブナツケと云つて、普通登山者の泊場となつてゐる處である。内地の高山の這松に相當するニヒタカビヤクシンの灌木に取り圍まれて小屋は昨夜と同じ草葺きながら溪底の窪地にかくされてゐて暖かさうであつた。私達は此處に居を定めてゆる／＼此の山を味ふ事にした。



第一圖 南湖大山々彙略圖(圈谷、堆石堤の分布を示す)

第一圖に示した様に我々の見付けたカールは全體で十二個である。中、不完全なものもあり、遠望しただけに終つたものもあるが、1. 2. 3. 4. の四つは著しいものであり、此の四つが作り出す地形は實に獨特なものであつた。即ち四つものカールが向き合つて一つの山體の内部に開いてゐるといふ事は珍らしい事である。更に此のカール底をつないで見るとH字型を描く。此の山の獨特な原地形が斯うさせたのであらう。カールも同じ氷河の作品ではあつても、基盤が異り、材料が異り、隨分變つた形も出来るものらしい。此等のカール底は三、四〇〇メートル程の高度にあるから氷期の或る一時代には氷河は罔谷氷河 Kargletscher としてカールを埋め、ブナツケーの小屋場附近まで流れ出してゐたらしく、融解水はシラガン溪の源をなしてゐたものと想像される。こんな譯で、臺灣に於ける雪線の高さも三、三〇〇メートル乃至三、四〇〇メートル位に考へて良いのぢやなからうか。

氷河の末端の位置を示す他の材料は堆石堤 *Moraine* である。此のモレーンが又澤山にある。然も第一圖に示す如く、夫々のカールに應じてその出口に見出されるが、ブナツケーに於けるものが最も著しい。オイワケメダケに蔽はれ、處々にビヤクシンを配した茅山の様な小隆起が其處にも此處にもみる。よく見るとその配列には系統がある。カールの1に屬するものと、2に屬するものとの區別もつく。勿論何れとも分ち得ぬものもある。モレーンとモレーンの間は一面、極く細い砂地になつてゐるで箒ではいた様である。豪雨一度至れば、此の平は一時的に氾濫し、湖の如くなり、砂は愈々厚く平に堆積して行くらしい。此の砂地とモレーンの小山とは例へば盆景でも見る様な可愛い景觀をなし、その中を散歩するのも愉快である。

## 5. ブナツケー野營

靜かに夜の幕が降される。一一、五〇〇尺の高さに夢を結ぶ夜である。蕃人が焚火を盛んにして下れる。鹿野君、アミちゃん（トタイ、プテン君はアミ族だから我々は斯く呼ぶ）、蕃人巡查の岸本君と僕の四人が一つの屋根の下に入る。私はドイツで買ったメリヤスのトレーニングスアーツックを着て羽毛入りのシューラフザックにおさまつたが、暑からず寒からずグツスリと眠込むことが出来た。矢張り天氣さへ良ければ臺灣の山は暖かである。氣温は普通最低九度か一〇度で、寒い日でも六度を降る様な事はめつたにない。

岸本君はどちらかと云へば氣の小さい正直者だから一献、臺灣酒を盛れば、すつかり良い心持になり、可愛い新婚の告白や何やらで、聽て、靜かになつたかと思ふと、いきなりウワ言に奥さんの名を呼んだりしてすつかり愛嬌をまいた。アミちゃんは彼一流の哲學があつて、民族的自覺の必要を論ずるかと思ふと、根が至つて罪のない朗らか者で、すぐ何んとなく優越感に酔つて唄ひ出す。

蕃人は夫々小屋に引き取つて盛んに焚火の手を擧げる。暖まるとそろ／＼唄が出る。蕃人の唄には古歌と流行歌と即興詩の三種があるが、一番多く唄ふのは即興詩ださうだ。即興詩と云へば唄ふ毎に歌詞の變る様な云はゞ口から出まかせのものゝ様だが、後から譯してもらふと筋はよく通つてゐる、例へば、内地の客人とこんな山の中で一夜を明かすは楽しいが、一度別れたら又何時會へることやら……とまあかういふ様な手のものである。尤も此は我々に御馳走する心算で唄つてゐるので、もつと、我々を眼中に置かず、太陽や、月や、星や、山を自由奔放に唄つてきかせてもらひたかつたが、さういふのは出なかつた。文字を持たない彼等にとつて唄は叙情の大切な手段であり、聞けば低聲に哀調を帯んだ良い節回しである。それに山で聞いて良いのは「ロボ」である。竹の小片に風穴をあけ、一端につけた糸を引きつゝ此を吹くので、風の唸りよりは弱く、例へば虫の羽音の様な良い音が出る。

ハワイヤンギターの余韻の様な冴えはないが、更に未聞人らしい甘い蕩酔がある。此の小さな樂器が此から南方一帯の島嶼に行き亙つてゐる事は其處に一つの別な感覺文化のある事を思はしめて楽しい。鹿野君も自慢で一曲を奏するが、どうしてもアミちゃんにはかなはない。斯くて三日間のブナツケの野營は慥に快いものであつた。

朝、眼を覺すと、小鳥が鳴いてゐる。「ホイツピツヒ」と云ふ素人眼には「ツグミ」の様な鳥で、高山地帯に入つてから最も多く見掛けるものである。口を雪ぎに清泉の畔に行けばトリカブトや、エーデルワイスの草々は露に濡れて眼にしみる様な良い色をしてゐる。

## 6. 南湖大山主峯

十四日、我々は寫眞器とハンマーを持ち、辨當を二人の蕃人に持たせて主山に向ふ。

先づモレーンの庭を散歩しながらシラガン溪の落口の方をのぞいて見る。此處は平時は乾いてゐるが一朝大雨至れば1. 2. 3. 4. の四つの閘谷の水を集めて一筋に落す一大排水口であるから岩盤は漏斗狀に深く刻まれ、水蝕を受けた丸味のある轉石が累々と重り合つてゐる。北側の岩壁は高くまで一面に滑かな研磨面を持つてゐて氷蝕の疑ひが充分ある。又南側は南湖主山から直接に切り落す斷崖であるが此が北側の岩壁に對立してゐる様である。

そして兩者の間には、巨大な堆石堤が横つてゐて、現在の溪水は此の堆石の北端を開折してゐるのであるから此の堆石堤を取り除いた跡には巨大な舌を長く出した様な Rundhöcker が存する事が想像され、シラガン溪は一つのU字谷であるかも知れないのである。そうすると、此の山彙の夥しい氷が此の巨大な出口に溢れて、狂暴なクレヴァスを伴つてシラガン溪に流下してゐる有様は素晴らしい壯觀であつたらうと思はれる。そ

してその末はシラガン溪のどの邊まで延び延びてみたか判らないのである。

それから此の部分に蔽つてゐる堆石堤の上を歩いて見る。此の堆石堤はこの位置が他の群小の堆石堤と異り、山麓内部の溪谷系統の全部を受け止めてゐるかの如くであるから、シラカン溪を流下する谷氷河を考へるならば、さしづめ此はその氷河の退却する時残した印となる譯である。此の上には直徑三メートル位の氷河の忘れ石即ち捨子石 Erratic block と見る可きものまで戴いてゐる。此より主峯側の斜面を斜に登つて第一圈谷の上部を歩いて見る。

此處は主峯から出た粘板岩の夥しい崖錐であるが、その中に直徑一メートル位の轉石で氷河條痕を有するものが多數發見された。發見の場所が既に三、五〇〇メートル餘の高處であるからその原産地は餘程高い位置で、圈谷壁の更に上方である事が想像される。我々は主峯から東に落ちて來る崖錐に埋れた浅い谷を見つけてそこを登る。別に道は無いが普通登山者の採るルートであらう。その途中にはカール底の一部と思はるゝ巨大な母岩の表面の立派に磨かれてゐるものがあつた。我々は氷蝕面が圈谷底より斯くも甚だしく高い處から發見されるのをいぶかりつゝ三時間の後頂上に着いた。昭和七年六月に建てられた陸測三角點が立つてゐる。何んとなく人氣の無い淋しい頂に、會員大平晟氏が昭和三年大舉して登られた時の記念碑の立つてゐるのが眼に着く。丁度、間ノ岳から見た北岳の様な形で中央尖山が黒々と北の空に聳えてゐる。此處に立つと南湖大山山麓内外の構造は一眸の許に收まる。上から見卸すのであるから圈谷の形はよく判らないが、粘板岩の地層の傾斜が峯々の側面によく現はれてゐる有様は内地の山に見られぬ地質的な美觀である。見渡したところ稜線の上に平坦面が中々広い地域を占めてゐる事に氣付く。その平坦面の中央は窪地になり細い砂が堆積してゐる。氷河性のものである事が豫想さ

れる。此等の點から考へて氷河の働いた以前の地形は餘程老年期のものであつた事が判る。

地圖の上で何かなしに惹きつけられてゐたマビーサン山は此處からは見えないが、此の山と東峯とを連ぬる稜線の上には東南峯(三、五二六メートル)と鋸齒の様な岩峯を立てた無名峯とが見え、どうしても此の邊は一度縦走して見ねばならぬと深く心を打つ。歸りは園谷底に降つて園谷の大きさを目測しつゝ歸る。ところで二人が慎重にしたつもりが目測が丸きり違つてゐたことが内地に歸り何ヶ月か経ち、此を圖示しやうとする時まで判らなかつたのはおかしい。それも殆んど實物の倍位に測定してしまつた程の誤であつた。此は一つには臺灣の山は大きい〜と人に云はれ、又高さも一萬何千尺揃ひと云ふので自分も無條件でさう思ひ過ぎてゐた爲めであらう。一種の主觀的錯覺であるから恐しいものだ。丁度赤石山脈の山は北アルプスに比して大きい〜と誰も云ふが、それは單調な形態から來る只の感が餘程手頼つてゐる様に、此の邊の山もその形が平調である爲め餘計大規模に見えるのではないだらうか、此の邊は餘程警戒を要する處である。

良い地形圖の出來るまで地形研究には是非相當の距離測定器が必要であると思ふ。日暮れまでカール底の堆石群を調べる。

#### 7. マビーサン山に向ふ

十五日、今日も良く晴れてゐる。思切つて早出する心算が矢張り七時半頃になる。今日は、第一カールの中央を溪底に沿つて登つて行く。カールの上端は主峯から東南峯に引く稜線上の鞍部で一つの峠になつてゐる。溪底の轉石には充分の注意を拂つて進む。一握り程のかたまりになつてエーデルワイスが岩間に咲くのにつつかり惱

まされて寫眞等寫して手間取る。峠へもうあと四〇〇メートル位と思はるゝ處になつて、五メートル立方程の岩塊に條痕あるものを見付ける。此の邊の岩は溪底にある爲め多少水浸を受けた跡があるので明瞭な條痕は望めない様に思ふ。更に二〇〇メートル程前進すると、今度は砂岩の母岩で見事な羊狀岩に出會ふ。更に一〇〇メートル程上方に四疊敷程の平滑面の露出を見る。銃を持った蕃人を坐らせて寫眞を撮る。矢張り今日も氷蝕資料は異常に高い處から發見される。朗らかに晴れた南國の空、風もなく、峠は手に取る程間近に迫つて何んとなく浮きくする心地である。

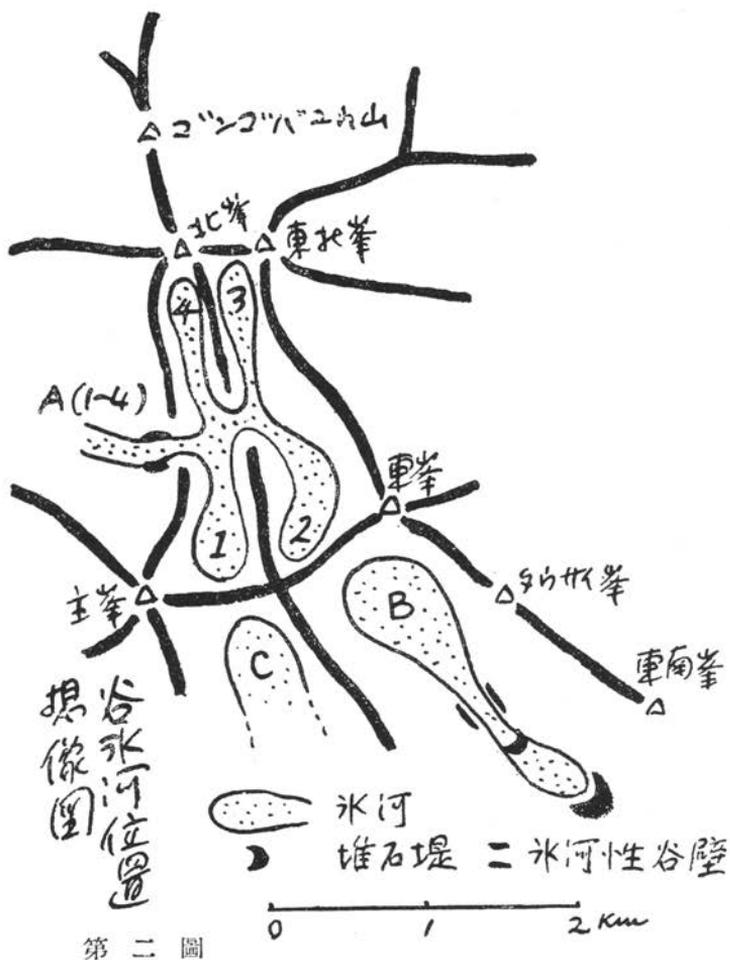
峠の上は昨日主峯から俯瞰した平坦面である。銳角に傾いてその小口を現した粘板岩が針狀に細く崩壊してゐる有様は朝日を受けた霜柱をつくりである。部分的にはこんな激しい風化浸蝕を受ける位であるから氷河の條痕等残つてゐる筈もないとは一應無理からぬ事である。矢張り、崖錐に保護されて残存するのだと思ふ他はないであらう。

此の平から主峯を顧ると、主峯の南面した突起部が著しく瘤狀を呈してゐるのに氣付いた。此は三、七〇〇メートル以上の山頂であるから若しそこにも氷河條痕が發見されれば氷河は圈谷の中に發生するものと他、更に山頂を蔽ひ、氷帽 Ice cap の形式をとつて、「ひとで」の様に八方に流下した時代もあつたと想像され、同時に今まで甚だしく高所に氷蝕面を見た謎も解ける譯である。此の大瘤狀岩 Rundhöcker は其の後天候急變の爲め遂に踏査の機を逸してしまつた。

斯くて我々は過去の氷河への限りなき想像の翼を展げながら東峯のカールの手前を、マビーサン溪（假稱）へと降りて行つた。

暫くの間は急崖で此は後に氣付いた事である如何にも谷氷河の行詰りの袋状崖 Trosschluss と云ふ感を與へる。降り切つてから仰ぎ返すと、丁度數年前ノルウエーのフェランドからルンド峠を越えながら見て來たルンドブレ（ルンド氷河）の下のトロングシュルッスにそつくりの形をしてゐる。聽て身は此の急崖の一部に穿たれた狭い浸蝕谷に入り込んで薄暗い岩間に達する。初めて清水があり、マビーサン溪は此の附近に源を發する事が判つた。左手から9のカールが降りてゐて、見上げると長大な崖錐の傾斜が青空まで連つてゐる。此の邊には端堆石がなくてはならぬ筈であるが一向見當らぬのは雨水の流下が激しい爲めか。谷の下刻は愈々深くなつて、水蝕を受けた粘板岩と砂岩の丸石が累々として横り、内地懐しい溪谷の風情である。暫くすると、石灰岩らしいものが現はれる。初め轉石だけかと思つたが母岩が堂々と河床に横はつてゐる。粘板岩との接觸面を探したが判らぬ。明かではないが此の邊は衝上斷層 Thrust fault に當つてゐて、鋭く傾いた粘板岩層の上に石灰岩を載せてゐるものらしい。石灰岩の高峯が此の直上にある事は後に判つたのである。出来るだけ谷筋を降るが愈々通れなくなると左手の山腹の密林中を迂回する。殆んど蕃路もない雑木の間をカサ／＼と押し分けて行くと、鹿が角を磨いた跡だと云ふ小枝の皮のむけたのがあつたり、水溜りに鹿の足跡の入り亂れた處等がある。此の邊は鹿や豹の多い處だと云ふ。此の降りは相當の困難を嘗めたが直線距離凡そ一キロ程で平地に出る。其處は礫に埋められた清々しい河原で、一息入れるによい。

四方を見廻すと此の谷は中々面白い谷である。先づ顧みると今降り來つた谷筋や、トラーパーバスしたタウサイ峯側の傾斜面はニヒタカトドマツの密林で黒々と塗りつぶされてゐる。その間に鞍部の禿が見え、その少し下に大きな瘤状地形が此方を向いてゐる。正に氷河性のルンドヘッカーと云ひたいものである。東峯から流下した氷



第二圖

河は此の上を溢れ落ちて今私の立つてゐる平へ狂奔してゐたかも知れぬのである。北に向つて左側の谷壁は高い岩壁になつて我々を見却してゐるが、その曲線がどうもU字谷のそれである様だ。斯ういふ部分が數百メートルに亘つて二ヶ所もある。此に應すべき反對側の傾斜面は壁にはなつてゐないから此のU字谷は完全なものでは勿論ない。思ふにタウサイ峯側から一面に氷河が簾を懸けてゐたのであらう。そう考へて想像圖(第二圖)を描いて見た。

此の平な谷は又一キロ程續いて末廣がりになつてゐる。此を後にタウサイ峯から見却した處によると正に舌狀盆地 Zungenbecken である。即ち谷氷河の末廣な舌狀部が丁度此の谷の型におさまるのである。そして此の谷の末端には溪水を堰き止める様な位置に大きな堆石堤がある。此は長徑二五〇メートル、短徑二〇〇メートル、高さ溪底より約二〇メートルと云ふ可成り大きなもの。表面には短い雜草しかなく海鼠の様な形をしてゐるから誰の眼にも不審を抱かせる。溪水は此の附近に高さ一メートル程の段丘を二階作つて、此のモレーンの兩側を破つて流下する。此處は急崖になつてゐるから若し溪の更に下流に谷氷河の延びてゐた形跡があるならば此の斷崖は氷河性の階段と見られるかも知れない。何れにせよ此の舌狀盆地は可成り厚い堆石で蔽はれてゐるものであらう。此の堆石堤の上に立つて東側を見上げると高山らしい感のニヒタカドマツの梢の上に狼が吠えてゐる様な形の鋭角の岩峯がせり上つてゐる。尖頂は二つに分れてゐる様だ。慥に立派な姿である。昨日主峯上から遠望したタウサイ山の邊りである事が略想像され、先刻見た溪底の露出から推して、此の峯は若しかすると素晴らしい石灰岩の峯であるかも知れないと思つて胸を躍らせる。

臺灣の山はどんな上天気でも午後になると大抵雲が湧くが今日は大分それが早く、既に邊りは霧に包まれてし

まつた。目指すマビーサン山の姿は見えぬが、此の邊から溪に分れ、稜線に登れば、東南峯とマビーサン山との中間の鞍部に出来る見當である。再びトドマツの密林下に分け入ると、霧は愈々濃くなつて、所謂、内地で云ふ霧小便。やがて行手が白々と明くなつて草尾根に出た時は既に本降りの雨となつてゐた。マビーサン山は眼の前に聳えてゐる筈であるが五里霧中、此處が果して鞍部であるか否かも定かではない。(後に判つたがずつと東南峯寄りの高所であつた。)焚火をして雨のはれるを待つたが見込みなく、マビーサン山に此の中を行けば今日中にキャンプに戻ることは不可能であるし、雨中露營の用意もないので此を斷念。その代り先刻見た岩峯の邊りを縦走しつゝ歸る事にきめ、正午愈々東南峯に向つて稜線を登り出す。雨を衝き、密林下の笹藪を強引に掻き分けて案外早く一時間の後頂上に立つ。正に三、五二五メートルと云ふ立派な石灰岩の山であつた。いふし銀の澁い色をした岩が巨鯨の様な形をしてあちこちに蹲踞する。此處には山林課の標木が立つてゐるので人跡未踏でない事は明かだが、未だ石灰岩の山である事は一般に報ぜられてゐない。

西北に向つて此の峯を降ると、僅か二〇〇メートル程を隔て、次の隆起は又粘板岩である。岩層は走向の40。ミ傾斜の。で主峯、東峯高と略同様である。此より二〇〇メートル程急崖を降る悪場があつて、草原の鞍部に出る。此から先は霧で見當もつかず直接稜線は登れぬので、西面の密林中をトラヴァースして又勞働を續けて行く。いと、いきなり右手に高く先刻見覚えの蒼白い岩峯が峙ちふさがつた。矢も楯もたまたらず此れに攀ち登る。森林を抜けると直ぐ稜線で、殆んど一木一草も止めぬ素裸の石灰岩がタウサイ溪に臨んで大きな斜面をなしをり、見上げるとその空に盡くる處が頂上である。長さ八メートル、幅三メートル位の板狀に剝脱した岩片が三十五度の傾斜で板狀雪崩の様に重り合つてゐる。私のテニス靴は斯うした上を歩むに慥に良い。平氣で立つて歩けた。二

時卅分登頂。前人登頂の形跡全くなく、如何にも新鮮な感である。蕃人以外としては初登頂ではあるまいかと思ひ、此の無名峯を「タウサイ山」(タウサイ蕃の狩獵區域なので)と假稱することゝし、鹿野君の採集瓶に名刺を入れてケルンを積む。岸本巡查君は大いに喜び、私に記念撮影を求めるので、鹿野君と並べて此の山頂を寫す。さうかうする中、霧は薄れて、此の峯の西南に隣つて更に鋭い岩峯のあることが判つた。見却すとその峯は巨大な白牙の様に遙か下方の鞍部から天空に突き上げてゐて如何にも見事である。私は台北の沼井さんに、岩攀りの好適地が見付かつたと報ずるのが楽しみだと思つた。その中、東南峯も、マビーン山も晴れた。タウサイ溪の舌状盆地も上から撮影出来る程度に明るなつた。三時山頂を辭し、タウサイ溪側のトラヴァースを續けて又降りしきる悲雨の中を暮れやらぬ間を歩度を早めて進む。

此の邊、微かに蕃路の跡があり、やがて、タウサイ山直下と思はるゝ邊りに一大岩窟あるを發見する。此は粘板岩のえぐれたもので、天井には衝上斷層が現はれてゐる。優に數十人を容れる岩窟で、タウサイ蕃の城塞ださうである。石を積んで四段の平面を作り如何にも裸形の戰士をたむろせしむるにふさはしい山寨といふ感じである。此の穴の中に、五寸程の兩端を尖らせた竹筥が一握り程あつた。此はもう蕃社ではめつたに得られぬ珍らしい武器で、通路に立てゝ針山となし、敵蕃の來襲に備へたもの、明治十年頃まで盛んに用ひられたといふ話である。臺灣の山岳は皆、蕃人の古戦場の様なものだ。昔の相手は敵蕃人、今尙ほ變らぬ相手は野獸である。だからこんな山奥にも土俗の資料が轉つてゐるのである。

此處を出て暫く行くと、稜線側に乗り出した巨岩の裏に、初めて粘板岩と石灰岩との明瞭な接觸面が現はれてゐる。此により、東南峯及びタウサイ峯は衝上斷層により粘板岩上に石灰岩を載せてゐるものと云ふ事が略明かに

された。後日、總督府、地質課員某氏の談に依れば、南湖大山山彙の東方には北東から南西に走る大衝上斷層線があるさうであるから、恐らく其の延長が此の邊の山脈を切り、石灰岩を伴つて活動してゐるものと思はれる。

此の邊から比較的蕃路よく、カール9に出て此を横ぎり、東峯の肩を越えて、カール2に入り、六時少し前冷雨に濡れてブナツケーに歸る。カール9から肩にかけて、荒涼たる礫の間に、體より遙かに大きな紅花を附けたオホアカバナと云ふのが一面に群落をなしてゐる。此はエピロビウム、ナンコタイザネンスと云つて、此の山特有のものだと鹿野君におそはる。此にしてもゴンゴバユウ山附近に澤山あつたナンコシヤクナゲにしても此の山特有といふ高山植物が斯くも豊富に産するのは嬉しい。

#### 8. 北峯・東北峯・東峯を巡る

十六日、今朝は抜ける様に晴れ切つた空が南湖大山の上を蔽つてゐる。秋の山の感がヒシ／＼と迫つて清々しい。先づキャンプの裏手からカール4を登つて北峯に坐し、山全體を見直す。今日は次高・大霸の連峯が手に取る様に近く見える。雨の來る前ではないのか。これから平坦な稜線を東へ、カール3の上を横ぎつてグラ／＼と西南峯に近づく。ビヤクシンが這松の様に頑固に地表を逼ひ廻つてゐて此を通過する事は這松以上に手強いが、或は枝上を渡り、或は下をかひくぐつて間もなく頂上。岩と草ばかりで展望よく、カール12に向つては物凄い斷崖をなしてゐる。此處で當然起る疑問は此の峯と、北峯とどちらが高いかと云ふ事である。蕃地地形圖には兩者を一峯として三、六三三メートル（尺で示す）と記してある。パドツノフ山や、主峯あたりから見ると、東北峯の方が明かに秀でてゐるが、山稜づたひに登つて見るとあまりに平調で高い感はしない。陸測の地圖が出来るま

で此の解決はお預りの他はあるまい。此處からカール12の大崩壊を隔て、ゴングバエウ山の三角點が手に取る様に見える。(昭和八年五月、陸測の建てた松第六號と云ふ三等三角點である。)此の三角點を中心として左右に階段状をなして稜線が低下してゐる。(第五圖スケッチ参照)そして各階段の切目に依つて短冊形の地塊に分れ、蒲鉾でも並べた様に少しづつズレ、重り合つてゐる。つまり此の稜線は此に略直交する斷層線によつて幾つかの傾動地塊に分裂してゐる様に見える。此はムルロアフから南湖大山に至る間の稜線上に屢々見た此の邊に特有の小地形であるが、こんな位置から望見するのは始めてなので著しく眼を惹いた。此の地塊の連続は全體として一つの平面を描き、溪底に向つて傾き、下部は直立の崩壊となつてゐる。そして此の平面の部分は草原になつてゐる。如何にもカールの原形の一部が取り残されてゐる形である。

此から稜線づたひに東峯までの間は相當に遠く、且つ大部分、ビヤクシンとの惡戰苦闘である。唯、空は董色に芳しく、遠山の眺めの良い事と、夥しいエーデルワイスの群落に出合ふのが慰めである。東には東南峯からマピーサン山までの稜線が今日はつきりと見えてゐる。併し正午近く東峯に近づいた頃はもう例に依つて東方から頻りに霧が見舞つて來た。午後一時東峯に達する。主峯に次いで高い(三、六七三メートル)のであるが、此も二つの頂點を有し、何れが兄、何れが弟か疑問である。山體の上部は明瞭に粘板岩の成層を現し、*strike W. 35° S. dip 30°* を測り、代表的な粘板岩の山である。西には5及び6のカールが見却され、外方には7、8及び9のカールがある。内側のは順層面 *Kopfseite* にあつて *50°—60°* に急斜し、岩層の瀧を懸けてゐる。此に反し、外方ものは逆層面 *Rückseite* にあつて *35°—40°* と云ふ岩層と同様の程度に傾斜し、岩層により淺くなつてゐる。前者は極めて小さく、山體の上部に懸つて居り、後者は大きく長く裾を引いてゐる。岩質・成層面の傾き・その順

逆の別等に依つてカールの成生に種々相を現はす事は今まで餘り注意されなかつたが興味深き事である。二時、東峯の肩に降りついた時はもう霧は雨となつて冷氣が襲つて來てゐた。一昨日食糧補給に下山させた蕃人の代人が到着したと云ふのでアミ君がわざ／＼罐詰を此の男まで届けて下れた。實は食糧缺乏で今日の晝飯も蕃人の來着をあてにしてゐた程であつた。待望の甘味と云ふ譯で豆の甘煮を二罐も平げた。荒天の爲め氣になる主峯の瘤状岩を見極めるのを斷念し、今日も又ズブ濡れでキャンプに歸る。

#### 四、暴風雨襲來

焚火に暖をとり、漸く繁くなつた雨足を眺めてゐる中、急に私は苦しくなつた。それから先は雖でもむ様な腹痛に唯唸るだけで言葉も碌々利けない苦しみが小一時間も續いた。私には初めての胃痙攣であつたのだ。原因は先刻の豆の罐詰に定つてゐる。鹿野君は少し變だと思つて食べたと云ふ。私は氣付かぬ位餓えてゐたものと見えるが數日來腹具合が悪かつた處だからやられたものだらう。後で調べて見ると、ピヤナン鞍部の駐在所で妻君が氣付かず除外してあつた古い方を蕃人に渡したのださうでとがめる事も出来なかつた。兎も角私は初めて死ぬかも知れぬと思つた。死なないまでも若し此の儘、動けなくなつたらどうして山を降してもらへるのだらうかと苦しみつゝ考へてゐた。此の苦しみの最中、アミちゃんやんは背の筋肉が盛り上らうとするのを押へ込んで下れた。此れで大變苦痛が輕減された。アミちゃんの話では、此がアミ族の療法だと云ふ。良い應急療法をおそはつた。この時好都合に吐瀉したので苦痛は次第に去つて行つた。

處が此の頃から別の心配が兆して來た。それは雨が激しくなり、風が狂暴になつて來たからである。十七日の

朝はもう昨日の様に晴れた青空は見られなかつた。昨夜來の暴風雨は益々つにつて此のキャンプのある溪底は次第に流水にしたる様になつた。溪底で此の風では、到底北峯を越えて下山する事は出来ない。蕃人は裸體だから第一に寒さを怖れる。第二には風を怖れる。喬木林中で倒木に打たれて命を落す例がよくあるからだと云ふ。それかと云つて臺灣では暴風雨が四五日続く事も稀れでないと云ふのに此の儘でゐて良いものか。議論してゐる中に溪水は愈々我々の寢床に押し寄せて來ることゝなつたので兎も角荷造りをして立ち上つたが偕て行き場がない。此の時、沈黙を守つてゐたビヤン社の長老（勢力者と稱し一日おかれてゐる男が一團の中に一人二人必ずゐる）六十越しと思はるゝヨボ／＼の老人が口を切つた。自分は子供の頃狩獵につれられて南澳蕃の狩獵地内で立派な岩小屋に泊つた記憶がある。二十人位入れる岩屋であつた。其れは此處から十數町のシラガン溪の上流にあると云ふのである。蕃人は十人もゐるが彼等にとつて自分達の狩獵地域外は外國であるに等しいから全く様子を知らないのである。そこで寒さにふるふる此の老人にスウェーターを與へて勵し午前八時案内させて篠つく雨の中を避難する。シラガン溪を隔ること十餘町、下流に向つて右岸に誰人にも眼につく巨大な粘板岩の岩塊がそつと置かれてある。これは全く神の力でなければ置かれぬ様な置き方で、基盤との間隙が奥深い洞になつてゐるのである。岩がゴトリとのめつたらそれまでであるが、斯うなると人間もあわれなもの、仔羊が岩間に雨宿りする様にコン／＼と一同此の岩間に這り込んだ。入口が腰をかぎめて入れる位、中は首を曲げて立てる位。焚火で衣を乾かす。轟々と狂奔する溪水の音を間近に聞いて暫くは自然の横暴に呆れてゐた。あまり焚火を盛んにしたので火熱の爲め天井が剝脱して壓死したと云ふ例があるさうで、斯ういふ粘板岩の洞穴は殊に危険なのだが蕃人達は委細かまはず生木をいぶす。全く、眼も口も開いてゐられない。煙攻めに會つた貉の様なもので、毛布を頭から

スッポリと被り、翌日の朝の十時頃まで實に二十六時間程の間腹の虫をジツと押へて辛抱した。その間小止みなき瀧の様な雨が降りしきつて何時果つべしとも見えないのは悲惨であつた。十八日の朝になつて稍明るくなつて來た。蕃人は今日も此處に煙つてゐやうと云ふのだがもう此方も我慢がならぬので蕃人をなだめすかし、十時頃此の谷を降り出した。大體は右岸に沿ひ、幾つかの支流の溪を渡り、大雨にゆるんだ悪場を通つて、午後一時タケジン附近の草地に出て初めて危地を脱した思をした。此から先は普通の南湖登路で道も判然としてゐる。随分苦しんだが、お蔭で絶好の岩屋も發見するし、今日降つた溪も、新ルートの開拓となつた譯である。

## 五、稜線上の斷層地形

以上は主として氷河地形觀察の日記であるが、私共がゴンゴバユウ山で氷河條痕を發見する迄は、此の附近に發達する奇異な小斷層地形にばかり氣を取られてゐた。此に就いての觀察を日程の順に従つて記して置かうと思ふ。

### 1. ムルロアフ駐在所附近の斷層地形

ムルロアフ駐在所は唯一軒土手の様な細長い丘上に建てられてゐる。此の庭先に立つて見廻すと此は單なる一個の丘ではない。此の丘と同じ走向を持つ大小の丘が無數に發達してゐるのが判る。中で一番高いのは駐在所のある丘で、其の兩側に階段狀に低下する無數の地塊が此の様な特殊の景觀を形造つてゐるのである。大體の走向は南北で、地塊の幅は一五メートル乃至三〇メートル、傾斜は夫々異なるが平均三〇度乃至三五度、多くは傾動地塊 Tilted blocks である。此の邊では稜線は駐在所より遙かに東方にあるから、稜線の西側斜面の上部が階段狀

に破壊されてゐるのである。此は一つ一つが斷層である譯でなく、斷層運動の結果、不安定な稜線部の表面が地  
沈りを起してゐるものと思はれる。併し、斷層運動は割合に浅い處に起り、且つ新しい運動である事は想像され  
る。裂線に沿ふて歩いて見ると草原の中に湧泉があり、又は沼澤をなす處が多い。駐在所の西南方、眼の下にあ  
る小湖（シロン・ムルロアフと假稱す。「シロン」はタイヤル語で湖）は明かに此の地塊運動の産物である。裂線  
に沿ふて流れるが此の小湖に注ぎ更に下方に流出してゐる。

地圖にはないが此の稜線上にシロン・マハヤヘン（マハヤヘンはタイヤル語で「檜の枯れた」と云ふ意なる由  
——此の附近檜の立枯れとなつたものが夥しい）と云ふ相當に大きな湖があるときき、十一日雨のはれる間を見  
て見に行く。稜線を北に進むこと約七八町。三方を原始林に圍まれ、一方に明い草原を控へた直徑一〇〇メー  
トル程の丸い湖がある。駐在所から大平山に通ずる材木事業の道は此の湖畔を通じて、やがて稜線を北西に降つて  
行くが此について行くと密林中に二個の小湖がある。此等は何れも地塊と地塊の間に湛えられてゐるものゝ如く  
である。見廻したところ森林の下にも地塊の重疊は果てしなく見られるから此の種の細い地殻運動は餘程廣範圍  
に亘るものと思はれる。

駐在所からゲリロー山に出る間は材木の跡の草原だから地形はよく判るが同様の地塊は三列程に分れて、稜線  
に沿つて發達し、その間に小さき水溜が澤山ある。

## 2. 稜線上の分裂地形と斷層性裂罅

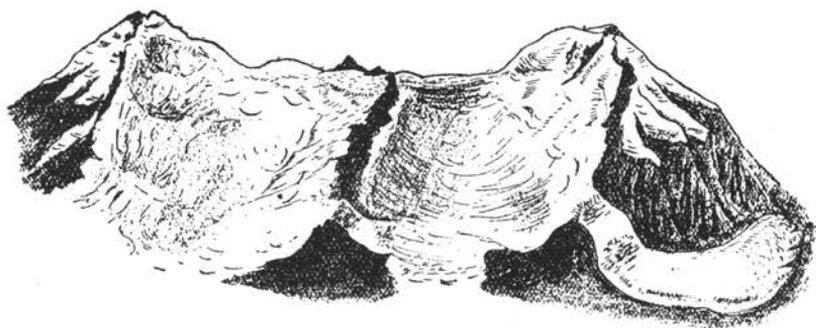
ゲリロー山から降ると其處の鞍部は材木に斧を打込んだ様に楔狀の窪みになつてゐる。此の列罅は稜線に略直

角に交つてゐる。此の形式は此の先至る處、鞍部ある毎に發見された。十二日の夜、野營した南澳蕃の小屋のある平地も此と同一形式で稍大規模なものであつた。

又此の種の地形の全體の構成は東北岸よりゴンゴバユウ山を遠望すると明かである。(スケッチ参照)此の場合、ゴンゴバユウ山上部の緩斜面をカールの一部とするならば此の地塊運動は勿論氷期以後の新しいものなることが説明せられる。第四略圖中Bの部分は稜線が極めて狭く、稜線そのものが幾多の地塊に分裂してゐて稜線は地壘Horstとなつて残つてゐる。此の最も著しいものは同圖中Cの部分にある。地塊の傾きは70°乃至75°に達し斷層崖の高さは五〇メートルに達してゐる。

此の他に注意す可き疑問の地形は三、〇〇〇メートルに近き高所に於て屢々山頂に近く廣大な緩斜面が發見されることである。時に是は二段三階に低下し、又は、平坦な稜線が全體として二段三段の緩斜面の連續をなしてゐる場合もある。山側に發達するものとしては第四略圖中のEの部分、大濁水南溪に臨む山麓面、稜線上に發達するものとしてはゴンゴバユウ山や主峯から西方に派出する稜線である。前者はヒタカトドマツの美林に蔽はれた美しき高原をなし、無数の水溜が散在してゐるからその成生には斷層性の地塊運動も手傳つてゐるかも知れない。此の山彙中には一體に低いと平坦面がよく發達してゐて、現水蝕輪廻以前の老年期の相貌が残されてゐる様であるが、極く高所にあるものは氷蝕の疑ひが充分である。前項に述べた様に若し南湖大山山彙に氷帽氷河を認め得るならば、此等の緩斜面は老年期の平坦面に萬年雪又は氷河が發達し、カールを形成するに至らず、曩にタウサイ峯附近の氷河を想像して描いた様に氷の簾を懸け、その氷蝕及び、氷河の後退によつて形成せられたものかも知れないと思はれる。

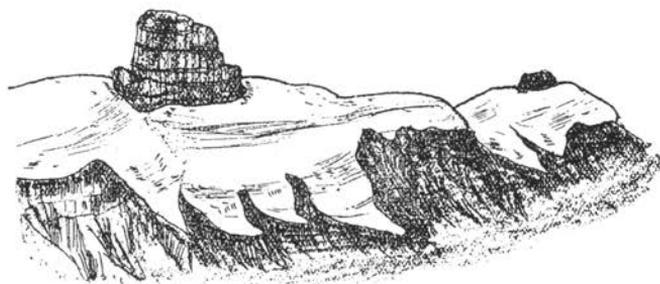
第三圖 氷帽説による氷蝕状態の想像圖  
並に現在する熱帯高山の氷帽



南湖大山の場合—北面、右、主峰、左、東峰



南湖大山の場合—南面、左、主峰、右、東峰、タウサイ峰、マピーサン山



大霸尖山の場合

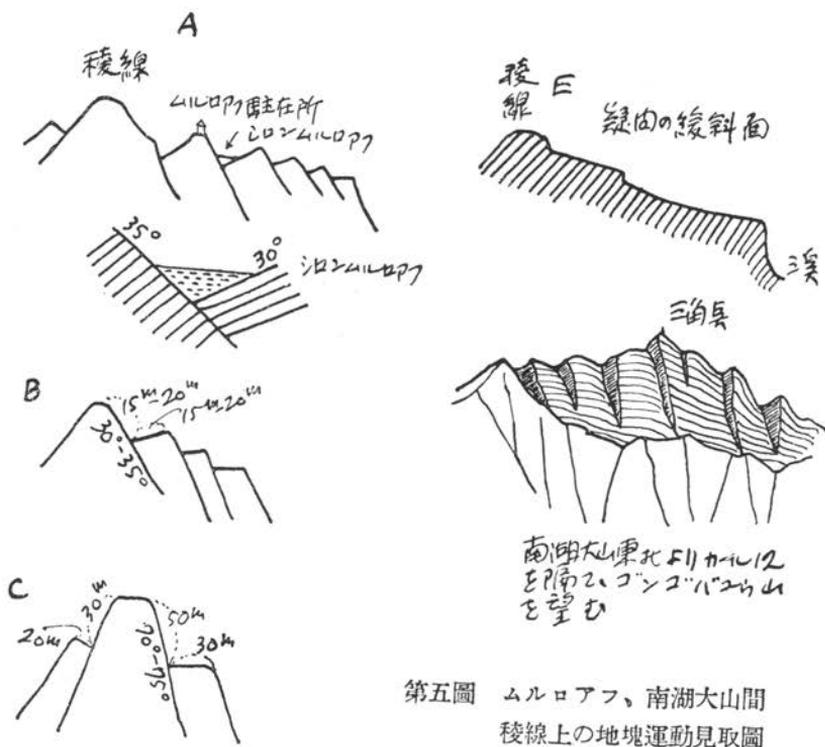


アフリカのキリマンジャロ火山キボ峰(6010m)の場合

第四圖

ムルロアフより南湖大山に至る稜線上の  
小地形を示すA・B・C・D・E等の符號は  
他の略圖と對照するに便なるため附した





第五圖 ムルロアフ、南湖大山間  
稜線上の地塊運動見取圖



## 雜 錄

### 僕達の造る小屋の事を

大 島 亮 吉

本遺稿に就て

この一文は、筆者が入營してゐた頃に、筆にしたものであるから、多分大正十四年頃のものである。當時この外に、既に

雜 錄 僕達の造る小屋の事を

本誌に載せられた「秩父の山村と山路と山小屋と」の一文も書いてゐた。この二篇とも、非常に乘氣で、一気に書き上げたのだが、それだけに筆を驅り過ぎ、あまりに自己の感情を赤裸々に出し過ぎたと云つて、私も何度も勸めたが、遂に發表するのを肯じなかつた。

「秩父」の方の一文については既に木暮氏のまへがきによつて、御承知の通りであるが、今また、「山岳」の編輯者に乞はれて、發表の止むなきに至つた。あれ程斷つて置いたのに、二つとも、而も「山岳」に發表されるとは、故人も定めし浮世に住む人に信を置けぬと、嘆いてゐることであらう。安心して天國に赴いたのに、こんな事なら、滅多に死なれぬと考へてゐるだらう。

然しながら、大島君が發表を肯じなかつたのは、その作る文章に意が満たぬところがあつたのは勿論であるが、山について平常抱いてゐる考へを、何時も無邪氣に、赤裸々に書き過ぎては、後悔をしてゐたのである。自分達若い者の、山に對する氣持をどうキザでなく、表はせるかと苦心してゐるが、文章にすると仲々うまくは書けないものだ云つてゐた。

其頃、學校關係の方から、山小屋建設の費用が出る様な話が一寸あつた。勿論、この話は立消えになつたのであるが、このこ

とが此の一文を草さしめた主たる動機であつたと思ふ。然し何と云つても一片の夢物語りであつて、今日の讀者からみると随分と變に思はれる所があるだらう。當時、私達は、山に關して實現も出來さうもないことは、何時も之を、夢に託する外なかつた。従つて随分と色々の夢物語りをやつた。愚にもつかぬことを、夜を徹して語り合つて、大島君の母堂に狂人扱ひにされたのである。

この「山小屋」の話のときも、大いに話が弾んで、私も片棒を擔いで、出來もしないのに、設計圖は俺が引いてやるなど、云つたが、今そのときの圖は何處かに紛失して了つて無い。

次にこの二つの文に就いて、説明代りになる様な私信があるから、少し長いが、掲げてみよう。

「……この頃毎日少しづつ、いろいろと原稿を書いたり、本氣で本を讀んでゐる。秩父の原稿はもう書きあげる筈だ。そうしたら、是非一讀のうへ、もつとも忌憚のないところを言つて貰ひたい。これは本當の願ひだ。僕も「山岳」に出す以上は少しでも、せめて僕たち仲間まで、キザでない、アツてゐない、若いものは若いものなりとのところのあるものを載せたいと思ふ。ところが今度の原稿は書き出しが變で、文句は新感覺派的な、言葉とエキスプレッションを、まねしてしま

つた。その點で變なのなら、まあ我慢して貰つても、内容があんまりない。見方も大部分は、これまでと變つてゐない。

そして自分でも氣がついてゐるが、あまりに安價な自然陶醉に落ち入つてゐるところがある。それで君に批評を乞ふことにしたのだ。もつとも、いつでもこれから、發表の節には讀んで貰ふつもりでゐるが。とにかくこの次ぎの次ぎぐらひの日曜には自家へ、持つて行くから、いつでも會社のかへりに、持つて行つてくれ給へ。つまらないものだつたら、勿論自分は直ちにすて、しまふ。

それから、いま僕たちの小屋の夢を、しきりに描いてゐるが、それが昂じて、たゞわけもなく、小屋のことを書きだした。そうしたら、ついでに僕と君とがいつか話したやうなもの、詳しく、設計や内部の裝飾なんかについても、思ふまゝに書いてみようと思ふ氣になつた。こんなものを書けば、みんなのヒユッテ建造熱をあほることにもなつて、現實化するのも早いんだらう。「登高行」ができれば、のせることにする。だけれど君のもつてゐる、獨乙の年報の、あのヒユッテの設計圖をすっかり忘れてゐる。どうせ一度はあれを、(または、あれに修正を加へて)セクション・ペーパーか何にかに書くのだから、若し暇があつたら、ほんの略圖でもいい、か

ら、書いてくれないか。できなかつたら本でもいい。あまりに建築上の知識がない。少しは自分でも建築上の術語も使ふつもりで、少し本を読んで書こうと思つてゐる。夢の部分は得意だ。断片的に浮ぶ夢想の一端は、原稿紙にかきつけてあるからいづれ読んで貰ふ。

山の連中は歸つて来たかしら。早く話をき、たいと思つてゐる。そして小屋の話をして、そろ／＼實行運動にかゝるやうに、焚き付けたいのだが、君はどう思ふ。僕は少し夢をみすぎて、あせつてゐるが。

今日はこれで失禮。劍術のはげしい運動のあとで指先がふるへて、かけない。亂筆多謝……」

以上の手紙でもわかるやうに、一年近くの兵營生活に、山に行くことも出来ぬ焦燥も手傳つて、むさぼる様に、山の憧れを筆に託して出来た一文である。内容の問題は別として、今彼を知るほどの人達には、この一文を讀んでは、そゞろに當時を懐しみ、故人を憶ふ切なるものがあるであらう。全く、懐しい追憶なるが故にと、生前の約を破つて編者の乞ひに従つたのである。この三月は早くも故人の七周忌に當つてゐる。

(昭和・九・四・一 豊邊國臣)

前書 (此の一文に添へて)

此の小屋の事に關して種々と夢想的に筆を走らせたり、或ひは種々仲間と話し合つた事、ヒュッテに關しての書籍設計圖を瞥見した際の抜抄等を綴り合せて出来上つて居る紀文は、可成り長い時日の上に置かる可き、僕等仲間のヒュッテに關しての極めて粉飾の無い眞實の憧憬、希望を生意氣乍ら僕一個の筆に依つて仲間全體を代表した積りで思ひ切つて發表するものである。そして全く我等の會の者のみに對して書いたものである。其故僕達の機關たる此の年報に載せるのである。筆者は現在既に此の文の最も古き部分を書き始めてより三年以上を、更らに此のヒュッテに對しての話の持ち上つてからは五六年以上は經つて居るにも拘はらず、尙ほ其の變らぬ夢想を實現せんとして怠らぬ者であるが、又更らに筆者以上に熱心に此れに對して孔々として研究努力を怠らぬ者の居る事を明らかに傳へたいと思ふ。我等が先輩、並びに我等が會の後進者諸兄よ、共に此の企劃の實行に力を添へられん事を望んで筆者

は止まぬ。

此の文中に誌せし事には青年らしい浮はついた夢想も多いが、又一面眞面目に考へたり、熱を以つて本を讀んだ所もある。但し總べては金と比べて考へて居ない。其の點では甚だ弱い。其故總べてが夢だとも言へよう。夢！ 夢想！ 其れでも關はぬ。筆者は夢想多き青年です。だが、此の夢の様なものに依つて、些かなり共我等のクルップヒュッテ(何んなものでも關はない、何處にでもいゝ)の最初のものが造らるゝ機運を醸成するに役立つに於いては筆者並びに一二の者共の悦びは此の上も無いだらう。筆者の爲め其の乏しき知識に對して種々の助言、書籍其他に於いて助力して呉れた豊邊、佐藤(久)兩兄に感謝します。又間接に特にアルプスに於ける種々なる見聞の儘を、參考書を、筆者の爲めに送つて呉れた松方義三郎兄にも御禮申したい。

果して何時の日か？ 僕等の語り合ふ會話と唱ふ歌聲に依つて其の小屋の樂しい“a fireside evening”が活氣づけられるのは！

恐らく、僕達が以前から、造りたい、造りたいと、永く心掛けて居た僕達のクルップヒュッテを、僕達も漸く近い將來に於いて持つ事が出来るだらう。三四年前から度々僕達が集まる度に、或る時は學校を休んで山岳部のルームで、又或る時は友達の家で夜を更かして、夢中になつて、其れから其れへと半ば空想的に語り合つて居たクルップヒュッテの話も、年と共に次第に現實的に近づいて行つて、今度漸く其れが目鼻の付く様な所まで運ばれて來た。

經濟的にも、又社會的にも全く無力に等しい僕達が、兎に角僕達の稍々満足する程度のクルップヒュッテを造り上げ様と言ふ事には、可成りの努力と並はづれた熱心さがなかつたならば其れは到底出来ない事だつたらう。

幸ひにして僕達には思つて居たよりも早く、其れを造り得る様な時が近づいて來た。今ではもう其のクル

ツブヒツテの設計圖——と言ふと大きいが——も、つまらない細部まで暇に明して、相談を、議論を重ねて、ひねくりこねくり、何うにか皆んなの得心行く迄に造り上げられて、ちやんと豊邊の手で、綺麗に、立派に、本式を氣取つてセクシヨンペーパーか何んかに書き上げられてある事だらう。

其れからヒツテを建てる場所も、いろいろと詮議の結果、愈々僕達が寫真で見るシュワルツワルトの雪景に其の山の様子や黒い森の具合が似て居る所から、さう呼んで居る、あの吾妻山群のなかの、度々僕達の訪れて、ヒツテンレーベンを氣取つて來た硫黄製煉所の近くで、東吾妻の山麓と高山の山麓とのあひだの、黒い唐檜の森の中に造ることに略ぼ決定した。

僕達のうちの誰れも皆、大いに今元氣づいて、此の僕達の爲めの、悦ばしい、やりがいのある仕事の爲めに働きたくてむすむすして居るだらうが、其の點では僕だつて仲間の誰れにだつて負けはしまいと獨りで定めて居るが、残念乍らいま身は兵營にあつて、日夜軍

務にいそしむ身體である。最もやりがいのある、實際のヒツテを造る勞働に従ふ時間が得られない。たゞ皆んなの相談にのつて、つまらない無駄口をきくだけである。全く僕もあの山上の高い森の靜かななかで、鑿を打つ金槌の音や材木を挽き割る鋸のひびきと混つて、出来るだけ、自分にできる仕事の爲めに、働いてみたくてしようがないのである。あゝ、そう思ふと僕は全く残念だ。とは言へ、幾ら其んなことを言つたつて仕様の無い事だ。其れで僕は仕方無く、兵營生活のひまひまに、僕にも出来る仕事だと思つて、皆んなに代つて此處で其の僕達のクルップヒツテの設計や其の場所、其の他その小屋の出來上がつてからのことに就いてのたのしい夢想などを、少しばかり書き誌して見ることにする。

(一九二五・六・二〇)

なにしろ、僕達は夢想で生きてゐる。そして、その全くはじめは夢のやうに淡い、とても實現などは出來さうもない内輪の話が、最近になつて少しづつ具體化

して行くのには、僕達自身少しおかしく思つてゐる程なのである。此處でも少し話は夢想と現實との間を彷徨してゐるかも知れないから、其れは豫め斷つて置こう。

僕達の夢の中の話では、僕等のグルッペでは何うしても、時々其の使ひたい目的が異つて來るので、先づ二つの種類に分けられる小屋を持ち度いと思つて居た。其れに就いて少し説明する。先づ恚う分ける。その二つの種類の小屋の、第一のものを『クルップヒュッテ』と云ふ名前をつけて呼ぶことにし、第二のものは此れを『山小屋』と云ふことにする。此の二つの名は決して僕が便宜上からいゝ加減につけたのではない。何時も小屋の話をして居る時、此の『クルップヒュッテ』と云ふ時の小屋の話と、『山小屋』と呼んで居る小屋の話とは全く別物なのである。だからして、此の二つの名は自然的に僕等が、全く形式も異り、其の使用の目的も違つて居る二種の小屋を區別して呼ぶ上の、必要から迫られて出來上つて來たものなのである事は注意し

て貰ひたい。

『クルップヒュッテ』と呼ぶ時、一樣に僕等の胸に描かれるのは、一九一四年より一九一九年の間のSSの年報に、寫眞と設計圖を入れて毎年報毎に紹介されてあつた、彼の數々のスキーヒュッテの中の、何れか此れかであらう。まだ此の他、誰れ彼れはいろんなアルペンフロイントやデル・ウインタール、扱ては讀めもしないノルウェーのスキー年報などで此れ迄その寫眞を見たり、讀んで居たりした小屋を想ひ浮べるに異ひない。又シュワルツワルト、リーゼンゲビルゲ、ファアアールベルク等の美しい樅の黒い森の中に、屋根は程良い傾斜に、構造は嚴丈に、壁は厚く、扉は重くがつしりとガラス窓は外光を映して優しい、彼の好ましいスキーヒュッテの姿をも誰れかは眼の前にと浮べて居よう。

其の様に、此の『クルップヒュッテ』は僕達の久しく待戀れて居るスキーヒュッテンレーベンをやるに、すつかり條件を備えて居る様な、全く歐羅巴風の所謂ヒュッテを云ふ。其の名も A. A. C. K. Klubbhütte と附けた

程、すつかり、ヨーロッパの何處かのアカデミッシュ・アルペン・クラブのクラブヒュッテ其儘を眞似したい位ひだ。其んな眞似をするとか、しないとかは第二の問題として、ほんとに僕達は其の『クラブヒュッテ』にて依つて、僕達の夢想し、係戀れてゐたヒュッテレーベンの愉しみを味ひ、日常の生活にリトムを附けたいものだと思つて居る。望んで居る。いや、熱望して居る。渴望して居る。

然し唯だ其んな淡い、ほんとに夢だけを現實化して見たい慾望の爲めに、僕達は僕達の『クラブヒュッテ』を持ちたがつて居るのではない。種々の點から觀て僕達のグルッペも、もう其んな様な『クラブヒュッテ』の一つ位ひは持たなければいけない様な状態に置かれて居ると僕は思つて居る。其れに就いて詳しくは言へないが、兎に角もう現在の所、僕達が充分満足して冬の間のわづかの休暇に、二三日山と雪に親んで氣持よく滑つて來ようなんて云ふ場所は、東京近くでは無くなつて仕舞つた。——忘れて居た。忘れて居た。此處で

言ふ僕達とは、何時でも學校のことなんかそつちのけで、山だのスキーだのつて、あつちへ出掛たり、こつちへ登つたりして居る學校に現在居る連中の事を言つて居るのでは無い。一生懸命毎日會社で働いて居る登高會の先輩様の事なんだ。其の登高會員の二三人が『クラブヒュッテ』に就いて、今或るビルディングの四階にある一會社の事務所に午後六時頃集まつて、椅子に腰かけ、窓からは日本橋、京橋の明るい燈火を見下し眺め乍ら、一生懸命に語り合つて居る時の氣持で、(いや、實際其んな事は度々あつたが)——僕は今ペンを執つて居るのだ。だから其の積りで居て貰ひたい。——一年の中、十日なり、二週間なり、二十日なりしか休暇の得られない僕達が、彼んなに騒々しく爲つて仕舞つた五色温泉や關温泉へもなつかしいけれど行く氣はしないし、そうかと云つて、慣らしてない身體で學校の連中と一緒に山へも行けない。又山は時日が長く掛りやすいから、時日の餘り餘裕のない僕達にはそのグルッペのなかに加はり悪い。それに時日がなくな

つて途中で歸へることは、グルッペの氣勢を殺ぐ事になるからそれも遠慮をしなくてはならない。其んな事からして、五六年前に五色温泉に五六人の連中が集まつて、未だ餘り人も込んで居ずに、静かだつた其處で、晝の間は近くの小さい山頂に登り、夜は炬燵にあたりながら、談笑し、歌を唱つたりして居た時分の様な場所を、どつか他に求めなくてはならなくなつて來た。

其の爲めには『クルップヒュッテ』の在る事は最も理想的な事である。僕達が若し『クルップヒュッテ』を持つて居たとしたならば、何時でも、時日の長短は關はず、少しも時日の上の無駄も無く、きりきり一杯、最も愉たのしく、そして有意義に其處で過ごして來れる。まして僕達が僕達自身の『クルップヒュッテ』に行つて、僕達の氣持の合ふやうに造られ、飾られたヒュッテの内、心の儘に生活して來る事が出來たら、言はずとも其の愉たのしい事は定まつて居る。何うしても僕達、せめて登高會の者だけでも、何處かに僕達の『クルップヒュッテ』を造りたいとは、もうずつと前から度々話題に上つて、も

う出來上つた場合の想像話も實は聞き飽きて居る程である。

部の連中にしたつて又そうだらう。ヒュッテンレーベン！ヒュッテンレーベン！と以前から云つて居たつて、其の憧憬を充して満足出來る様なヒュッテンレーベンらしいものは、全く是れ迄ほんとに出來なかつたのだ。比較的是れ迄の間で好かつた吾妻の製煉所的小屋だつて、何度も行つたが、まだまだ其れだけでは満足出來ない。

話は前に戻つて、僕達の『クルップヒュッテ』は其の様に主にスキーヒュッテとして使ふものだ。冬を主な目的として居るものだ。そして全く彼地の Skihütte の形式のものでなくてはならない。其の場所として備はらねばならない條件や、ヒュッテの構造、部屋の内部や家具の飾り方迄、細かい部分は、とても長くなつて仕舞ふから書き盡くせないとしても、まあ大體僕の夢に描く『クルップヒュッテ』なるものは、恁んな様式でなくてはならない。

先づ場所だ。二千米突前後の山上の唐檜の、所謂ホッワルトと云ふ感じの森の中。其の餘り樹の密生でないところに其の『クルップヒュッテ』は建つて居る。森の中には、ヒュッテへと一條の幅廣い伐り開きになつて居て、其れに依つて、廣い山上の何處へも行ける。東吾妻の東南麓の所なんか、此れだけの條件には完全だ。もつと岩の出た高い山頂と、雪の深い、スキーで滑るに丁度いゝ傾斜の谿とが欲しいが、それも慾を日本では出せない。そう云ふ所もあるが、其れは餘り其處へ行くのに苦しく、高さも高過ぎて、眞の登山小屋になつて仕舞つて、親しみと安易な落着きが出ない。何うしても美しい唐檜の森の中に在ると言ふ事が必要だ。ヒュッテの前が緩傾斜の斜面になつて居る。だから前下りの場所に、ヒュッテは石でしつかり積み固めた、高い土臺の上に、きちんと、スレート葺きの勻配の強い屋根で、其の下にポーチナルの玄關と階段のファサードが見え、圓味のある厚い板を下見に張つた側面は堅固に、そして重々しく、數の多い小さな窓とを持つて建つて

居る。そして冬になると、雪の積つた、懐しい冬姿の其れ等の樹々の間に、先づヒュッテの煙突から上る柔かな煙が見え、四十五度位ひの角度の急な勻配の屋根を持つたヒュッテの美しい外觀が半ば以上見えて、深いシユプールが其れに續いて居る。ヒュッテのポーチには五六臺のスキーが何時も立て掛けてある其の間の入口の扉を押して内部に這入ると、室内は燠爐で暖められた空氣が、外と比べては全く春のやうだ。そして相變らず煙草の煙りの渦卷いて居る中で、賑やかな仲間の話聲が起つて居る。

ヒュッテの内部は外觀と同じやうに簡素で堅固だ。思ひ切つて厚みのある壁を切り抜いたやうに、だが比較的小さな窓が充分な明りを入れた居間書齋兼食堂臺所の總べてを兼ねた部屋と十六人が寝られる二段になつたベットのがある落着いた寢室。居間の方には、その板壁の半分に造り附けのベンチ。空いた各隅の壁面には都合好く簡素に、丈夫な、厚板の隅棚がつけられてあり、其の一隅を占めた食器棚の段々には壘や皿小鉢がきち

んと並び、青縁の珈琲茶碗は列になつて釘にかゝり、そして入口の正面の壁棚にはかすかすの脊文字の金色の輝く山の書籍が立ち並び、其の上部の板壁にはきつ

響の好い、忠實な tic-tac を歌ひ、煖爐の飾棚の上には青銅製の古い型の燭臺、食卓の上には大きな露西亞風の臺ランプが置いてある。

と豊邊の描いたウインパーの晩年の肖像が、其の引き締つた口元には青年時代から鍛はれた剛毅と不屈の勇氣との名残を漂はせ、右手にパイプを、左手はズボンの衣囊に入れて、どつしりと椅子に腰を下した精悍なポーズ・カラクテリスティックで、僕達を見下して居ることだらう。そして部屋中央には、粗造りの、だが巖丈で厚い食卓と椅子はウイラントの油繪の其れのように据えられてある。食卓は部屋の面積の許す限り大きな、どつしりしたのを置きたい。もう一つ大切なものは、同じく部屋の一隅に其處を暖かくし、親しみある、楽しいものとする煙道の附いた煖爐である。ヒュッテンレーベンの持つ團欒、家庭的な和樂は總べて、其處に燃えて居る太薪の焔のやうに、其處より、其のぐるりの Ofenbank よりまた燃え上るのである。そして古い時代遅れの柱時計が板壁に掛り乍ら、夜になると

其れ等のものが、まあ其のヒュッテの中の居間での主な家具や小道具であらう。其處は居間であり、食堂で

あり、そして臺所であるのだから、又勢ひ散らかり易い。殊に其の食卓の上の光景は、時には極めて整然とし乍ら、多くの場合實に酷く亂雑だ。僕達は其れを多くは其の時々の自然に全く任して居る。朝に料理竈のうへの湯沸しが、ふつふつと沸いてゐ、雪に照り返された朝日の光りは厚壁で奥まつて見える小さな窓から太い線になつて流れ込んで来るやうな時には、まだ

／＼其の部屋の中は如何にも快適に調つて居る。然し晝前も過ぎて、晝過ぎ、其れから何時とはなく夕暮れの紫色が此の森の中のヒュッテをしつとりと包んでしまつて、食卓の上の例の臺ランプの燈がほつきかりと質素な部屋の中にひとり花のやうにともる頃となれば、其の亂雑は言語道斷であらう。脱ぎ棄てられた手袋、帽

子、抛り出されたルックザック。其れが片附けもされな  
いで、食卓の上には皿やコップやナイフが轉つて居る  
と言ふ有様。だが其れでいゝ。其れで關はない。僕達  
は何時も部屋の中をゴト／＼と女みたいに片附けて許  
り居なくていゝ。亂雑の中に自ら秩序を見出すのが、  
ヒュッテンレーベンの好い所だ。恐らく、其處での夕餐は  
最も愉たのしいものだらうと今から想像される。此の日本  
の黒シユルツワルト森の輝かしい冬の落日に彩らるゝ時、其の山  
上の荒原の雪の上に微かかにシニプールを残して、僕達は  
森の中のヒュッテへと、暖い煖爐ストーヴの傍を愉たのしんで歸つて  
来る。さあ、早く僕達は今から此の山上の一日の散策  
がへりの空腹を抱へて、僕達のヒュッテに歸り、その簡  
素な夕餐の料理に向はうよ。切り口が粒胡椒と脂肪と  
肉とで張ち切れそうで、全るで蓄薇色大理石の斑のや  
うな腸詰エンゲツの厚切りとパンとを盛つた瀬戸引皿と厚手ちかぢの  
茶碗に一杯に注つがれた珈琲との、楽しい晚餐に早く向  
ほうよ。そして此の黒い森が物語めいて其の四周を取  
り巻いて居るヒュッテへと辿り着けば、早速煖爐を圍ん

で、或ひは食卓に倚り掛つて、僕達は己れをさらけ出  
して、平氣で夕餐を攝る。いや、貧り食はれる。愉快  
な、朗かな話聲の合ひ間に、パンは勿論上品振りは微  
塵もなく嚙かぢられる。此れだけは此の『御館おやかた』でなく  
ては見られぬ圖だらう。勿論僕達は残らず平げる。時  
々は取つて置き、葡萄酒の壘も食卓の上に恭々しく持  
ち出される。そして疲勞の後の微醉に益々いゝ氣持で  
勝手に煖爐のまはりにふんぞりかへる。笑聲、聲高な  
話聲、扱あては床ゆかを鳴らして歌ふ男聲二部合唱。耳を聳  
するばかりで聞いて居られない。うるさい！全くうる  
さい！靜かにして呉れよ！そうする事の一時間、二時  
間の後には部屋は何時となく靜まつて、其の日の登山  
に疲れた者は早く寝る爲めに、明日遠出の登山計劃を  
持つた者は、よく寝て置く爲めに各々何時か隣室のシ  
ニプールフラウムへ退却して仕舞ひ、煖爐のまはりは物  
靜かに、猶ほも僕達の幾人かの熱心な話は盡きそうも  
ない。そうすると、もう隣りの藁蒲團と毛布の中では、  
ぐうぐうと健康な嗚聲が聴えて来る。

不圖話が途切れた間に一人が煖爐の傍を立つて、窓邊へと行き、窓掛を引いて外を**ガラス越**しに覗けば、星は冷たくはあるが、ちらちらと優しく光り、ほの白い雪の上に浮く黒い森の姿は恰もシェークスピアの『冬物語』のやうに懐しく、外はマイナス八九度のちりちりする寒さに、窓枠に積つた雪は鹽のやうに細かい。そして明日の上天氣に急によい一日の登山を思ひついたかの様に起き残つた者も早速と寢室へと引込んでしまふ。壁の柱時計がぼん／＼と古めかしい音で十一を打つた頃だらう。けれど多くの日此の山上も冬の期間は天氣は一帯に不順で悪く、荒天の続く事もある。だが尾根や森のない荒原では北西風の吹雪は強い横なぐりでも、此の森の中は餘り風も通らず、煙のやうに渦巻く粉雪の中に僕達は縦横自在にシュプールをつけて兎と一緒に僕達は滑べり遊べる。

然し雪を持つて来る北西風の息が次第に弱つて、自然の層がだんだん生氣に満ちて来る頃となつては、此の『クルップヒョッテ』のぐるりも面白い、長い、變化のあ

る一日のスキー登山が澤山出来るやうになつて来て、僕達も日毎此のゲビートの四方の山頂や秋の終りから靜かに凍りつゝ憩つて居る山湖を訪れ歩く、悦ばしい山上の彷徨者となつたり、熱心なスキー滑走者となるに忙しい。今日はあの平を通つて北の尾根からあの頂へ行こうとか、あの山湖の上の頂の雪庇の上で晝飯を食ひに行こうとか、又一番ヒョッテからは遠いあの未だ仲間の誰れも行つて居ない山頂へ行こうとか、各變化に富んだ組合せの行程計劃は殆んど十日間位ひは打つ續けて出来る。晴れた日の續くに従つて雪の結晶は粒を大きくして堅くなつて行く。冬から持ち越して来たあの尾根や荒原の雪の漣痕も次第に其の波頭を圓めて行く。僕達は朝早くからアルミの大きな辨當箱に種々と手製の晝飯を詰め込んで、其れを擔いで出掛ける。——と書いて、其れから先きは夢想するのも惜しい位ひだ。まあ此處いらあたりでスキーヒョッテの夢物語は止めて置かなければ、其んなに種々と其れから其れへと書いて居ても、何處迄續くか見當が附かない程だ。兎

に角此の山上の高き森の中の我等が『クルップヒュッテ』こそは、あらゆる夢想と現實とを織りたゝんで僕達皆んなの心胸内に久しく花咲いて居るのである。

今度は僕等が小屋に就いての第二の夢想である、もう一つの所謂『山小屋』の事に移る事にしよう。

『クルップヒュッテ』が其の様式に於て西洋風なのに對して、『山小屋』はずつと日本風な小屋である。小屋と云ふより、百姓家に近い。山家だ。シャレエだ。其れは『クルップヒュッテ』よりずつと通常の住家と言ふのに近い。全然外觀は日本の山家でも好い位ひだ。シャレエ造りでも好い。僕等は、季節を限らず何時でも好きな時に其處へ行きたい。そして幾日でもいゝからほんとに身の滋養になる様な、心からのびのびと、一秒くが愉しい時間である様な日を送つて來たい。『クルップヒュッテ』の方が高い山上の唐檜か樅の森の黒い森の中に欲しいのなら、此の『山小屋』は、餘り高くない山腹の緩かな傾斜地で、落葉松の林の中に欲しい。小屋の直ぐ傍らには綺麗な湧き水か小さい流れがあ

る。又小屋の背後には落葉松の林からずつと黒い森が續いて居ても好い。又岩と草との緩やかな傾斜地が終ひには頂となつて居ても好い。其れで居てずつと上方尾根續きに鋭い岩の尾根が見える場處なら、嬉しくて堪らない。其れから小屋の前の方は、ひろびろと展けて居て、山裾の谷から遠く平原までが見渡せる。朝には太陽はそこから昇つて、いち早く其の小屋の玻璃窓をきらきらと閃めかし、夕暮には小屋のぐるりを取り圍んだ青い落葉松の梢に、背後の岩尾根の稜線をかすめた落光が薄く薔薇色に射すだらう。其んな風に僕等の心の全るで火のやうに明るく輝かしめる悦びの夢は、書き附けたらきりもない。夢想が現實を生む。いや、生んだ。トラウム・ウンター・タート。やらう。やらう。僕達の夢は其れを現實にする第一歩だ。夢が無くて、憧憬が無くて、理想が無くて、何んで、其れはやつて來よう。然れば、我等をして思ふが儘に夢みさせよ。否、僕をして、獨り、今、此の東京の高臺にある兵營の、其れも其の山小屋の内部の其れの様質で、

頑丈な居室の緑深い窓邊に倚つて、僕達の此度造る山小屋に就いての、此の愉しくも美はしい空想の數分間を許して呉れ給へ。

(一九二五・六・二五)

何しろ僕達は、僕達の永い間の夢想と、ほんとに僕達手づからの汗の勞働の結晶體として、僕達の其の『山小屋』を、此の秋までには、恐らく、あの落葉松のこまやかな枝の中に、其の屋根は平たく緩い勻配に、圓いおさへの石を載せて、その外構へは重々しく、さも頑丈さうに角材の積目を見せて、そして窓枠は太く、白塗りに、扉は厚く、稚拙な感じのするスイスシャレの飾彫の凹凸の目を浮き出して、僕達の僅かの手業を示し、新しい木材の香を湛へて、僕達其の小屋の主人を待ち受けて居て呉れるだらう。そして若し、それが夕暮だつたなら、其の窓から樹々のあひだを洩れてくる其の小屋の燈火は、如何にも親しみ深く、僕達の楽しい住家として、僕達を迎へて呉れる事だらう。あゝ、其の『小屋開き』の悦ばしい、僕達だけのいとも小やかな祝祭の日。其の日、僕達は心から悦びに充ちて、

部屋には山に咲く花をさゝげ、山の歌をうたひ、その日の夕餐はわざわざ都から準備して來た些かの食物と葡萄酒の數壺を前にして、快活な祝福の一盞を揃つて舉げる事こそ、其の日の小屋開きの祭に最も相應しからう！ 何んと、君達、其の日の來るのが待遠しい事だ！

此の『山小屋』が夏から造り始めて、秋も半ばに出來上ると云ふ様になれば、最も好い具合だ。『小屋開き』の日は十月の半頃の日にしたい。そして雪の降るまで僕達は度々其處へ先づ行きたい。臆がて遣つて來るのが十一月十一日のサン・マルタン祭。晝間は暖い小春日和が續き、日本の秋の天空と雲と風とはさえずりとして、四季の中で最も日光と蒼穹との美しい花盛りとなる。秋はいつも明るさと色彩に乏しい日本の自然の最も色彩の多様で、鮮麗になつて來る時だ。僕達は充分に秋の山の氣をそこに身に泌ませる。悦ばしい青空と太陽との晝間は散歩をしよう。讀書をしよう。けれど冬を控へた其の時分は、また冬の準備をして置

かなければならない。薪きだ。此れを澤山に造らへて、彼の小屋の背後の軒下に一杯に積み込んで置かなくてはならない。小屋の背後の岩の尾根へはもうほの白く年の最初の雪が来て居る。朝夕の寒さの中で、僕達は毎日日課のやうに薪を造る。其の時の光景が眼に浮ぶ。其れは深い年月の間僕達の心胸に、るゐるゐとして隠れて居た美しいものが、今恁んなにも明るい、希望の朝紅となつて、寶石を含んだともし火のやうに、かくかくと僕の眼に浮んで来るのではないだらうか。霜と寒氣の中に曙光が、其の山小屋を虹色にする時や、或ひは夕暮が其れを紫に包まうとする時、小屋の戸口の前で、・ 樂しげに習ひまほへの Luaged vo Bergen u Tal,

Luaged vo Bergen u Tal,

frie scho der sun na Strahl,

Luaged uf Aunc u Matta,

woscha die dunkela Schatta,

Sun uf de Berga no stohd.

雜 錄 僕達の造る小屋の事を

Hei wi si Gletscher so rot!

Hei wi si Gletscher so rot!

とS・A・Cのリーダーブーフにあつた瑞西はアッペンツェルのアーベントリートを歌ひ乍ら、鉦をふるつて一生懸命に薪を造つて居る、襦衣の袖を二の腕までまくり上げた君は。君の打ち下す鉦の響の下からは、乾き切つた枯枝が火花のやうに飛び散る。今や其の時、重たい山靴やまぐつを履いて、毛糸の荒編みのテルシャツで、まるくと着肥つた君の體軀は、全く若さと健康とにはち切れるばかり。其の姿は全るで瑞西の山人やまびとを髣髴させる様だ。此の小屋での薪作りの仕事こそ、今想像しても樂しそうだ。恐らく僕達は其處での労働の一切を、無上の愛着と不惑の精神とを以つて愛するであらう。

然し、夜、一日の散歩と労働とが終つて、此の山小屋が星の光りと霜とに圍まれる時、又僕達に別種な愉しみが始まつて来る。秋の終りから冬に掛けて、丁度其の時分からが彼の愉たのしい夜更よよしの時節。小屋の外に

は、或る夜は星が燦めいて、薄氷し、或る夜は霧が黒い樹々の間を流れ、そして或る夜は音も無く雪が静かに降るのに、扱て小屋の中では其の狭い部屋の煖爐の温氣と煙草の煙りの中に、何んなに僕達の會話が勢ひづき、熱をもつて、夜の歩みともどもに續いて行く事だらうか。そして其處からして何んなに僕達は僕達の山への熱情を、更らに、更らに高める事となるだらうか。

サン・マルタンの祝祭が過ぎると、今度はもう直ぐに基督降誕祭。此の時の休日には、是非とも蠟燭とワインハツリートの合唱を一生懸命に習つて、又僕達は其處へ出掛ける。其のワインハツアーベントには、狭い、飾り氣のない部屋の中も、常緑木と燭臺と僕達の持ち合せの手業で心ばかりに飾られ、歡びの聖なる火は明るく花やかに燃え、そして小屋の外は一面の雪。小屋の中は神々しい歡喜の祝祭。冬の夜更けに、僕達の歌ふ悦びの歌聲は、小屋を洩れて邊りの黒い樹々の間に響いて行く事だらう。

降誕祭以後、雪も少しは積る此處いらよりも僕達もつと此の雪の多い山上の森の中の『クルップヒュッテ』へと、スキーを擔いで出掛けて仕舞ふ。一月、二月、三月と冬から春の初め迄は、其處の人口の扉の錠も餘り外される事はないだらう。石を載せた低い屋根は靜かに降る雪を春まで載せて僕達を待つて居よう。

細い雨が小屋の屋根の雪を融かして、軒からぼたぼたと滴れる頃になる。そしてやつて來るのが今度は復活祭。と云つたところで、何も僕達は其れの信仰も無く、習慣も持つて居ない日本人だ。降誕祭位ひなら、多少祝祭じみた事をやるかも知れないが、そう西洋のお祭ばかりをやる譯ではない。唯だ季節を綺麗に言ひ表はす爲めにそのお名前を拜借したに留まる。日本のお祭の名でもいゝが、餘りいゝのが無い。ことに小春日和の時分には、それに合つた祭もない。それなのに『サン・マルタンの夏』なんていふのが、丁度あつたから、其れを借用して居るまでだ。復活祭の時もお釋迦様の祭りと謂つたからと言つても好い譯だ。けれ

ど餘りいゝ名ではない。下らない事は止して、兎に角僕達は其のイースター・ウィークには小屋を開けに行くだらう。其の時をこでは、日蔭、谷隅たぐまの雪は未だ溶けない。けれど山小屋の前の日の當る草場は、黄色く、乾いて、山の上の遅い春のほのぼのとした愛の下で、小屋の邊りを圍む落葉松の林はまだ冬寂びては居るが、其れで居て柔かに何處か芽ばみ、春の草花は、恙も無く簇々と芽を萌して居る。空は薄青い霞を引いて、綿毛のやうな雲が軽く飛び、平原は青味がうつて来る。もう駒鳥や四十雀の元氣な朝の歌が、春めいて風と一緒に、小屋の周りに聽える。僕達は勇んで出掛ける。少し何時もより多勢で。そして新しい家具等を運び上げる爲めに。冬の間溜つた塵芥と埃とを片附けに行く爲めに。そして僕達は好く働いて掃除の出来た綺麗に片附いた小屋の中に新しい季節の光りの下にある。此の僕達の微塵の亂雜も無い部屋の朝を愉しむ。臺所で滾たぎつて居る湯沸しのふつ、ふつと跳る音も何んと無く懐しければ、大きな食卓に皆んなで一緒に向つて、

折角擔いで來たパンと珈琲との質素な朝食あさけを攝るのも楽しい。其處で過ぐす僕達の二日なり三日の日數。何んの課せられた仕事も無く、義務も無く、終日を散歩と讀書と、食事や薪割りや部屋の設備の造りかへ等の楽しい些事に没頭する日。天氣の好い日には小屋の前の枯草の上に寝をべつて、其處の柔かな光線と落葉松の煙のやうな、針のやうに織い編み目の枝張り、溪谷や平原の霞んだ風物をぼんやり眺めて居ると、全く何もかもが身の滋養に爲るやう氣がするだらう。其の頃の光線は柔かで人を酔はせる。そして夕暮は、臺所で夕食の仕度の合ひ間に、三疇得意のトランプの木靴がを突つ掛けて小屋の戸口へ出れば、今は丁度平原の方かたは夕映え。一望の谷、山裾には徐ろに闇が生れ乍ら、小屋の屋根と落葉松の梢は西天の眞紅を浴び、別けても四邊あたりには水のやうな空氣が流れて居る。あゝ、眞の『山小屋』の春の夕暮！ 其れは誰れも悦ばずには居られぬ美しさだ。聽て小屋も其のぐるりも淡紫に暮れなづめば、小屋の中の部屋では食卓の上の臺ランプの

燈がそろそろ花やいで来る。其の下に、僕は僕達男  
 手の手料理の、だが自慢のごつた煮の、牛肉の強いぶ  
 つぎり、蕩ろけるやうになつて居る玉葱、馬鈴薯など  
 のぐつぐつ煮えてとろりとした味噌鍋を真中に、炊き  
 たてのあつい飯の、素晴らしい晚餐の食卓をかこみ、  
 扱てはたつた一壘しかないキング・ジョージの一盞を  
 あげる。なには無くとも其處では總てが美味く、そし  
 て僕達の健全な食欲を満すだらう。

そうして夕食の後は、冷えくする外氣を避けて、  
 煖爐のぐるりに集り、楽しい食後の珈琲を吸らう。若  
 し出来たなら、部屋の一隅の隅棚の前で此の選ばれた  
 時間に選ばれたレコードの二三枚を廻轉させたい。其  
 れが出来なければ、僕達が持ち合せのレコードで澤山  
 だが。そして歌を唱つたり、口笛を合せたりして居る  
 と、若者の心を無くそうとして居た登高會のオヤジ連  
 もすつかりよりがもどる。

扱て次ぎに僕達には、其れに續いて来る太陽と微風  
 と花と若葉との光明の季節に於ての、此の小屋の事が、

又愉しく空想せられてならない。光明の五月、緑葉の  
 五月、若葉と花。此の時山小屋をかこむ落葉松の枝々  
 の葉むらは緑の煙りのやうに、柔らかに柔らかに、好  
 いコントラストを以て、小屋の黒ずんだ、頑固な外觀を  
 包み、白い窓縁が其の間から見えて、ふかぶかとした  
 路の奥に、そよかせの休息の歌を以つて僕達を悦び待  
 ち受けて居て呉れる。僕達の小屋での生活は又幾度か  
 交るく其處で過ごされる。其の頃だらう。食卓の上  
 の間に合せの花瓶となつたガラスの大コップに山に咲  
 く〔花―一字編者挿入〕などの絶えず投げ入れられて居  
 るのは。そして季節は季節へと事もなく移つて行く。  
 春と夏とのあはひの時。開窓の明るい下に、僕達の  
 夢想と勞作とで造り上げられた大きな食卓も、今は滑  
 らかに光り、剛健に厚く、其の上には讀みかけた本が  
 緋かれたまゝ置かれてある。皆んな山へ遊びに出掛け  
 て、くじ引で残された一人が食事の事を受持つて、  
 心も静かに一人何かことかたと臺所を出つ入りつ仕事  
 してゐる。馬鈴薯もキャベツも燂でた。薯は皮まで剝

いてしまつた。はては晩飯ばんめしの用意の水汲みまでしてしまつた。一日中緑の中を歩き廻つて、疲れて腹ペこで友等が歸つて来るには、まだまだ時間があつた。そして彼は一人その山小屋の閑寂な中で、窓越しに、輝く空を眺め、そこから降り落ちる黄金の光を豊かに吸ひ、身に泌ませて思ふがまま、讀書ができるのである。

扱て、そうして太陽が夏至を過ぎるとやつて來たのが、喜びをもつた夏の季節。小屋をかこむ自然は熾んな、水々しい扇を開いたやうに美しくなる。三伏の夏日の都會の暑熱を逃れて、僕達は、一日でも、二日でも其の山小屋の涼しい部屋、地面に映るすゞやかな、きれいな落葉松の葉蔭の下を慕つてやつて來る。勿論、場所も高いから、其處は涼しい。其の上壁が厚いから、暑さも通らない。そして、君達、窓を皆んな開けよう！

そのこの譬へ様もない爽やかな山風を、戸口から屋根裏まで導き入れよう。小屋の傍らの岩の間から滲みで、來る山水かみづは、冷たく、うまくて、それは都會のなまぬるくて、甘つたるいソーダ水の比ではない。其れか

ら寝部屋の中でころがつて晝寝の愉しみ。あゝ、平原の、地上の炎夏も其處では繪空事だ。一日青葉の中で、晝寝と仕事をしてから、夕食をしたゝめると、雲の美しい夕方。それから涼しい夜。小屋の周りでは益斯とすい、つちよが啼きしきり、空を横ぎつては牛乳を吹き掛けたやうな銀河の流れ。そして、暑い身體と氣持を其處の涼しい、綠色した山風やまかぜで颯々と吹きさました僕達は、新しい元氣で、また都會の暑熱の中へ働きに歸る。

季節が變つて、雲の美しい秋が其の山小屋にやつて來る。そうして此の山小屋の最初の一年が終るので。おい、全るで夢想な完全に最初の一年位ひはすつかり豫定が附いて居るからやり切れないぢあないか。

ところで、其れ等のヒョッテや山小屋が出来上つてからの事ばかりを書いて居たつて仕様のない事だから、今度は同じ夢想でもつと話を現實的にして、建てるなら何處に、何んなのを、何うして造るかの問題に移

りたい。事少しく非現實的の様なれど、必ずしもそうで無いのである。ヒマラーヤへ行く事が夢の様な話で、又それでも無い様なのと同様に、此のヒュッテと小屋の話も、パッと起つて直ちに出來上るかも知れない。勿論壁の薄い、間に合せの山小屋で、とても永くは居られ無い様なものを建てるのではないから、千圓位ひの金では駄目だ。三千圓は最少限度要る。此れだけの金がへぎ出せれば、先づ大丈夫だ。

先づ順序の上から、最初に安く出來る方の『クルップヒュッテ』に就いて始める。此れは割合に小さいものだ。平面圖を見て呉れば、一目瞭然なのだが、少し蛇足的に、又二三圖面に表れぬ部分に就ては微細に説明する。

大體僕達のクルップヒュッテは、全然歐羅巴風其儘にしたいと思つて居る位だから、此處に掲載した設計圖の原案も、全く彼地のもので、其れに多少僕達の具合に適した様に極く小部分を工夫しただけである。其れはエンガデンにある Die Skihütte Corviglia の設

計を参考したのだ。(設計者は Architekt Emil Weber である。)大體の目的は、約十人位ひの人数のものが、其處へ行つても、餘り窮屈で無く、面白く、小屋に居ても愉快で苦痛がさして無いと云ふ事を主眼にした。勿論風呂とか用水とか、便所、寢床に就いては充分では無いが、其んな點の不便は山の上のヒュッテなら何處のでもに伴ふもので、そんな點の充分なものを欲するのなら、其れはヒュッテを持たうと云ふ事に全然理解の無い者の設計だ。然れど此の設計は可成りに Wohnlichkeits- und 云ふ事を考へて居る筈である。僕達の好尚の點で限りあるが、金のある限り設備は勿論好くする筈でもある。

建てたい場所の事は最も問題の難しいものだから、其れは後廻しにして、ヒュッテの設計の事を最初にする。勿論場所に適應した様に、總べては設計せられねばならない。其故場所の事を最初に爲す可きであるが、此處では都合上場所は、前にも書いた様な個所に假定する。吾妻の製煉所の裏の唐檜の森の中と思へば、知つ

て居る人には想像される事だらう。

先づ其の場所に就いての假定的な條件を擧げる。

△高度千五百米突位ひの高地にて、唐檜の森林の中。

△北と西に山を背負ふて居る。東と南は開潤で、眺望

が良い。

△ヒュッテの敷地は東に向つて五度の傾斜地。

△敷地は森林の中なれど比較的乾燥せる地。

△水の供給は、直ぐ手近かに清冽なる湧水がある。(但

し冬期、春の早き間は積雪の爲汲む事が或ひは不可能

なる事ある故其の間は雪を用ひる。)

△冬期から春期の始めに掛けては、山上の裸出地は北

西風強く、積雪量平均五尺に達す。冬期の間は氣温も

低く、最低マイナス一〇度に下る場合も時としてはあ

る。

△其の代り夏は涼しく、蚊、蚤の類に對する顧慮全然

不要。

先づ以上位ひが、其處の土地、氣候の一般的條件で

ある。設計は以上の條件に従つて考へられて居る。

ヒュッテは其の正面を東向きとし、背面を西方の傾斜

地に向けて居る。そして窓は四方にあるが、北面は僅

かに一つで、東南西は夫れ夫れ二つ宛取つた。そして

此の前下りの傾斜地にヒュッテは、セメントで固めた堅

固な石積みにした土臺の上に建つて居る。此の地は先

きに擧げた場所の假想條件にも在つた様に相當の積雪

地であるが爲め、土臺が低いとヒュッテは半ば以上も雪

に埋まり、窓を塞がれて採光の點で困るから、可能的

に土臺は高く積み上げる事が必要なのである。其故土

臺の高さは正面に於いて約五尺、背面に於いて三尺の

高さとな爲る理である。其故正面には同じく石積みの階

段を作る。其の場所附近にある玉石や割石で荒つぽく

仕上げただけで充分であらう。

間取りは出来るだけ簡單にして、僅かに二室である。

一つは居間、食堂、臺所と之れに書齋をも兼ねさせた

比較的大きなもの、寢室は其れよりすつと狭く、窓も少

なく二段の寢床が十六人を正規に收容し、萬事こじん

まりして居る。此の居間兼食堂、臺所、書齋となつて居る部屋は、何しろ主要な室であるから、充分採光した、日當りの好い、快活な、窓の多い室とした。そして正方形でなく、長方形としたのは、萬事同じ廣さでも廣く使はれ、又廣くも感じて、此の限られた小さなヒュッテの内部を出来るだけ廣くしたいと云ふ爲めである。此の居間の方は東、南、西に二つ宛の窓を持つて居るが、東と南は森林が可成り切り開いてあるから好く日光が射すが、西は山を背負ひ、其の上ヒュッテを圍んで唐檜の森があるから、西日が玻璃窓を輝かす様な事は無い。又居間の各隅は充分に隅棚を作つて便利にしてある。

此のヒュッテの間取りでは、以上の二つの室の他にポーチと屋根裏室がある。此れは一間幅のものだ。そして入口と兩側を除いては、手摺が附いて居る。此のポーチはスキーヒュッテには非常に好いものだ。數多くのスキーヒュッテ（但し主として中歐のミッテルゲビルゲに建てられてあるものだが）には殆んど皆附い

て居る様だ。此れは尤もバヴァリア、瑞西やテイロール、北伊太利の百姓家等にも好く附いて居るらしいので、彼地の一般的な建築様式なのかも知れないが、其れは兎に角何うでも好いとして、スキーヒュッテには此の張出玄關は是非共必要だ。スキーヒュッテならば、スキーを立て掛けて置くのに便利だし、日向ぼっこに好いし、一寸部屋では出来ない荒つばい仕事をするのに好いし、其の他一寸した物も一時屋根の下に置けるし、何かにつけて便利である。但し一つスキーヒュッテとして困る事は、雪が降り込んで積る事である。此れは仕方が無い。僕達が其處へ行つて居る間は、降り込めば直ぐ歸つて仕舞ふから好いが、始めて東京から出掛けて行つて、ヒュッテに這入らうと云ふ時に、ポーチに雪の二三尺も積つて居るのは良くない。然し恐らく東向きで、屋根の下であれば、其んなに降り込んで積つて居る様な事は無いと思ふ。殊に奥行の一間もあるのだから、せいゝ積つても外側の方の三尺位ひの間であらう。屋根裏室は主として物置用で、食用材料、不用の

家具、小道具、薪、石油其他何んでも邪魔な物品を上げて置き、小梯子で上下する。

土台、間取りに次いで、ヒツテの形式である。此れは大體が彼地のヒツテ其儘にしたのだから、餘り問題は無くが、原圖の Carviglia Hütte は主として石造であるが、僕達のは全部木造である。石造は勿論丈夫で、どつしりとして立派だが、餘りに立派過ぎて不調和だし、また費用がかゝつて駄目だ。木造は木造だが、細いヘナヘナの木材は使ひたくない。骨組と外壁だけは太く、そして厚くしたい。

壁は外壁は厚板の下見張りか其れ共大分瑞西山岳會建造の登山小屋(例へば Finsterahornhütte の様に)の外壁のやうにシングル張りに、内壁は普通の板壁。其の間には鋸屑・小石・木屑其の他を入れる。此れに依つてヒツテは完全に耐風的となるし、又堅固になる。屋根はその勾配は四十五度位ひで勿論簡単な切妻形で、スレートで葺きたいが、餘り費用がかゝればシンドルか日本式の粉板の板葺でも好い。勿論防腐劑、ク

レオソート油を塗布する。

窓は開窓で、兩開きで外開きと爲る。窓は壁が厚い爲め内側の膳板の上には一寸した物が置ける棚と爲つて居て至極便利である。

室内の造作、家具に就て今度は説明しよう。設計圖に依つて説明して行くと、居間の入口より入つて右手の一隅(即ち圖上右南隅)は全部厨用と爲つて居る。入口左手の壁棚は食器棚であり、窓に向つては料理卓があり、其れに隣つて料理竈がある。寢室に通ずる間の壁棚の入口に近い一つも厨用である。

入口扉左手寄り居間の半分を環つて板壁には造り附けのベンチがある。此れは一般に瑞西やテイロール、バイエレンの民家の居間にあるもので、實に便利である。食卓は二脚ある。3×5・5尺のものである。勿論大なるもの一脚より小なるもの二脚の方が種々の場合便利である。椅子は設計圖には表はれて居ないが勿論數脚ある。入口正面の板壁にある建て込みにした凹棚は書棚用に用ひ、圖上には表はれて居ない隅棚(圖上

左北隅と左南隅)は雜用棚に用ひる。居間寢室間の壁棚の他の一つも又同様である。

右北隅には煖爐がある。始め採暖と兼料理用の竈一個で充分だと思つて居たが、何しろ暖室法は此のヒョッテの全生命である上に、僕達は此のヒョッテではファイアサイドを楽しむと云ふ事も實に一つの大きな目的なのだから、費用はかゝつても充分な事にした。

故に實に便利である。此の石造の煖爐は所謂 *offener Kamin* だから其のぐるり直かにちらちら燃える裸火の焔で顔を赤く照らされて、談笑も出来るし、又家全體の感じもよく、住む氣持の方からも非常に好いと思ふ。勿論煖爐の方の煙道がメイン・チムニイであつて、料理竈の方は支道となつて前者に合してしまふ。

寢室には寢棚の他には何も無い。寢具としては寢台用藥蒲團が寢床に敷き詰めてある。此れはアルプスのヒョッテでも用ひて居る所があるが、始めは唯だ彼地一般の例に慣ひ、藁だけを寢棚にバラの儘敷く例を採らうとしたが、其れは散らかり易く、従つて室が汚れ、

身體にも附いて困るから、藁蒲團とした。此れなら日光にも時々手数なく當てる事が出来て衛生上も好い。

上蒲團は勿論毛布である。一人二枚續き三枚宛であるが、正規人數よりは、少數の場合が多いから大概は其れ以上を一人が用ひられるので、寒い事は無い。寢室と居間の間の所謂間仕切りは扉でなく、厚い布地のカーテンを掛ける。然し其の代り入口の扉は思ひ切つて重い頑丈な、一分の隙もないものにする。薄い板の軽い扉戸は少しの風にもガタ／＼して不愉快だし、ヒョッテの外観をも貧弱にする。寒氣の厳しい場所故、居間へ迄には戸外から二重の扉がある事は望ましいが、費用、設計の都合上其れは割愛した。尤も普通の登山小屋、スキーヒョッテでも皆一重の扉であるから、保温上は一重も大して不便不利益では無いと思ふ。殊に此の設計には普通のヒョッテには有しないポーチがあるから尙更である。扉戸は勿論片開きだ。好く彼地のヒョッテやシャレエには扉の上半分だけが又特別に開ける様爲つて居るのがある。採光や空氣の流通の爲めには好

く、又外の景色を眺めるにも窓を通して見るよりは感じが良いと云ふ事を松方君が彼地で實驗して知らせて呉れたが、其れは此のヒュッテには向かない様だ。『山小屋』の方に用ひる方が好からう。

室の内壁は幅三寸位ひの成る可く堅木で張る。床も又同様。そして日本風の白い木地の儘では勿論駄目だ。是非共室内に現はれる木の部分は塗工を施さなくてはならない。此の塗料・塗工に關しては吾々には大先、早川、佐藤(久)の如き實に専門家が居るから安心だ。何んな贅澤なものでも、何んな種類のものでも全部合資會社紀屋が無料で請負つて呉れる。と言つた所で、決してヒュッテの中を何處かの御殿や富豪の邸宅の内部みたいに華美な色合でピカピカ顔も映らん許りに光澤のある費用の掛つた蠟引仕上にして呉れとは言はぬ。簡素など、言つて下品で無く、餘り濃くもない色配に塗りたい。先づダークマホガニー位ひのウッドステインで色付けをして、其れにニスカラークを塗る位ひで充分だらう。一切は佐藤(久)に任せるよ。

家具としては前にも述べた様に、極めて数が少ない。食卓と靠背附椅子。其れしかない。此れは勿論頑固で、簡單なものとし、瑞西民家風の手が掛つた飾彫等の無い方が適當だらう。屹つと此のヒュッテに適當した風のものも豊邊と佐藤(久)の才能が自づから造るに相違あるまい。恰も其の往昔米大陸の基督教の布教者等が當時未開な西部へと遠征して居住し、萬事不便な内にも素人臭い簡素な家具を手づから骨折つて造り、其れが今日ミッシュンスタイルと呼ばれて居る彼の實用的な、簡美なる家具の様式を創つた如くに。少し細かい物品に及べば、先づ洋燈は大賀が自分の家の物置で見つけ出した明治初年船載の重くて、大きい、丸心の台ランプを寄附するから好いとして、時計も成るだけ古物の面白い物を掛ける。然し其れ以上隅棚、煖爐棚等へ骨董品を陳列する事は僕達のヒュッテの楽しい生活の爲めには必要は無い。だが大きな蠟燭の灯る青銅製の燭台は必要だ。尙灰皿位ひも在つて好い。此れに加えて室内裝飾も極めて簡單にする。僕は額としては今の所前にも

書いた様に、現在山岳會のルームの壁に高く懸つて居

から取り附けて宜からう。

る豊邊の描いた彼のウインパーの晩年の尙も精悍な顔をした肖像を一つ、入口正面の書棚の上に懸ければ其

一般の登山小屋やスキーヒュッテに比しては多少設備の調つて居る方である。其れは云ふ迄もなく僕達が

れで充分と思ふ。窓掛は掛ける。此れを掛けると非常に居間に親しみと柔かさとが與へられる。然し派手な

Wohnlichkeit と言ふことに頭を置いて奮發して造つたものである。料理用ストーヴは圖の如く同時に二つの鍋が掛けられる。兩方で飯と菜を煮焚出来る。料理

物は勿論駄目。簡単な一重の窓掛を内側に引開装置にする。其れに用ひる切地はレースカーテンでは餘りに

卓の下は戸棚と爲つて居て、食料品や道具を入れて置く。食器棚には勿論皿、コップが並列して大なる裝飾

の用ひる。窓掛等は普通のヒュッテでは用ひないもの

的効果を發揮して居る。僕達は此のヒュッテへ來て厨で

だが、僕達のヒュッテは全く僕達少數の者の家なのであるから、此れに多少日常の住家的設備を少し加へても

決して面倒な料理等を作りはしない。又僕達の此處へ

好い。殊に此處は人里離れた山上の一小屋であつて見れば、尙更ら暖い家らしくする瓊少の設備は決して仲

運んで來る食料品は純然たる原料品では無くて、皆或る程度迄加工され、加味されて居る物ばかりであるから、唯だ種々の材料を種々調合して火に掛ければ好い

間の誰れも否定はしまい。山上のヒュッテだからとて、簡素な生活をする爲めだと言つても、何にも冷たい、

物ばかりであるから、従つて厨用器具も大した品物は要しない。試みに必要な器具を列記しよう。

殺風景な兵營や教室みたいに一切の裝飾を殊更に廢し

一、西洋皿（磁器、或ひは瀬戸引の物。アルミ製は不

勿論つまらぬが、窓掛位ひは費用も幾らでもないのだ

可)

二、日本式汁用茶碗(磁器製、大型厚手にして深き物)

三、珈琲、紅茶を飲む爲めの何れか一方用の茶碗

四、料理用鉢 大中小一揃(瀬戸引鐵製)

五、フライパン 大中小一揃

六、スープパン 大中小揃(瀬戸引外部青色塗)

七、日本風飯炊釜 一個(三升炊き用)

八、湯沸用藥罐 大小二個(瀬戸引鐵製)

九、ナイフ、フォーク、スプーン一式(十六人分)

一〇、洗桶 大中小一揃(木製)

一一、バケツ 二個

一二、麵麩燒竈 一個(此れは要するに蒸燒竈であるが、ロッキーマウンテンで所謂 packer 連中が使ふ特有

な簡單で巧く麵麩の焼けるものを仲間が實見して來

たから其れを用ひる。)

一三、日本風飯櫃 一個(三升入)

一四、魚燒金網 一個

一五、珈琲用湯沸器(コーヒーポット) 大型一個

一六、紅茶用湯沸器 大型一個

一七、鏝切 二挺

一八、料理用庖丁 二挺

一九、杓子(大中小一揃)

二〇、珈琲注ぎ、紅茶注ぎ 各一個

二一、グラス杯

二二、茶漉し 一個

二三、漏斗 一個

二四、龜ノ子タワシ

二五、料理用布片

二六、手布片

二七、磨粉

二八、石鹼

先づ以上の品があれば充分ヒュッテの料理は何んなものも造つても事足りるであらう。此の他居間寢室他ヒュッテ全體の備付道具を念の爲め舉げて置くならば次ぎの如き物である。

卓子

腰掛

毛布

灰皿

二個

枕

ヒョッテンブーフ

一冊

木靴

書籍(適當の物を若干置く)

スリッパ

トランプ其他の遊戯物

鋸

藥品(備付用) 一揃

手斧(薪割用)

紙屑入

一個

簡單なる大道具(金鎚、釘拔、釘等)

掛時計

一個

煖爐用火把ひみき

額縁

二個

塵箒

尙ほ此の他にもあるかも知れないが、其れは出來上つて見てからでない、果して實際要るものか解らぬ。

箒

此の他僕達の日常の住居の通りにしようとしたら道具は大變に足らない。然しヒョッテの面白さは成る可く數

塵斗

少いもので間に合せる簡單な生活にあるのだから、便利の品とか手数を省く品とかは却つて邪魔になる。

シヤベル

扱て以上でヒョッテの内外の總べては大體盡くしたが、此處に問題として残るは便所の事である。汚ない

晴雨計

が又此れ程大切なものはない。又此れ程ヒョッテで處置に困るものはない。僕達も自身で種々考へたり、書籍

寒暖計

台洋燐

燭台

ランターン(ヒョッテ備付にて夜間の戸外用坑夫の用ひ

る安全燈式の物にても宜しい)

一個

で調べて見たりしたが、又彼地に行つて居る松方君に頼んで、特にヒュッテの便所に就て調べて貰つて同君をして『便所論』の一篇を草せしめた事もある。結局何んな不便があり、臆く、でも便所は普通住宅の如くにヒュッテ内には造れない事は解つた。此れさえ解決付けばもう後は簡単に済む。斯くて便所はヒュッテの後方に造る。床も高く、雪が降つても埋まらぬ程にし、又雪も入らぬ様にする。便所へ迄の雪道は何うしてもヒュッテに居る者の義務として毎日雪の降る毎に踏み固めなくてはならない。

扱て次ぎは僕達の第二の小屋に就ての夢想たる「山小屋」に就て少しく具體的に語りたと思ふ。「スキーヒュッテ」と此の「山小屋」との相異は既に前述せし所で略ぼ解つて居ると思ふ。然し乍ら要約して今一度繰返して言つてみるならば、「スキーヒュッテ」は要するにスキーやスキーでの登山の爲めに適した場所と小屋の設備を持つたもので、「山小屋」は眞實に小屋の生活を共に愉しむ爲めに持つ小屋で、従つて小屋と云ふよ

りも僕達共同の所有になつた居り山莊と云ふ具合である。靜かな、山々の好く望める場所に落着いてごちんまりとした小さな百姓家程の家を持ちたいと云ふのが其の望みなのである。僕達は夫として建築には凝つた趣味はない。極めて普通の家で好いのである。數年來例へば僕達はティロール、バヴァリア、瑞西、北伊太利等の各國の百姓家を寫眞や設計圖等で見、非常にしつかりした、樂しそうな家なので感心して居た。實に美しいと云ひたい家がある。然し乍ら主として石造で出来上つて居るケルト・ローマニク型やイタロ・ローマニク型は到底日本で僕達が實現して見る氣もなかつたが、主として木造なり、又は半木造で半石造のバヴァリヤ、ティロール地方の純百姓家や瑞西特有のシャレエ等には是非之れを造つて見たいと大それた夢を有つて居て、盛んに仲間の或る者は寫眞、参考書を集めて其れに對する知識を蓄へて居た。そして度々其の様な型式に似た「小屋」を造る事に就て話合つた。其の結果は次第に僕達も眞實に考へる事になつて、夢想的な瑞西

シャレエの模倣から次第に日本在來の山間にある民家——之れを山家やまがと謂ひたい——の型に迄外形を變へつゝ進み來たつて、以下に述べるものと成つたのである。

既に此處に僕が誌す迄も無く、スイス・シャレエの風雅な趣致ある事は解つて居よう。況んや例のラスキンが彼のオクスフォード時代の作品として知られ、彼れの後年の偉大なる建築美術觀の片鱗を示して居る『建築の詩』(Poetry of Architecture)の中に説明された『瑞西民家』の詩趣を擧げる迄もない。殊にラスキンの該著は其の副題の示す如く主として建築と國民性との關係を述べたものであつて、シャレエ其の物の個々の建築上の興味を惹き、且つ又愛重す可き特徴ある諸點よりも先づ美に對する精練され又教養ある知識なく唯だ實用の爲めのみにて建てられた瑞西山民の住家、山間の小舎等が其の周圍の山岳、森林、溪流、牧場等の自然と限り無く巧みなる諧調にあるのは、其處に謙讓なる人間生活と自然との協調の美眞が存すると言ふ事を説くに筆力が傾いて居る様だ。其故僕達は其儘を信じて、

好い氣に成つて其の忠實な模倣を日本の山間でやつたら、全るで見られた物ではないものを造り上げて仕舞ふ。Daniel Baud-Bovy の Peasant Art in Switzerland を見ても、種々と立派な、手數の掛かつた裝飾の施された各樣式の瑞西民家の繪畫寫真圖版があつて、實に建築上の興趣は盡きないものらしいが、其の張出縁、斜縁、破風飾り、庇の裏飾り、腕材、隅構、窓縁、窓の格障等に古來よりの雅致ある飾彫、象眼、剝形、塗彩の施されてあるものを決して其儘模して移す事等は出來ぬ。ラスキンを俟つ迄も無く、其の様に白地塗りに緑、赤、堇色の各原色や濃い強色を以て念入りに塗つたり、羅典語の裝飾文字で『平安爾が心裡に在らば、此の家爾の永久さいしよの居所たらん』とか『此の家は我が所有にして、又然も我が所有ならず。然して又我が後を繼ぐ彼れの所有にも非ず。此の家に最後に住む者は誰れぞ。其は我が神此れを知るのみ。』と云ふ様な彼地獨特の宗教的な辭句がファサードや入口の大きな扉に彫り付けてある其の様な瑞西民家が日本へ持つて來て、

其の周囲の自然と調和しない事は自明の事だ。其故僕等は如何に好きだとは言へ、決して其等の獨特な建築上の特點を、特に裝飾の點を採り入れる事はしない。尤も以上の如き建築裝飾の主として附されて居るのは所謂純然たるスイス・シャレエで、主として冬季の住宅であるが、此の他に春季より秋季迄高い山側のアルプに

牧牛の管理、搾乳、乳酪作り等の爲めに假寓するシャレエは此んな念入りのものは無くて、遙かに粗造簡單であつて家畜小屋と共同に一つの屋根の下に造られてある。此の後者のシャレエが即ち單に『小屋』Hütteとか或ひは『夏小屋』summer chalet とか呼ばれて居るものである。日本の（主として中部日本の）山家の酷似して居るのは此の山上の小屋の外観である。唯だに外観のみである。然し乍ら僕達は此のヒュッテを好んで居た。そして少しも彼地のものを模造する事無く、外観は此れを日本の山家の建築に於て得られるのである。其處で此の數年は日本の山家を注意して見て歩いた。そして僕の考へは最も簡單に日本の山家を其の外

部の一部と内部の全部に改築を加へたならば、最も僕達の望ましいものが得られると信ずるに到つた。豊邊も又此の爲めには努力考究をして、偶然僕同様の考へに到つた。

今や彼地のシャレエ風建築の様式は全然此れを棄てて、僕達は日本固有の山家に、現在の僕達の生活様式に合致する様に其の内部を改築し、其の用途、好尚に隨つての特別な設備を爲して、此處に最も容易に僕達の『山小屋』を持つ事が出来る事と成つた。實に此れならば第一設計が要らなくて、土地の大工に任せても骨組は出来る。造作だけは僕達がやるか、本職を少し使ふかだけである。

君達、上高地へ行つて僕達の嘗て悦んで夏の數日を送つて來た彼の小屋と言ふものを思ひ出して見て呉れ。何んと哀れな構造のものだつたぢやあないか。薄い節だらけの四平板かなんかで、屋根も壁も唯だ織ぎ合せだ。柱などの細さ。床の低さ。内部には満足な棚一つさへ無かつた。其れで居て彼の時の生活は素的に

面白かつた。勿論其れには上高地と云ふ好い場所、愉快に氣の合つた仲間と言ふものが在つたからだ。然し又小屋住ひだつたからこそ、彼の様にも愉快さが大きかつたのだと言ふ事も否めないだらう。若し彼れが僕達自身の所有である、氣に入つた構造の小屋であつたなら、彼の時の僕達の愉快さは恐らく幾層倍と爲つたらう。九月になつても歸らうとはしない奴ばかりだつたらう。僕達の『山小屋』は謂はば僕達共有の『山莊』と云ふ具合だ。山莊と云へば富豪の所有らしく聞えて大きい、さう言つても好い位ひ Wohnlichkeit の點では充分に意を用ひてやる。何んなものかを大體は前述したが、少しく具體的に言つて見る事にしよう。

場所に就いては前述した様な個所は勿論望ましいが、然し他の條件もあるので實際には望めぬかも知れぬ。然し乍ら何うしても少しく高い所で、靜かでないはならぬ。管理、必需品の運搬、交通の便とかを考へて、氣持の好い山村の近くでも良い。村の中でないれば、却て他の點では都合が好いから。(場所は最も考

究を要し、此の仕事の鍵であるから慎重にして後に發表する。此處では主として小屋其のものに就いてのみを記するのが主眼だから。)

好く例とするが、上高地(皆んなが好く知つて居ると云ふ點で便利だから)の彼の牧場小屋(牛番小屋とも言つて居るが)を思ひ出して呉れ。彼の好ましい、慎やかな、簡素な外觀を。此の年さり古びた、手入の届かない、多少打ちかゝつて居る小屋のエフクトは美しいものだ。風雨に曝されて黒ずんだ灰色になつた屋根の石と同じ様に燻んだ色となり、木目も凹凸を出して居る様になつた木材。其れに平たく、緩い勻配の屋根と張り出た庇。其れ等は其の周圍の林や小流、穂高の岩壁等と實に好ましい調和を有つて居る。此頃は大部分バラック小屋も出來たそうだが、何時も行く度に思ふに、上高地で邪魔とならぬ建物は此の牧場小屋だけだ。(所が開けば此の小屋も既に最近では焼き拂はれたと云ふ事だ。)僕達の『山小屋』は此れでなくてはならぬ。然し古さと云ふものの齷らすエフクトは唯だ時の手に

俟つのみだが、他の點は僕達にも出来る。始め古い好  
い百姓家が好い山村に有つたなら、其れを買ひ潰して  
改築しようと思掛けて大分方々を氣を付けて歩いた。  
山下と千曲川上流の川上村の秋山村へ行つた時、雨が  
降つて居たが、戸を閉ざした空家の様な好い百姓家が  
澤山在つたので、秋山には空家がある。此れを壊して  
戰場ヶ原邊へでも持つて行つたら素的だと思ひ、兼ね  
て知り合ひの村の駄菓子賣りの婆さんに聞いてみたら  
『とんでもない、秋山には空家なんて一軒もない。雨が  
降るんで戸を閉めてゐるんだ。益々家が増えるばかり  
だ、』と答へられてすつかり落膽したのも滑稽だつた。  
外觀も全部は間に合ふと云ふ譯ではない。日本民家  
の特徴ある點（寧ろ缺點として）として、僕達の『山  
小屋』に適しない點は窓が無くて内部が薄暗い事であ  
る。此れは勿論改めて、僕達は窓は充分四方に付けて、  
然も玻璃窓とする。窓縁等は餘り凝つたものよりは唯  
だ太いものだけで滿

〔原稿はこゝで切れてゐる——編者〕



## 冬の八甲田山

額田 敏

### 一、總括

本州の最北部に位して、その麓は黒潮の漂ふ青森灣に、淺蟲の溫泉を湧出せしめ、最高一、五六五米の標高を有する八甲田大岳を盟主として、井戸岳、赤倉岳と北に聳え、北西に八甲田田茂<sup>クモヤツ</sup>范岳、八甲田前岳と延び、正南に、硫黄岳、石倉岳と高度を低下し、東方に向つて、小岳より高田大岳の圓錐形新火山にまで、再び標高を再起せしめた、一つの火山群山を、普通八甲田山と稱へてゐるのである。

更に、今は縣道の横斷する處、石倉岳の南麓、荒川の水源をなす濕原から、再び緩慢なる標高の増加を來して、猿倉岳（一、三五三・六米）、乗鞍岳、赤倉岳、駒ヶ峯、櫛ヶ峯、ガチャ坊主、横岳、逆川山<sup>サカサガ</sup>等の連山が、

八甲田山本座に對して、又茲に、全體としての一つの火山體を形作つてゐるのである。

國立公園の候補地が提議されて、此の本州最北部の高山も、その南方に碧水を湛へてゐる十和田湖と共に、候補地の一つに數へられてゐると云ふ有様である。

其の山の東側山中には大町桂月の麗文と共に人によく知られた葛溫泉が、奥入瀬川畔の燒山から山路約一里半、葛川の一支源流をなす湯沼の附近山中に、湧き出で、春から夏には浴客に賑ふと云ふ。又、其の上方、葛川の源流に湧く猿倉溫泉は、二、三年前全燒の厄を蒙つたが、昨年夏新築更生して、八甲田山東側最適の冬期宿泊地となつてゐる。又こゝに今夏を期して、一大ホテル建設の計畫豫定あり、其の後に於ける山中の便利さは實に思ひやられるものがある。此の猿倉溫泉に近く、一つの丘地を距て、湧く谷地溫泉は、専ら春夏秋の候自炊客を目的として賑ふけれども、冬期は留守居の人もなく、全く湯の湧出に放任せる無人の状態である。

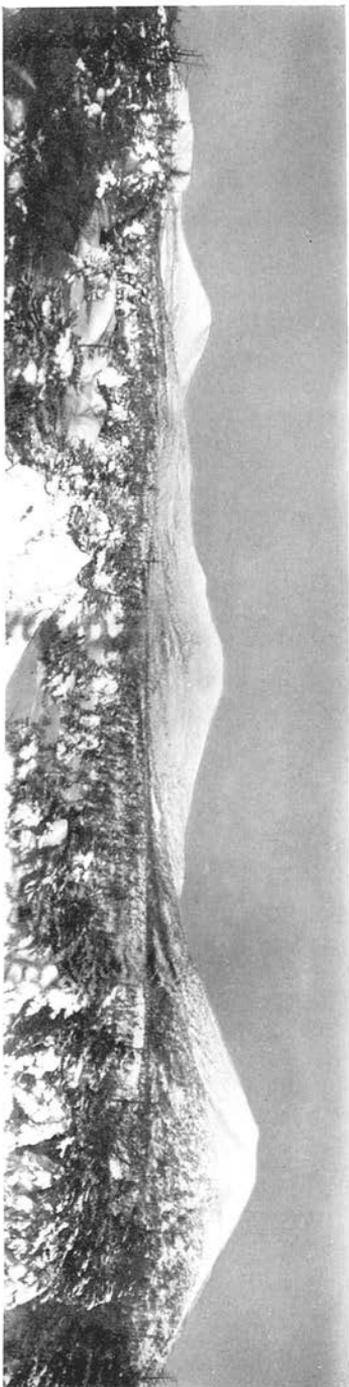
石倉岳

硫黄岳

八甲田大岳

小岳

高田大岳



葛川の上流 標高900米附近よりの展望

額田 敏



山の西側、八甲田大岳の下に湧く酸ヶ湯は、夏季は非常に賑ふ一つの温泉場であり、既にホテル式の大建築もあり、縣道の新設、交通の便と共に、夏季八甲田山中唯一の盛場所である。而し一度雪が山中に降り始める頃には浴客は勿論、旅館の人々も麓に降り、交通は全く杜絶して女中は青森市に、カフェーの女給と變り、料理店の女中と姿を更へ冬を越し、春來れば再び酸ヶ湯に登り浴客の相手をすると言ふ有様であるのである。そして僅かに二三名の留守居のみ雪の中で冬を過してゐて、従つて營業は中止し、時に、スキー登山者の訪づるものもあるも皆自炊の已むない有様である。酸ヶ湯の下方約十數丁の處、荒川の右岸に近く新湯が湧いてゐるが、これも冬季は酸ヶ湯同様、積雪期は無人の郷であり宿泊には適しない。

八甲田山の北方山麓地帯、駒込川の上流に田代元湯、新湯の二湯湧けども、之亦冬季は交通の非常なる不便の爲めに、こゝに根據地を置くことは殆んど出來ないのであらう。

夏季ならば縣道は青森より横内村を経て、雲谷峠モト（峠に非ず頭部圓錐形の山の名なり）西南中腹を廻りて、居繰澤ケリサザ、寒水澤を渡りて、南股山の裾を稍南に廻りて酸ヶ湯に來り、こゝから更に、石倉岳と猿倉岳との鞍部濕原を通過して、水蓮沼を左に見（地圖の右に沼の記號のあるは現在の道の位置と少々違ふ様なり）猿倉温泉に來り、更に谷地温泉の南を過ぎて、葛温泉にまで下り、之より燒山を過ぎて、玆に奥入瀬川に沿ひ右へ十和田湖畔へ或は三本木方面まで、定期乗合のバスが通ずると云ふ交通状態であり、青森から酸ヶ湯温泉へは僅々日歸の湯治が出來ると云ふ便利さであり、又其の日の中に急がずとも十和田湖畔にまで出ることとも出來るのである。

夏季に於いて斯くも交通の便多き山も、冬季は全山全く交通杜絶し、たゞ葛温泉までは薪炭の運出人夫の馬橋が時たま通することがあるけれども、これとて、嚴冬となれば、殆んど通じない。猿倉温泉へも同様、冬ごもりする宿の人がスキーにて時たま燒山から三本木

邊りに出で、生肉、生魚、野菜等を仕入れる位の他は交通は絶へてゐるのである。

斯かる状態であるが故に、冬季ことに嚴冬（一月乃至二月）の八甲田登山は、その根據地としては山の東側で、葛温泉、或は猿倉温泉あるのみと云つて宜しい。尙猿倉温泉の方が山に近いだけ有利である。

冬期登路につき。冬期登山根據地が如上の通り、今日では葛温泉、或は猿倉温泉のみであるが故に、登路も従つて、古間木から三本木、焼山、と云ふ過程をとることが便利であらう。假令青森より直接に酸々湯にまで登る事が近きにせよ、自炊してスキー登山は人夫等を連行すれば兎も角、不便であることは免れない。

一般に冬期の登路は、何れの山に於いても左様である様に、夏季の山に於ける程、制限されない。好天候に於いては見透をつけて、任意の目的の地までも行くことが容易である。八甲田山の如き山の傾斜緩なる處多く又夏季温泉の多い處はことに積雪期に於いてはスキー登路としてのコースの選定は何れの方向へも比較

的容易である。

今猿倉温泉を根據地と假定すれば、天氣良好なる時は、八甲田山の各山頂へは何れも半日乃至極めて樂な一日の行程である。

高田大岳へは、五萬分の測地圖に於いて、大體に於いて葛川の上流を九〇〇米の記號附近に於いて横斷し、標高記入の方向をとりて一、二〇〇米邊りまでは針葉樹と潤葉樹との混生せる喬木の樹林下を適宜登上し、それ以上は、冬期矮木は雪に埋もれて、寫眞に見る如く、一面の雪で、風の爲めに雪は硬化し堅き波狀雪面を形造つてゐる。而しアイゼンを必要とする程のことは殆んどないらしい。此の連山は一體に氣象的關係に由るのであらうか冬季は常に溫度低く、雪面が太陽熱の爲めに融解、凍結を互に相反復することなく、常に氷點下なれば、雪面は只風の爲めの表面硬化位に止まるのであらう。全山の雪が非常に堅くなることは殆んどないらしい。下降の場合は東面にコースを探れば、雪の大斜面を自分の思ふまゝなスキー技術によつて極めて

快適に滑降り得る。標高約一、〇〇〇米邊りを斜め西南に、再び登路に合して、猿倉温泉まで滑降り出来る。

又、高田大岳の西側を小岳に向つて降れば、小岳の東南面は又、無障碍の雪の大斜面で、暫くはこゝで遊び度くなる。而し、大岳へ登行の目的があるならば、時間をこゝに浪費することを避け、その雪面を横目でにらみつゝ西へと、大岳南面下の鞍部にまで出で、そして大岳に向ふを宜とす。登山は天候に支配せられること勿論であるが、ことに、北國の冬季の天候は急激なる變化を生じ易ければ、好天候の機を逸することなき様にしなければならぬ。

降路は、小岳の南面まで出てもいゝが寧ろ硫黄岳の東側にまで快適なる滑降を續けて、更に針葉樹の平地を東南に、縣道に出で、或はこれと並行にそして温泉に歸れば軽い一日の行程を終ることが出来る。

猿倉岳、駒ヶ峯、乗鞍岳、櫛ヶ峯、横岳への登路としては、猿倉温泉の前の澤を渡りて、縣設散歩道を登り、之に従へば遂に臺地を横斷して、葛川の一支流、

ヤビツ澤の上流に出る。この澤の向側(南側)標高一、〇〇〇附近に營林署の造林小屋が最近建設せられて、

こゝから、猿倉岳へ、東面の開いた雪面を適宜登行し、三角點から西に樹氷の幾多塔を形成する間を、駒ヶ峯に、或は造林小屋より左手に直接乗鞍岳に登り、駒ヶ峯に出でることもまた容易である。この駒ヶ峯頂上から尾根を右に見つゝ斜滑降で可成り長く滑り得る。こゝの鞍部から櫛ヶ峯に向ひ、その東面の大斜面を適宜、降りしのシュプールに妨げとならぬ程度に電光形に登れば、此の頂上は八甲田山隨一の眺望絶佳な處、北は八甲田本峯は申すに及ばず、青森灣の磯邊に小さく青森市街を眺め得るし、又岩木山の獨立多皺の圓錐形の山姿、及び十和田湖の黒々と靜まり返る水姿を山の間に眺めることも出来る。八甲田本山からは十和田湖は見えないのである。

櫛ヶ峯から下岳に續く處はスキーには何等の障礙物なく實に易々たるスキー路と云ふことが出来る。又櫛ヶ峯を鞍部に降りて、左手(西北)に平らな廣き尾根

を行けばガチャ坊主（横岳と櫛ヶ峯の中間の起伏ある尾根）から横岳へは、面白きスキーコースとして、猿倉温泉から一日の登降に充分餘裕ある處。横岳の尾根が東北に延びて、其の端が逆川山となる處、こゝは、一つの緩傾斜を持つ廣き斜面で、針葉樹の疎林をなす處であり、横岳まで来た人は是非一滑りすることを誘惑される程に優秀なる雪の大斜面である。逆川山から尙東北に續く尾根は、遂に荒川に下るのであるが、此の最後部分高距二〇〇米餘りは、其の東面斷崖をなし、八甲田山中第一の悪場をなしてゐる。地圖には何等赤禿の標號はないけれども、こゝは積雪期は東面に向つて雪崩の度々起る處であり、夏は赤く岩石の露出した斷崖である。この逆川山から酸ヶ湯に降るには、この山の南にある沼（横沼又は逆沼）の北邊を少し廻りて、この沼を水源とする小さき澤に沿ひて荒川に降り、此の川を渡りて酸ヶ湯に登るのである。

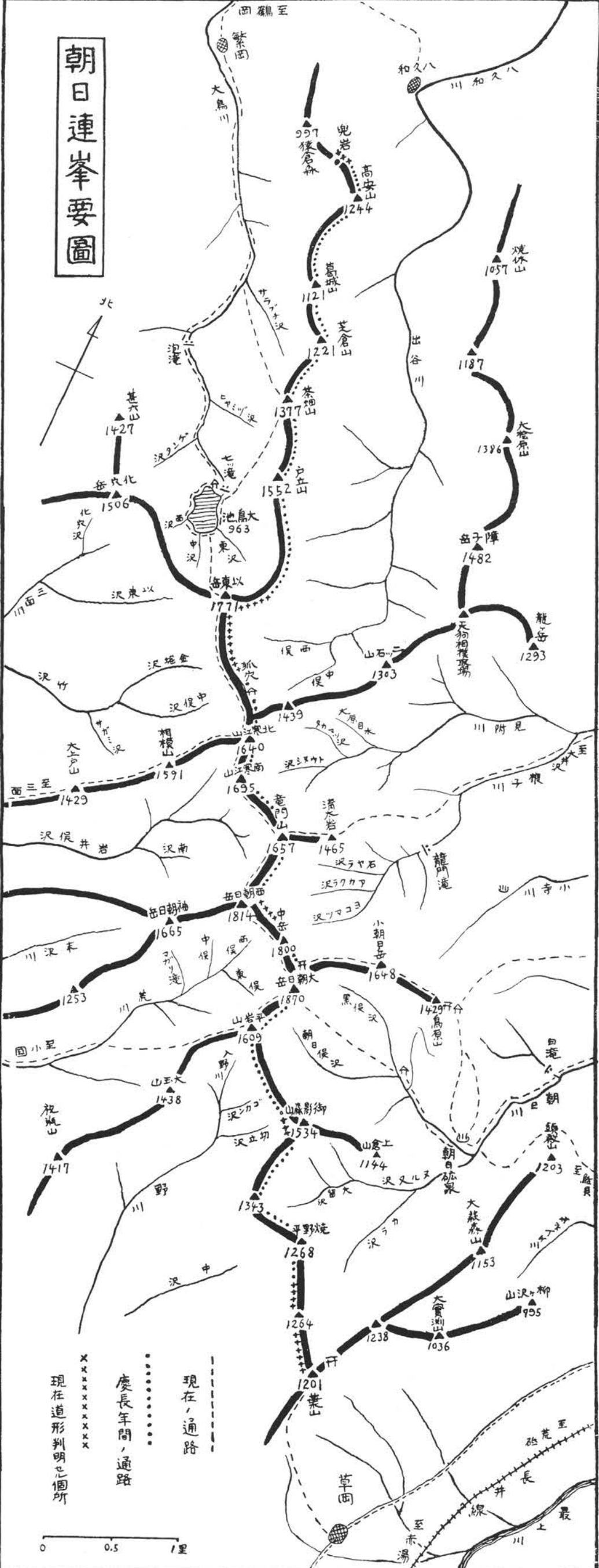
酸ヶ湯は十二月より三月頃迄は全部閉塞して營業してゐないけれども留守居が居る爲めに自炊をなすか、

或は人夫を連行すれば冬期登山の根據として可能である。茲を根據地とする時は、八甲田本山への登山は、猿倉温泉よりも更に容易である。その冬期最も一般的の登路としては、温泉より東北に地圖に於いて等高線標記の簡處邊りを登りて、第二毛無岱と稱する標一、一〇〇米附近（夏季には大きな濕原）に出で、八甲田大岳西方下に見える一ヶ所岩壁の露出する方面に向ひ（一、三〇〇米附近）此れより上は適當に電光形に登路をとりて頂上に登り得るのである。或は縣道を、石倉岳の南側に出る時は迂迴路となるけれども、石倉岳の裾を東側に廻り、硫黄岳に登り、こゝより尾根を大岳へも、とり付くことが出来、又、石倉岳と、硫黄岳との鞍部に出で、大岳に登ることも、亦、面白い。

或は、第二毛無岱が一段と階段狀に下りて第一毛無岱をなす邊りを東北に横斷して、寒水澤の上部を北に渡り（澤は雪に埋まり、只雪の澤を滑り渡れば宜し）

八甲田田茂范岳と赤倉との鞍部（寒水澤、居線澤の分水界にして、八甲田前岳、八甲田田茂范岳が赤倉岳よ

# 朝日連峯要圖





り分嶺する處)から田茂范岳へ一寸登り、赤倉岳の、火口壁の東面の雪底に注意しつゝその西側を、井戸岳に出で、火口壁の東側を廻りて八甲田大岳に登り、降路は第二毛無岱へ向つて、酸ヶ湯へも快適なる滑降が出来るとし又、大岳の東南面の無障碍の長き雪面を硫黄岳まで一滑りに降りて、針葉樹林中を酸ヶ湯に降るも面白い。

酸ヶ湯から八甲田大岳へ、次に小岳との鞍部(こゝは大岳、硫黄岳、小岳の三方への鞍部であり夏季は清水が滾々と湧出し、八甲田清水と稱せらる)から小岳へ登り、その東南面を一氣に高田大岳との鞍部まで滑り、これから高田大岳頂上へと電光形を切りて登る。降りはその東面の大雪面に於いて暫らく滑降の享樂を恣にして、猿倉温泉へ降るも一日の行程としては極めて餘裕のあるコースである。この逆コースも亦面白い一日の行程である。

酸ヶ湯の下に湧く新湯は、酸ヶ湯と湯質を異にして、夏季は實に氣持よき殆んど無味清澄なる湧湯であるが

冬期は無人で殆んど全く泊れない。

八甲田山中には水の湧出する處多く、沼、濕原、(谷地、岱、田代と稱する處)が多い。その名稱の與へられてゐる處を二三記すれば、八甲田大岳の南方に、第一毛無岱(標高九〇〇乃至一、〇〇〇米の間に於いて、寒水澤と酸ヶ湯温泉との間、南股山の東部に於ける濕原)及び、其の一段上部に於ける第二毛無岱(標高一、一〇〇—一、二〇〇米の間に於ける廣き濕原)があり、冬期は雪に掩はれた針葉樹の疎林によりて圍まれ、一つの大きな雪田狀をなしてゐる。

八甲田前岳の東山麓に田代温温泉の前を流るゝ澤の向側にも大濕原、田代があり、南に廻りて、谷地温泉附近、水連沼附近、駒ヶ峯、櫛ヶ峯間の西北部逆川の水源にも大濕原があり、猿倉岳の南方、駒ヶ峯—櫛ヶ峯間の東南側も亦瀧股川及び黄瀬川の水源をなす非常に廣き大濕原があり、冬期は大きな雪田をなして、その間、針葉樹が點綴して、廣渺たる感じを登山者に與へ

る。又、黄瀬川及び瀧股川の間に於いて、三角點九七四・一の北—西部分は之亦太田代と稱する大濕原であり、櫛々峯頂上より眺める時、この雪田が又人目をひく。

猿倉岳の頂上附近南方も一つの濕原性地帯であり、之がその北側まで一體に延びて、濕原性地と針葉樹林とが恰も衣物の縞の如き感を人に與へ、冬期はことにこの状態を明らかに雪上に描いてゐる。

沼地も、葛温泉附近の湯沼（葛沼）重沼、長沼に始まりて、赤沼、黄瀬沼（太田沼とも稱し、乗鞍岳の西南標高一、二〇〇—一、二〇〇米の間に在る沼）水蓮沼、（葛川の一水源をなす濕原中、標高一、一〇〇米縣道の附近にして、八甲田山に向ひ道の右側）横沼又は逆沼（逆川山の南方）等がある。

八甲田山は其の山腹傾斜一般に緩慢（唯、赤倉岳の火口壁の斷崖、逆川北面の荒川への赤禿を除けば僅かに、猿倉岳上より東北へ延びる稜線と、乗鞍岳の東北稜に少しの雪庇を出す位）にして、積雪期のスキー

登山に於ける危険性は少い山であり、到る處に廣く開けた大きな雪の斜面に恵まれて、概ね雪の良質なること、其れに（高田大岳、八甲田大岳、井戸、赤倉の山頂稜線附近のみ風成雪をなして多少雪質硬けれどもアイゼンの必要は先づ認めず）スキー登山の山として、滑降と享樂を得る山であることを斷言することが出来る。

斯かる好雪質にして、危険性のなき山ではあるが、その昔、青森聯隊の大遭難事件ありし爲めにか、十二月、一月、二月の候は、登山者極めて稀であり、山麓地方の人々でさへ、只青森營林署員の外は殆んど入山しない今日の状態である。尤も、三月頃からは酸々湯邊りで學生、並びに其の他の山岳團體の部員がスキー合宿を始め、馬橋も青森から山麓地方まで通するのである。

夏季に於いて交通の便甚だ宜しき山も冬期には全く全山總て冬眠の姿にとざされてゐるのである。



八甲田山附近圖

點線は冬季スキー快速コース

實線は踏路

矢印は積雪期雪崩發生地

二、紀行

吾妻山とか藏王山の雪にスキーを滑らして以來、上越、信越地方の雪質は水分を含み、スキー滑走感に多少の異なる處のあることは該地方のスキー経験者の等しく認むる處であらう。此の様な事とか、或は只慢然と北の國の雪を求むる心が随分久しい間、シーズンの來る毎に擡頭してはゐた。

去年の正月、峨々温泉に行つて以來、八甲田山へのスキー行の希望がこと更に燃えて、遂に此度、この計畫が具體化する様になつた。これは一つに青森營林署員、農學士伊藤健夫氏のお骨折りによるものであることを深く感謝するものである。

昭和九年一月二日夕方青森驛のプラット・ホームに、理學士立上秀二氏と共に降り立つと、青森地方は相當な吹雪の直後であつた。プラット・ホームには粉雪が五寸餘り積り、流石は本州の最北端の街であることの印

象を強く與へられ、停車場前の廣場には子供達が三四人、スキーで滑つてゐるし、こゝから見る青森市街には、家と云はず、道と云はず、雪厚く積り、吹雪の名残りはまだ、多少チラ／＼と降りそゞぎ、街の灯が、街路の雪に映じて、雪國の氣分を強く自分の心に壓しつける様であつた。

夜更けて、滑り行く馬櫓の鈴の音が寒い夜空に冴えて、何時しか晴れた空には鋭き星光がチカ／＼と揺れ輝いて居た。明日から數日間をこの北の國の山に入るのであると思へば尙更、この雪國の情緒が深く心に滲みるのであつた。

其の夜、伊藤氏は三本木の自動車屋まで、電話を以て、明日焼山までの自動車を交渉された。

翌三日朝、青森から東北線を古間木フルマキに下車すれば、昨夜電話による交渉の爲めに自動車屋がチャンと驛に待つてゐた、直ぐ乗り込む。自動車は、八甲田山の東部の裾野の廣い高原の縣道を山へと走る。

三本木迄は冬期も乗合自動車がありて、我々が乗つ

た自動車にもお客が乗合のつもりで他に二人乗り込み満員、こゝから先き焼山まではハイアーとなり、十和田街道を只管に西へと雪の道を走り、遂に、奥入瀬川と葛川との合流點附近、焼山の橋の袂でその自動車を下りる。此處の茶店（こゝに三毛猫の雄が居て非常に希しいと思つた。）から猿倉温泉迄電話ありて、今夕登り行くことを通じて呉れた。愈々スキーを履いて縣道

を行く、道は夏季ならばバスが酸ヶ湯方面にまで通ずる程のものであるから、スキーでの登りも非常に樂である。大町桂月が即興の歌をつくつたと云ふ猿の空橋とか云ふ道に向ふ半倒木も、早や樹齡の爲めか半ば梢枯れかゝり、當年の空橋は半空橋となつてゐる。

葛温泉前で午後三時半、雪のこの温泉は外觀まことに淋しい。右手の小丘上に桂月の墓も見える。少憩後此の温泉を素通りして更に、登る。五時を過ぐると流石に雪道も周圍に闇が迫り、ランターンを點すると急に邊の闇が一層濃くなつた様であり、ゆらくとする燭火にのみ足元附近の雪が照される。狐の足跡が縣道

に一直線に、點々と、我等を案内してゐるかの如く何時迄も續く。風もなき靜かな夜を三人は黙々として行く内に、前方に提灯の光りが見え始めた。猿倉温泉の人が迎へに來て呉れたのであつた。温泉着六時半。

猿倉温泉は先年全焼の厄に遇ひ、昨夏新築更生された。今日では非常に氣持良き八甲田山中唯一の冬期營業温泉とも云ふべき處である。女の人が二人と男三人位居り皆スキーが出来る。湯は多少白濁してはゐるが豊富に滾々と湧き扇形の浴槽に溢れてゐる。

一月四日、高田大岳に向ふ。非常によく晴れた日である。温泉の後を縣道に出てこれを横切り葛川の上流をなす雪に埋もれた澤を九〇〇米附近で渡り、裾野の針葉樹林中を縫ひつゝ北に山頂に向つて登る。その内に西の方から八甲田山の上空を急速に雲が襲ひ來て、忽の内に吹雪と變つた。標高一、〇〇〇米附近以上は只管に吹雪の中を電光形に登る。段々と吹雪の強さが加はり、頂上附近では嘘が凍り付き、茲三四年以來珍らしい目に遭つた。

降路は山を東に廻り、雪の大斜面を風をよけて降り、一、〇〇〇米附近から再び西南に針路をとりて登路に合し、温泉に歸着す。極く短時間ではあつたけれども、滑降の快味を味ふことが出来た。其の日は午後的大部分、温泉に浴したり或は、漫談に時間を過し、山中の第一日を過した。

五日は少し風邪氣味で頭が痛み、外出を見合す考へであつたが起きてゐる内、伊藤氏からアスピリンを貰ひ服して暫らくすると、氣持よくなる。十時頃より、充分防寒の用意して外出す。風が強く吹き、山はガスの爲めに眺望なし。時々雲間を漏れる日光にパツ／＼と周圍の雪が明るくなる。登路を西北に、水蓮沼の邊りを八甲田大岳と、硫黄岳との鞍部に出て、硫黄岳に登り、その東北側をボーゲンを書き楽しみつゝ滑降し、登路に合して温泉に歸着す。此の日も四時間餘りの外出であり、而も相當快適なる滑降が出来た。風邪氣も宜くなつた。

六日、空は依然として、雲に掩はれてゐる。此の日

は温泉の前の澤を渡り、縣設置の散歩道に沿ひて、臺地的の林間をヤビツ澤側に出て、乗鞍岳頂上より東北に同山側、ヤビツ澤岸にある營林署の造林小屋を訪ね、猿倉岳へ東面から登る。天候益々憂鬱にして、雪さへ降り始む。その猿倉岳の頂上附近は、大きく出来てゐる風成雪の階段狀の雪間を一つ一つ登り降りしつゝ西方の濕原性開地に出ると其の頃から天候は、時々雲の吹き切れの間から日光を見る様になつた。日に照らされる邊りの全樹氷は、パツと明るく輝き、暗き心も急に朗かとなる。駒ヶ峯の頂上で晝食を喫す。こゝでは風も風ぎ雲も去り、氣味の悪い温さがあり、顔がポーツと熱くなり春の雪の上である様にさへ覺えた。この頂上から尾根を左手に斜に長い一滑りをすれば、櫛ヶ峯との廣い鞍部に出るのであるが、自分のスキーは締り着のアザラシ皮であり、伊藤、立上兩氏のものとはゾームの張付であつてゾーム・シールの滑降の快適さには斷然負けざるを得なかつた。先づ八甲田山はゾーム・シールの領域であると云ふことが出来るであらう。而



井戸岳の火口壁 昭和八年三月 伊藤健夫



駒ヶ峯より見たる八甲田大岳、小岳

昭和九年一月 伊藤健夫



駒ヶ峯との鞍部より栴ヶ峯

1934.1.6. 額田 敏



駒ヶ峯の頂上 1934.1.6. 額田 敏

し同じ巾のシールならば登りには縮付式のものがあることが効果があることは確實である。

櫛ヶ峯の東北側は何等障碍物なき均質の一つの大雪山斜面で、雲質が絶好である。降路のシュプールを害せない様に電光形を切りつゝ登頂すれば、眺望は急に開けて、天候の好轉と共に、暫らく茲に、四圍の眺めに酔つた。八甲田山中第一位を占むべき展望臺である。恰も八甲田山本座は尙雲に掩はれて、時々盟主大岳の白き山頂を雪上に現はし、非常に高き山であるかの感じを與へる。

いざ滑降となると、例の大斜面にボーゲンが始まる。只一つのリズムによりて雪面上を殆んど自然に動いて居る外何等の感觸も受けない。全く滑降感に酔つてゐるのである。鞍部に降り振り返ると、正に逆光を浴びて光る雪面上に丸味を持つサイン状曲線を、三人が思ひ／＼に畫き、之が交錯し、平行し、8字形になり、長く／＼我等が立てる足元まで續いてゐる。自分は、スキーを始めて以來の快適なボーゲンであつた。

歸路はコースを稜線の西北にとり、樹氷の間をまるで矮人の如く、猿倉岳の中腹、八甲田山本座の正南まで来ると、今迄山を包んでゐた雲は全部その帳は引き拂はれ、八甲田全山は紺青の空の下に裸にむき出されたではないか。又今自分達の立てる處は、標高約一、二〇〇米の猿倉の北面であり、中間は八甲田を横斷する縣道から、石倉岳、硫黄岳が丸で地の瘤の如く、その上に、八甲田大岳が君臨し、その右に小岳から、高田大岳が列座し、重装たる大八甲田の山容を、眺むる者に壓しつける。自分は今迄に寫眞のフィルムは全く使ひ盡し、一枚も餘してゐない。その時に斯くも大觀を眼前に出現されたのである。思はず地壇駄を雪上に踏んだが既に何とも仕方がなかつた。只、大觀を見入るばかりであつた。黄昏迫る頃、猿倉の北面の縞状樹林帯を斜に猿倉温泉へと一氣に滑り降つた。

天候は益々好晴に轉じて、夜に入りて、満天に鋭き星光輝き、明日の天候をも豫言するもの如くであつた。

七日、天氣は極上の快晴、此の日は八甲田を越えて、青森まで、降るべき豫定の日である。昨日迄の四日間とは多少行程が長い。それに持物は自分の物は皆負はなければならぬ。午前七時猿倉温泉を出發する。猿倉岳の丁度上空に尙ほ残月が白く残つてゐる。高田大岳は正に曉陽に雪が赤々と照らされて、邊りは静まり返つてゐる。前途が長いと思ふと自ら足も早く運び、硫黄岳までは、前々日のシュプールに従ふ。楠ヶ峯の山腹に、昨日書いたシュプールを望遠鏡によりて再び觀察し、今更にその時の快適さを思ひ起したりなどした。そして、三人各々自分の書いたボーゲンの波の数などを勘定し、十九續けたとか、十四續けたとか、十三續けたとか、各々の昨日の得意さを今朝もやつてゐる。

八甲田清水（八甲田大岳の南の小岳、硫黄の三山の鞍部）で九時、此の邊りは兎が非常に澤山居る様で、その足跡が縦横に交錯し、まるで兎の運動場の様である。大きな自然の檻の内でもあるか。

此の八甲田清水から、大岳の南西から、遂に、西側

標高一、四〇〇米邊の等高線に沿ひ、樹氷の門をくゞり塔の間をぬけ、雪の大きな階段を昇降しつゝ、井戸、赤倉岳の山腹に沿ひて、八甲田田茂范岳との鞍部に降る。午前十一時、こゝで愈々アザラシ皮を取り外して、居繰澤の源頭邊りを八甲田前岳の西南山腹を、標高一、一〇〇米邊で西側に廻る。此の邊、相當高き青森トドマツの稍密生した處、その下の雪も、非常に大きな波をうたせて、スキー滑降には厄介な處である。先頭の伊藤氏は、氏が札幌時代に鍊えた巧妙勇敢なる技術を以て、林間に見透をつけどん／＼階段雪を飛び越えて行く、その後には續く自分達は、雪から空中に離れる業はどうも苦手である處に、斯かる小うるさきゲレンデシュプレングの連續見た様な處はなみ大抵ではない。それに荷が多少重過ぎるのである。而し、お蔭で、斯かる悪場（スキー滑降の）も餘り長く續かずして、大體に於いて一、〇〇〇米以下は、針葉樹と、潤葉樹との混成林でこの林間滑走はまた、素晴らしい雪質と、傾斜と、木を縫つて書くボーゲンの味は、又後から考へても醉

陶の感がある。

地圖に於いて、村界の少し北を、大體之に並行に滑降しつゝ縣道に出る。この縣道を少し降れば、茅野の茶屋の建物が雪に半ば埋もれて、戸を閉して淋しく道の右側に立つてゐる。(・五八六米の・ある下の道の曲る處)こゝで休憩と中食をなし、屋内に湧く水などを飲みて、縣道を、處によりては、適當に滑れたけれども

大部分は平地滑行程度の調子で、山の中腹を蜿蜒と、雲谷峠(峠に非ず、山名なり)を殆んど半周し、石雲谷(三〇八米)の東を通り、雲谷の村落を過ぎ(此の邊りの縣道は馬橋の軌道で滑降非常に氣持悪し)てからは人との交渉區域に入つた氣持となつた。横内の村端で道邊の丸太に腰を下して残りのパンを一片づゝ三人

で食つた時は、村人達は馬橋に乗りつゝ、青森邊から皆買物を積み込み、鼻歌を歌ひ乍ら歸りつゝあつた。我々はこれから、青森の平原を、街の灯日がけて眞直に滑つて歸るのである。この雪の平原の中に立ちて、道の松並木の上に、夕陽を浴びて立つ八甲田の山々を振

り返ると、今朝の紅く輝いてゐた山々程でもないが淡赤く八甲田山の雪が映して、その姿が何處となく淋しい。今我等の行く處も、殆んど雪の幾何學的一平面であり、暮れかゝる下界の端には街の灯が段々とその數と明るさを増してゐる。青森市長嶋にある伊藤氏の宿の玄關を入つた時は四時半であつた。

室に入り、ゴーゴーと音をたてゝ燃えてゐるストーブの前に、足を延ばした時は、あゝこれで青森までやつて來ただけの効果はあつたとつくゞと思つたのであつた。出された林檎の美味かつた事、立て續けに三個をベロツと平げてしまつた人さへあつた。

八日、大鰐のスキー場見物であつた。五色とか、關、赤關邊りとはスキーヤーの種が異つてゐる様である。競技の練習者が多い様に思はれる。尤も二月の全國スキー大會場となつてゐる關係上、でもあるかも知れない。女學生達も、それ／＼リーダーの指導の下に整然と猛練習をやつてるし、又中學二年生位の小さいのが本格的のジャンプをいとも勇ましくやつてゐるのを

見ると、我々今迄年をとるまで、慢然とスキーをやつてゐるのが恥かしくなつた。

附記

今迄自分の使用してゐたスキーは六尺七寸位のものであつたが今シーズン始めて、五尺八寸のスキーを用ひた。(而しその中は今迄使用したものと等しい)。それで年内、發哨、熊ノ湯などに廻り、そのスキーを持ちこの八甲田へも行つて、山の中に於ける短スキーの穿き心地、登りに於ける山側キック・ターンの非常に軽く容易なること、滑降に際して、廻轉の實に樂なることを痛感した。新雪中にこのスキー埋没は餘り不便を感じない程度であつた。而し平地の滑走、例へば此度の八甲田行で降路雲谷村落邊りより青森までの間に於いて、普通のスキー程にスピードの出ないのは短スキーの欠點とも云へば云へる。之を補ふべくストックの使用に力を要し、腕の疲れが甚だしかつた。

最後に於いて失禮とは存すれども、伊藤健夫が此度の行に常に案内役として、役所の出勤日なるにも關らず數日間欠勤迄されて、方々に同行されたのであり、又氏は年末から八甲田山に入られて、我々の出發の前日に我々と同一コースを探られて下山された直後にも係らず、お出かけ下さつた事は、感謝の辭さへ無い程、難有く思つてゐるのである。(昭和九年一月十九日)

## 勝道上人と日光の開山

武田久吉

下野の日光、いや今では世界の日光の開山は、今から一千一百有餘年前に、傑僧勝道上人によつてなされたことは、諸書に散見する處でもあり、又一向に疑を挟む可き餘地もない話であるが、その當時の詳細な記事や、上人の生立に至つては、あまり坊間に流布してゐないやうである。

彼は十五六年前の事であるが、勝道上人の事蹟等について、出来るだけ正確な傳記を編纂し度いと考へたが、群書を涉獵するといふ餘暇もなし、唯手元にある三四の書物に探つただけで、ともかくもその當時の目的は達したことにして、差當りの責は塞いで済ませてしまつた。

然るに近頃梓書房から創刊された雑誌『山』の第一號を見ると、「入峯禪頂・船禪頂」といふ題を掲げて、

茂木慎雄氏が、勝道上人の事蹟を詳述して居られるので、世間には自分と同じ様なことに興味を持たれる方があるものかと、一入懐しく感じ乍ら、この記文を面白く拜讀した。

處で、それに茂木氏が引用されてゐる文献は、表面上は『日光山志』と『補陀落山草創建立修行記』の二種に止まるが、尙その他に何か據所とされるものがあるのかとも想像出来ないこともない。といふのは、勝道上人の男體初登山の足跡を、最近發見されたといふことが明記されて居り、そしてそれが女貌山から小眞子大眞子を経て男體に登る入峯禪頂の路程と一致すると、略々斷定的に書かれて居ながら、何書に據るかを明記されないからである。

科學的に實證される事柄を取扱ふのと違つて、古文書などによつて千年も前の出來事の真相を攫むことには、極めて不得手な筆者が、同氏の多年に亙る研究の結果に疑を挟むのは甚以て烏滯がましいことではあるが、この疑問の解決はどうしても茂木氏を煩すか、又

は他に同様な研究に没頭されてゐる方々の力を俟つより外ないので、廻らぬ筆を驅つて、一後學者としての質疑を、率直に書かせて戴くこととする。先輩に對する禮を缺くことを咎め給はずして、幸に垂教あらんことを冀ふ次第である。

最初に、筆者の參考とした書物の中で、重要なものを左に掲げて、典據を明かにして置く必要があると考へる。それは

『日光山沿革略記』 第十一版 (明治四十五年七月)

『補陀洛山草創建立記』 (『下野國誌』所載)

『藥師寺戒壇緣起』 (同右) 及び『日光山志』

前者は輪王寺々務所の發行に係り、先年入寂された輪王寺門跡彦坂堪照猊下の編纂に成るもので、明治二十八年五月に初版を發行したのだが、版を重ねても別段補訂は行はれたものではないらしい。

『草創建立記』は元來勝道上人の示寂後一年の弘仁九年戊戌二月に、高弟の仁朝、道珍、教旻、尊鎮の四師が記述したものであるが、世に行はれるものに數本あ

るらしく、『下野國誌』の著者は最も正しいと考へたものを採録したのらしい。同書に

「此補陀洛山建立記は、元祿年間に書著したる、下野風土記と云ふもの、中にありしを、日光山の慈觀僧正の所藏の本を以て校合し、こゝにのせしなり、但し右の下野風土記といふ書は、出雲風土記、豊後風土記、または常陸風土記などの類にはあらで、いさゝか名所古跡等をしるしたれど、上下二冊にて、引書は東鑑、元享釋書、歌枕名寄のみにて、たゞはかなき俗説を擧て、大かたはえうなき事のみおほし、記者もまた誰ともしるさず、されど下野の事を記したるもの、はしめなるべし、さて勝道上人の傳は、元享釋書にも載たれど、高野大師の補陀洛山の碑文によりて記したれば、上人剃髮の年曆、また入寂の歳時など書もらしたり、彼ノ師練もこの記を見ざりしにやいとくちをし云々

右の慈觀僧正とは慶應二丙午年八月に七十餘の高齡で入寂された高德として有名な人であつた(『山岳』第十三三年三〇頁参照)。その藏書と校合して、相當慎重な態度をとつたものであるからには、最も信を措けると見て宜しからう。尙日光山輪王寺の文庫について古文

書でも調べたなら、更に詳細なそして正確な材料を得られるかとも考へるが、目下その時間もなし、甚だ無精な話で恐縮ではあるが、右二書を主な典據とすることを許され度い。

勝道上人の生立については、茂木氏が相當詳しく述べて居られるが、出生の年を天平六年と定められたのは何に據られたのであらうか。後に「延暦三年三月下旬、年五十歳」と記されることから推せば、天平七年でなければならぬ。そして『補陀洛山草創建立記』には天平七年四月二十一日日中と明記してある。或は『山』に潜入した誤植の一端でもあらうか。

天平勝寶六年、二十歳の青年に達した藤系丸は、夜偷に住家から逃れ出して、出流の岩窟に來り、靜かに千手觀音を念じ、七歳の時に天上ノ聖衆明星天子だと稱する神童から教へられた三歸さんきしぐ四弘しぐの法（とは「南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧。衆生無邊誓願度、煩惱無數誓願斷、法門無盡誓願知、無上菩提誓願證。」と誦んじて三春秋を送つたといふ。そして天平寶字元

年十一月四日の夜の夢に、北方に大劍峯を見たので、覺めてから岩窟を出て北方に向ひ、深雪を侵して進み、遂に夢に見たと同様な深洞を發見し、その山頂に攀ちて苦行した。此處を茂木氏は出流の後山の奥の院なりと言はれるが、『補陀洛山草創建立記』の註には、「出流山より北の方十里許日光山より南の方八里餘古峯。原の北に當て三里許にあり」と記し、『日光山沿革略記』には「後之（即ち大劍峯の麓の小庵）を巴の宿と名く」としてある。恥し乍ら出流附近の地理に通じない筆者は、この異同に就て何等辯ずることが出来ないから、謹で茂木氏の垂教を乞ひ度いと思ふ。

巴の宿に三ヶ年の日子を送つた藤原宇興うきよ寺は同四年出流の室に歸つたが、その年八月に丁度唐の高僧鑑真大和尚が下野大山おほやまノ郷に下向し、天武天皇の白鳳八年勅願に依つて祚連が聞く處の藥師寺に到着し、此處に戒壇を設けてその年の十一月に完成し、當國の士農數百人も、戒を受け、その翌年正月には勅使が有つて勅願戒壇院の額を賜はるといふ盛大な有様に、藤系もそ

の名聲を慕ひ、正月二十一日に薬師寺に来て見ると、遠近の者何れも壇に登つて戒を受けるを見て、感涙を抑へて受戒を請うたのであつた。大和尚を始め弟子の如意僧都、惠雲律師等は、善哉々々今親興寺大徳に見ゆと曰て喜んで呉れたので、翌二月二十七歳で薙髮し、律徳に隨つて沙彌の十戒七十二の威儀を受け嚴朝と名けられたが、後自ら改めて勝道と稱したとあるから、上人の名は此の時に定まつた譯である。その翌六年四月十五日には具足戒を受け、大悲虚空求聞持の法を修し、華嚴・法華・金光明經・唯識論・天臺正觀等數部の經論に通曉したといふから、此處で佛敎の奥儀を修めたことになる。

これは勝道上人が大知識となつた好機會であるのみでなく、日光開山の基礎を築いたとも見る可きものと考へるが故に、敢て茂木氏の記文に蛇足を添へることゝした次第である。それと共に、この事實は、茂木氏が勝道上人を「眞言僧」と斷ぜられたことに對する儼然たる反證と見なければならぬ。尤も薬師寺にも、

鑑眞の没後空海阿闍梨が来て、金剛瑜伽密敎を置いて護國除災萬民豐饒を祈らしめ、又唐朝將來の金胎兩部の曼荼羅を始め佛具や秘密寶器等の品々を當寺に納めたといふ記録はあるが〔『薬師寺戒壇縁起』〕それは弘仁十一年五月の事に屬し、勝道上人の遷化後の話である。又日光山でも始めは華嚴と法相の兩宗が行はれ、弘仁十一年に空海の東遊後に密敎が行はれたのであるから、何れの點から見ても、勝道上人を「眞言僧」とすることは正鵠を得てゐないと考へるが、茂木氏の御意見を承はるを得れば幸である。

偕て勝道上人は天平寶字五年から天平神護元年迄、薬師寺に留まること五年、三十一歳になつたこの年の九月二十五日に、西北に瑞雲を望んで卒に寺を出發したので、律師等は別れを惜んで宇都宮迄送り、此處に三衣の袂を濕して南北に別れ、上人は一と先づ巴の宿に歸つたのであつた。茂木氏の記事によると、これは出流の千手院から大劍峯に歸つたのであり、歸つたといふのは、其の頃の勝道は寺よりも劍ヶ峯の方を本據

としてゐたのである」と断定されてゐるが、何に據つて此の説を立てられたのか、少くとも『補陀洛山草創建立記』や『薬師寺戒壇縁起』のいふ處とは全く異つてゐる。この點亦明確な御垂教を御願ひし度いと思ふ處である。

これから彌々日光開山の本舞臺が展開するのである。即ち翌天平神護二年三月中旬、北方に立昇つた瑞雲を目指し、經典と佛像を負ひ、裳を裂いて足に纏ひ、誕生の時天から降つたといふ五尺の錫杖を手にし、千辛萬苦の末、やつと大谷川の南岸に到達したのである。然るに、『草創建立記』には、「嶺岩峩々、流水浩々として涉らんと欲するに容易ならず」と記してある。然るに「彼は樵夫か何かによつて北岸に渡り……と、茂木氏は至極アッサリと片付けて居られるが、此處で日光の入口である彼の朱塗りの神橋みはしにまつはる傳説が産まれるのであるから、一とわたり舊記によつて記述しなければなるまいと思ふ。

大河に進行を阻まれた勝道上人は、岩上に踞して彼

の三歸並びに虚空藏の求聞持の咒を誦した處が、河の北涯から一化神が忽然として出現した。その姿は夜叉の如く、長け一丈餘、身に青黒の衣を着し、頸に鬪體を掛け、左手に腰を按じ、右手に赤と青との二蛇を握り、勦聲を出して上人に告げて曰ふには、吾は是れ深沙大王也、昔玄奘三藏が天竺から漢土に渡る時流沙を越し奉つたが、今又上人此處に來る故に渡河の助力をしよう、彼の二蛇を放つと、一は頭を南に、一は頭を北にして、虹霓の如く河上に横たはつて橋となつた。上人は暫時躊躇してゐる間に、橋上に山菅が生じたので、それを渡つて北涯に達した處が、化神も蛇橋も没してまた見えすなつた。此故に後來此處に架した橋を山菅橋又は蛇橋と名けるに至つた。橋はもと至つて脆弱なものであつたのを、大同三年下野の國司なる橋利遠が勅命によつて造營し、山麓に住んだ山崎大夫の下知によつて板橋を架け、それから十六年に一度掛替の命があつて、常に山崎大夫の子孫が事に當る定めとなつた。大同三年から八百有餘年の後、東照宮が日光に鎮座し

て以來、寛永六年に修造を加へ、更に同十三年に新規に造立することとなり、その時長さ十四間幅三間、左右前後の欄干と共に總朱塗、裏板行桁は黒塗とし、擬寶珠は鍍金の結構美麗なものとなつたので、諸人の通行を禁じ、その時の假橋即ち今呼ぶ日光橋が庶民牛馬の用として残されるに至つた。江戸幕府時代にはこの神橋は將軍家御社參の時以外には、毎年二月二十三日に冬峯修行の行人が水取りに濟り、又三月三日に修行が終つて出峯する時に濟る習慣であつた。

偕この深沙大王出現の傳説は、玄奘三藏の故事になぞらへて附會したものであるから、茂木氏の言はれる様な處が眞實なのであらうが、上人が始めて日光に足を入れた時の重要なエヴェントの記念として、この位な傳説を生ずるも敢て差問はあるまいと思はれる。現今でもこの深沙大王の祠は河の北岸にあつて、勝道上人が手刻したといふ本地毘沙門天を安置してある。

〔日光山志〕

北岸に涉つた上人は、宿志を遂げたのを喜び、此處

に草庵を結んで勤行してゐた處が、ある夜異人が現れて此處の由來を語り、此の北の嶺を四神ノ峯と號し、青龍朱雀白虎玄武の住する所である、公識らまく欲せば朝日に向ひ岳上に登つて之を視よと言つた。上人乃ち教に依つて嶺上に登つて見るに、曩に見る所に違はない四色の雲が四方から湧出するに驚喜して、此處に堂を建てて千手觀音の像を安んじ、寺を四本龍寺と號けたのである。

翌神護景雲元年四月十日に、上人は絶頂を見ようと思ひ立ち、精進念誦すること二七日。彌々出發して高嶺に攀ち躋り、四十里許りも行くと、嶽の半腹に一大湖のあるに出會つたので、湖の北岸に宿つて先づ經行念誦し、やがてその頂上に登らうとした處が、路は險しく深雪は皚々と横はり、雷吼振動して更に上ることが出来ないで、遂に半腹から還り降つて湖畔の假宿に住むこと三七日を経、終に五月十三日に四本龍寺に戻つてしまつた。

それ以來練行勤念を怠らず、念誦讀經して心身を鍛

練すること十四箇年、天應元年四月に至つて再舉を謀つたが、「霖露霰霰として陟ることを得ず、空しく引返すの外はなかつた。そこで翌二年の三月、道珍・勝尊・教旻・仁朝等の徒弟を率ゐて、先づ湖畔の宿に到り、精勤修行すること一七日、遂に山頂に達して素志を貫徹したのである。一行は湖畔の宿に降つてから禮懺勤修すること三箇日、事畢つて四本龍寺に戻つたのである。時は西曆七八二年で、上人は四十八歳であつた。

これで男體山の初登山は果されたのであるが、これの記文から推測したのでは、何れの道を通つたのか一向に不明である。然し乍ら、茂木氏が考定せられるやうに、先づ女貌山に登り、帝釋山から富士見峠に下り、小眞子を越え、大眞子を上下し、志津から裏山がけに男體に登つたと見る可き證左は毫末も發見することとは出来ない。否却つて中禪寺湖畔から上下したことは立派に明記してある。茂木氏は、今から千百五十年も前には、「大谷川筋は草木繁茂して交通路とはなつて居なかつたであらうこと」、又「往昔の交通路が多く展

望のきく山頂又はその近くに存してゐる事實から」推論されて、「上人の登攀路も亦入峯禪頂コースと一致してゐると考へられる」と言はれるが、果して萬人をして首肯せしめるに足るの説とは受取り難い。此の推論から言へば、上人の一行は既存の樵路にでも由つたやうにも取れるが、中禪寺湖畔迄はとも角、それ以上は人跡のなかつたことは想像するに難くないやうに考へられる。又一方に於て、男體山を目標としてゐる者が、先づ方角違ひの女貌山に登り、大小眞子を上下した後始めて男體に達する路を選ぶことは、登山常識を以つてしては考へられないことではあるまいか。例へば德澤の牧場なり一ノ俣なりにゐる者が、奥穂高を目標としたとして、横尾根の谷なり、前穂高の尾根なり、乃至は岳川から進むといふなら、難易は別としても可能性が見えるが、それを捨て、先づ槍ヶ岳に登り、大食、中岳、南岳から大切所おほきせとを通過し、北穂高、涸澤岳を経て奥穂高に向ふことは、萬あり得ないこと、しか考へられない。この點は特に茂木氏の十分な御説明を

翼うて止まない次第である。

茂木氏の記録によると、延暦三年にも勝道上人は男體山頂に立つたとあるが、吾々の手にし得る文献には斯かることは少しも見えない。しかし、三月二十一日に發して中禪寺に詣で、道珍等と謀つて船を造り、湖に棹して遊覽し、翌月は西湖に遊び、五月には神宮精社を建て、之を中禪寺と名け、又立木（桂といふ）に一丈六尺の千手觀音を刻みなどし、中禪寺附近の開發に費すこと前後四箇年を費したといふことは信じてよいと思はれる。

勝道上人の業績は遂に京都に聞えたので、延暦八年四月四日には兩毛の總講師に任ぜられた。〔沿革略記〕。後大同二年の夏、東國に大旱魃があつたので雨乞を申し附かり、（男體？）山頂に登つて祈り又華嚴瀑に到つて念誦したところが、感應顯著で草木爲めに蘇つたといふ。大同三年に山菅橋を板橋に架け替へられたのは、その結果であつたかと考へられる。

この頃から毎歲四月二十一日に弟子と共に中禪寺に

詣で、法施を捧げるのを恒例とするに至り、勤行を致して朝家を祈ることゝした。處で弘仁七年の四月、上人七十二の高齡で復も中禪寺に上つて、一七日夜念誦讀經した時、三社權現の化神が現れ、上人と對面して、明春上人の入寂を豫言されたと『草創建立記』には見えるが、『沿革略記』によると、上人此の時再度男體山頂に登り、山上に二小祠、山腹に一小祠を營み、三社大權現を祀るとある。此の事あつて後四本龍寺に戻り、八月寺の北八九町の地を選んで入定の處と定め、翌八年二月二十五日の夜半十餘人の弟子達を集めて後事を托し、三月一日行年八十三歳で禪定に入るが如く入寂されたといふ。茂木氏によると八十四歳となるが、これ亦誤植の然らしめる處なのであらうか。

最後に茂木氏の忠言に従ふと、日光を訪れる人々は、一度は開山堂に勝道上人の像を拜し、又入峯禪頂のルートに登つて、上人の行事を考へて見る可きでもあるが、實際を言ふと入峯禪頂のルートは氏が示された尾けに止まらないで、白根から宿堂坊山あたりに續く尾



勝道上人木像

武田久吉



月夜野から望んだ耳二つ

武田久吉

根筋のもあれば、大谷川右岸の峯々を歩くのもあつて、中々容易ではないやうである。これは勿論上人の没後、開山の辛苦を記念する意味をも込めて、年を逐うて發達した峯修行の行事であつて、維新前迄は嚴重に勵行されたやうである。

又開山堂に安置された上人の像は、平素閉鎖されてある以上、何人でも容易に參詣出来る筈のものではないので、正直に忠言に従つて、無駄足をする人が無いとも限らないと考へ、餘計な御世話のやうではあるが、筆者所持の寫眞を覆刻して、本誌に挿入することゝした。乞諒焉。

## 耳二ツの寫眞に就て

武田久吉

大正十一年の春五月、折から五月蟻が往還に竝列して奇觀を呈する三國街道の月夜野から、上越國境の尤物を望んで、幾枚かの寫眞を寫したことがある。フィルムもフィルムも不適當なものであり、又焦點距離一三六ミ、メ、のレンズを手札判の器械に装置したのだから、どうせ立派なものゝ出来よう筈はないが、その時の耳二ツの形貌が眼底に残つて、その後折を見て再舉を計らうと、假令、十年後の今日でさへ、未だに忘れずには居るものゝ、好機はそう容易く廻つて來な

す。  
昭和九年の二月、月初めからこの地方は天候不良であつたらしい。加之二日には湯檜會、大穴等水上驛の附近一帯には降雨さへあつた。三、四、五、六の四日間は、午後少時の陽光が差した日もあつたが、連日降

雪、時には風さへ強くて、吹雪の状態が下界でさへも認められた。然し六日の午後、月夜野では快晴、温暖で雪も大分融けたとはいへ、大約一、五〇〇米以上は、相も變らず雪雲が厚くへばりついてゐた。七日になつてヤット快晴。一天雲なしといふ拭つたやうな好天氣である。

月夜野橋を渡つて數町西の、田圃に積つた雪を、漕いで、利根川右岸の段丘の端、崖の縁の程よき所に三脚を据え、一三五ミ、メ、のレンズで國境の諸山を一枚の乾板に收めてから、望遠レンズに替へ、二三の撮影を試みたものゝ一が、本號に挿入したものであつて、その撮影のデイタは次の通り

昭和九年二月七日午前十時

快晴 日を右斜に負ふ

エクストリウム レッドセンステイヴ 乾板

ラットッソ A フィルター

焦點距離 三五・七五吋

絞り 五二

露光 一五秒

現像後の結果、露光は一二秒でも少くはなかつたと思ふし、一〇秒でも「不足」ではないと考へる。つまり強い日光を負うて、雪の山を寫すのであつたから、多少減じてても不結果でないらしい。

普通のレンズで寫したものと比較すると、山稜上の雪庇が甚だ明瞭に見えること、又向つて左に引く山稜の彼方に、茂嵩の峯頭が覗いて居るのが、明に看取出來る。双峯の中、向つて左のがトマの耳即ち藥師の峯で、右のが沖の耳即ち淺間の峯である。中景の右端に立つ金字塔形の山の巔は天神峠。

此の日、歸京を餘儀なくされなかつたなら、そして天候が變らなかつたなら、午後三時頃の光線で寫せば、更に趣のある畫が出来たに相違ない。

## 上越國境の山名二三

武田久吉

奥上州、殊に利根入りや西入りに足を入れたのも、つひ五六年前のことのやうに思つて居たが、記憶を辿つて見ると、もう十幾年か前の話なので、頭上に白髪殖えるのも無理はないとつくづく思ふことである。

澁川から東電經營の怪し氣な電車で沼田に達し、それからガタ馬車が徒歩で、小日向フビヤクとか法師に出かけたその頃の方が、急行列車や自動車の便が開けた今日此の頃よりは、遙に懐しい時代であつた。従つて一寸出かける心算でも、往復に一週間は掛ることになつてしまふが、それでも、便利重寶が必しも良いと限らないことは、この場合にも當てはまる。

大正十四年の春四月末から、五月始めにかけて、まとも奥上州の伸びやかな氣分を味ははうと、會員の山口成一君と二人、法師や川古あたりを、一週間程うる

ついで、折からの残雪を利用して、登山家から殆ど顧みられない小出俣岳コイデマタ（利根川圖志の赤谷嶽）に登つたり、三國山から東に美しい梅林の尾根を漫步したりして、早春の氣分を遺憾なく味ふことが出来た。

法師温泉のうす暗い室で、地圖を展げては散歩地を物色してゐた吾々は、上越の國境を少し東にはづれて一、七六四米の三角點を戴き、大源太山と地圖上に記された峯を見つけ、且つ之を三國山頂から望見した結果、山稜上の積雪は大分崩れ落ちてはゐるが、これを頼りに藪を避ければ、大した困難も危険も無しに、峯頭に達し得るものと斷定して、彌々五月一日の快晴に乗じて、その三角點を脚下に踏んまへ、歡喜の握手を、指も千切れる程に、交換したものであつた。

宿に戻つてから、爐邊に坐した岡村の老人に、大源太の往復を晤つた處が、過ぐる年、その東南の山足、金山澤の奥で、鑛山を經營したこの老人は、目を瞠つて驚いた。法師からあそこ迄一日で往復するなんて、人間わざではないやうな話。ひた呆れに呆れてゐた。

私達の自慢は、やがては懷疑に變つた。彼等のいふ大源太と、吾々の登つた大源太と、何か食ひ違ひがあるやうにも感じた。そしていろいろと問答の結果としては、大源太とは、地圖上に「仙ノ倉山」とある峯の名であつて、吾々が初登山を誇つた、そんな小さな峯ではないことが分明した。

法師から川古に來た吾々は、赤谷で「秀サン」と呼ばれる山通に面會して、この邊の山峯溪流についていろいろと質問した。小出俣岳の名稱を知つたのもその時の事であり、越後富士の頂上に嘗ては淺間の小祠のあつたことを耳にしたのもその時の事である。然し乍ら、彼の地圖上の大源太なる峯に至つては、秀サンと雖も上州にその稱呼のあることを知らなかつた。それで、その後一兩年してから、本會の小集會の席上で、「赤谷川上流の山々」なる演題の下に、この邊の山川について述べた時には、假に澁澤山なる名稱を提議して置いた。そして今でも、私としてはこれに越す適切な名を見出し得ないで苦しんでゐる。

其の後上越國境でも、特にこの附近は多くの登山家の注意を牽き、山峯溪流の名も大分簡明せられ、殊に『山岳』第二十五年第三號に掲げられた、松本善二君の詳密な記文によつて、最早決定的に定まつてしまひ、今更それについて云々するが如きは、如何にも時期を失した感が無いでもない。

然し遺憾なことには、松本君の調査は、主として越後土樽村の稱呼であつて、上州側のは大分閑却された形である。これは縦走登降に際して、土樽村の入夫を使用されたのが原因であると共に、上州側には信頼し得べき入夫も極めて少いのと、一方、國境の山が山麓の村から容易に望見出来ない上、溪流が北面に比して甚しく險惡で、獵師等も盛に出入しない爲め、小字が餘り命じてないにも由來するらしい。それで、私としては、赤谷、阿能川、谷川の三部落で、十分の調査を試み度く思ひ乍ら、未だそれを心行く迄行ふ機會を得ない。

それにも拘らず今茲に筆を執るのは、耳二ッの寫眞

を挿入するに方つて、その説明を記す關係上、序を以て多少の愚見を開陳して置き度い爲めで、自分乍らその不完全なのを恥ぢ入る次第である。最初に「大源太」について記すこととする。

國境上の最高峯であるこの山は、湯宿ユキユクあたりからそろ／＼と見參に入る。相俣の彼岸櫻は散り、雑木の梢も新緑にポーッと春の氣分を漂はす頃、薄霞のヴェイルの彼方に、白銀の輝きが目射るこの山の姿は、二、〇〇〇米をこ／＼の山とはどう見ても思はれない偉容である。通り掛りの村人から、野良仕事に忙しそうな農夫をつかまへて、その名を聞くと、誰も一樣に大源太と答へる。尤も中には大源山ダイゲンザンなど、訛る者も無いではなし、又甚しい場合には、小出岳岳をさへ大源太と指示する者さへあるが、とに角この名は誰の頭にも直に思ひ浮べられるものらしい。白粧した物凄しい岳さへ見れば、見當は少し位外れたとて、先づ大源太と云ひ度くなるものらしい。

地圖に見える「仙ノ倉山」なる名は、越後側にある

センノクラ谷から導かれた名稱なることは想定するに難くない。それで、この山名は越後——殊に土樽——方面の稱呼で、上州名が大源太、と吾々は認定してしまつた。そして私のいふ澁澤山に大源太の名が配された理由は、三國山頂から大源太即ち地圖の仙ノ倉山を望むと、この小峯が丁度中間に坐して、彼の岳と殆ど重なる爲め、測量部の御役人がこの山名を尋ねたのに對し、答へた村民はズット向ふの大源太の方と心得違ひをしたに起因するのであつて、寔に簡單であり、そして有り勝ちな間違である。

問題は至極簡單に解決せられたと思つて安神して居た處が、土樽方面で地名の穿鑿をした人達の收穫として、どうもセンノクラ山なる稱呼を誰も聞き出して來ないのが腑に落ちない。現今土樽での稱呼は「三ノ字ノ頭」であつて、これは残雪に由來するものであり、初夏が漸く仲夏に進まんとするや、やがて「二ノ字」となり「一ノ字」となるのだといふ（詳細は松本氏の記事参照）。

然る處近頃會員吉田直吉君が示された寫本の越後國大繪圖（元祿十五年<sup>壬午</sup>十二月御改、牧野駿河守」と記してある）を見ると、三國峠の東に連る所に「大源太山」を描き、且つ「此大源太山嶺通國境但上野國にてはあかや嶽と申し候此所より三國峠の間國境不相知」と但書のあるのが注目に値すると思ふ。これによつて、大源太の名は昨日今日出來た、測量部や鐵道省の製造に係るやうなモダーンなものではなくて、少くとも二百數十年來の名稱であると共に、それが又越後での稱呼でもあることが判明して面白いことだと考へる。そして上州でこの山を大劍太と稱するのも、恐らく越後の名を用ひてゐるのではなからうかとさへ想像せられる。何故なら、清水峠の西なる七ッ小屋の北に續く太源太山も亦越後名であるから。

大源太の名がこの界限で有名であることは、土樽村のみでなく、三國村でもこの名が人口に膾炙してゐる證左として、『山岳』の同號に掲げられた角田君の記事によると（一九八頁）、三國村では平標ノ頭の事を大源

太と呼ぶとある。これは三國村の人々全部がさういふのか、又は角田君が偶然出會はれた人達のみが、或は誤つて斯く云ふのか判明しない。單に一二の人からの話だけを典據とすることゝなると、上州でも小出俣岳を大源太と呼ぶといふ説も立てられる。それから又、三國村からは大源太は直接望見出來ない爲め、之をよく知る人が少いので、太源太の名を平標ノ頭に移すやうなことになつたのかも考へられる。とに角私は、三國山で平標ノ頭を大源太と呼ぶことは、錯誤に出づるものと認めるより外致し方がない。

仙ノ倉山といふ名は響きも良し、文字も面白いので一寸捨て難い名である。然し若し確かな據所が無いのなら、どうも抹殺するより外あるまい。加之この文字も、ホンの宛字であつて、寧ろ正しくは濺ノ富山と記さなければ意味をなさないのである。

地形圖に大源太山と誤記する峯、即ち私のいふ濺澤山は、越後三國村では河内澤の頭と呼ぶ山、角田君の記事や松本君の記事で明瞭であるが、これは惡澤岳を

荒川の東岳と稱するのと同一筆法であるから、私は採用するに躊躇する。

私は不幸にして、未だ越後富士の山頂を隈なく捜して、淺間の小祠を發見する機會に恵まれてゐないから、現狀については何も言へないが、赤谷の秀サンの話では小祠があつた（二三十年前の事）といふし、又一方越後富士又は單に富士山（利根川圖志）及び前記の『越後國大繪圖』と呼ぶことだの、その麓——としては實は少し遠過ぎるが——富士新田なる小部落さへあることから推して、昔は淺間社が勸請してあり、又相當有名な峯であつたに相違ないと考へられる。然し何分登降に不便な峯であるから、參詣者もなくなり、終に荒廢に歸したのではあるまいかと考へられる。上州（谷川）ではこれをオヂヶ澤の頭と呼んでゐるが、前記の越後大繪圖では、「此富士山嶺通國境、但上野國にても同名云々」とある。

甚だ奇怪に堪えないのは、所謂「谷川富士」に當たる峯が、古書や古圖には一向見當らないことである。

尤も私が摸索したのは、前に引用した書物と地圖の外には、『富士見十三州輿地之全圖』とか明治十二年に刊行された『越後國郡圖』位なところでしかない。唯明治になつて出たものゝ中、『改正銅鑄上野國全圖』には「富士山」と呼ぶ山が、今いふ谷川富士の位置と見ても宜しからうと思はれる所に描いてある。

斯うなると、谷川富士は越後富士が衰微して後に勸請されたものでともあるかといふ想像も起るが、會員大江明正君の探查によると、谷川富士の祠内には、徑尺許りの青銅の圓鏡があり、その中央に大日像（即ち淺間の本地佛）を鑄り、「永祿八年六月一日 良正作 富士淺間大菩薩」と刻んであるといふから、古さに於いては寔に申分がない。之を昔は單に「富士山」と呼び、越後富士と吾々のいふものは或は眼中になかつたものかとも考へられないでも無い。然らば万太郎澤の奥の富士山は、却つて後年の命名に拘るものであるのかも知れない。

谷川富士の勸請が三四百年も前のことであるとすれ

ば、その里宮は何處か、そして其處に何か古文書で無いかといふことは、直に吾々の腦裡に浮ぶ疑問である。



谷川コイ澤左岸の堤上から仰いだ谷川岳、その右に顯れる平圓頂は越後富士

武田久吉

谷川に淺間神社のあること以外、そしてその里宮の縁

起についても、何も資料の持合せのない私は、この點に關して何一つ、想像説すらも、提供出来ないことを遺憾に思ふ。唯此處に記し得ることは、山上に淺間を祀る峯——即ち谷川富士と呼ばれるもの——の南の一峯に藥師を祀ることから——即ち藥師ヶ岳の存在から推して、淺間と藥師の勧請は谷川方面からでなくて、却つて越後側から爲されたものと見る大江君の考定に、贊意を表することである。

それは夫れとして、この二峯を一つの山の南北の峯又は突起と見るか、一を富士山、一を藥師ヶ岳の二つの山嶽と見なす可きかといふ問題が残る。恐らく測量部の地形圖が播いた種子から發芽した考へであらうかとも思はれるが、北の峯を谷川富士、南の三角點のある峯を谷川岳一名藥師ヶ岳とする（即ち松本君等の考へ）のが一般の様である。然し私としては、この兩峯を一箇の山の南北兩突起とし、一を淺間又は大日の峯とし、他を藥師の峯とし、然る後にこれを總轄するものを山嶽としての名として選ぶ方が、合理的だと考へ

る。然らば總名として何を選ぶ可きかといへば、誰しも、恐らく十の八九迄は、「谷川岳」と答へることであらう。遺憾乍ら私は、この考へには遽に左袒することが出来ない。何故なら、谷川岳なる名は、谷川の源流に聳え、そして谷川の村から際に仰ぐことが出来、そしてその地の人が谷川岳と呼ぶ山即ち一、八四六米の三角點をその西端に擔ふものに決定し度いからである。この考へは今更思ひついたものではなくて、己に改造社出版の『日本地理大系 山岳篇』にも明記して置いた處である。

然らば所謂「谷川岳」は何を以て總名とするかといへば、「谷川富士」でなければ、「耳二ッ」で、寧ろ後者を採ることを希望し度い。これは山名としても面白いし、又沼田や月夜野方面から仰いだ時、極めて適切だと思はれるからである。そしてこれならば、何等錯誤を惹起する患はない。

序を以て記して置くが、澁澤山即ち地形圖上に大源太と誤記する峯の三角點から、耳二ッの三角點に直線

を引くと、その線は越後富士の頂上を過ぎるのを見るであらう。一、七六四米の峯から、一、九六三米の峯を望見して、その途中に一、八七八米の峯があつたとしたら、一、九六三米の峯はこれに隠されて姿を現はさない筈である。尤も一、八七八米の峯が、一、九六三米の峯に極めて接近してゐるとしたら、後者はその山嶺を少し許り顯して、一、七六四米の峯を、背伸びでもしてゐるやうにして覗くに相違ない。處が事實はどうであらう？ 越後富士は、耳二ッの北峯即ち淺間を祀つた峯と略々重なり、南方即ち薬師を祀るものは、勿論その右に姿を顯すことになる。その狀は一昨年梓書房から發行された『山岳寫眞繪葉書』第六輯に於ても窺ふことが出来る。この寫眞は一、七六四米の三角點の眞上に三脚を立て、撮影したものであるから、どうしても地形圖の描き方が正しくないとしか考へられな

い。  
次に「萬太郎山」について少し記して見度いと思ふ。上越國境上一、九五四米の峯にこの名を配したのは、矢

張り測量部の仕事である。蓋し萬太郎谷の奥での最高峯だからとでもいふ位の處であらう。この不當なことは已に松本君が指摘して居られるから、詳しくはそれを見て頂くこととするが、越後富士即ち萬太郎といふイークルの記號が描けるからといふ理由で、サゴウの峯を越後富士と呼ぶ人のあるには全く呆然たらざるを得ない。萬太郎山の名を一箇の峯に與へんとなら、どうしても一、八七八米の峯以外には適當なものが無い。

山嶽に限らず、溪流でも、村落でも、地名は大切なことである。それはまた、敢て登山家に限るものではない。それが近來山へ足を入れる大衆を始め、地名と交渉を持つ人々によつて、極めて出鱈目な態度で取扱はれることは、實に遺憾千萬である。ある映畫か何かに、日光の温泉ヶ岳をオンセンガタケとしてあつたのに一寸驚嘆した記憶があるが、山野を跋涉する植物學者の中には、又、驚く可き地名を羅列する人がある。富士山の植物に關する報告様なものを、英文で發表さ

れた某博士は、山麓なる水田野をローマ字でミツシノと記し、烏帽子ヶ岳をウボーシガタケ、白峯の間ノ岳をマノガタケ、農鳥嶽をトヨシマ岳、等々として讀者（但し日本の）を瞠目せしめたこともあるが、近頃ある雜誌に、ローマ字書きで上越國境の山地概念圖を掲げてあるのを拜見すると、土樽をダタル、二居をニイ、日白をニッパク等とあるのに、スッカリ恐縮して、本稿もこれで打ち切ることにする。



## 追憶

### 平福百穂さんを憶ふ

茨木猪之吉

平福さん、餘りに有名で今更、私が贅言するまでもないので。初めてお逢ひしたのは、たしか明治三十九年か、四十年頃かの冬でした。其の頃下谷に太平洋畫會研究所が設立せられて間もない時で、中村不折先生が主として指導の任にあつて時々人體のデッサンを指導して下さつたのです。平福さんも毎日忙がしい時間をさいて熱心にデッサンを研究せられました。休み時間になると、よく小使室の六疊で、座相撲を取つては眞赤になつて汗をかいいたり、動物園の象の眞似をして皆を笑はせたり、實に無邪氣な畫學生々活でした。平福さんは、その時はもうすでに一家をなし、文藝雜誌や詩集に清新豊かな取材を美しい線で描かれ、一種魅力ある、繪は私達の常に尊敬してゐた處です。特に國民新

聞社の畫報記者として、議會スケッチ、或は演習地使り、旅行記など次から次と紙上を飾り活躍されてゐました。本格的な作は、文展のアイヌ(三回)、田澤湖傳説(十回)など、特に印象深く今以て記憶新なもので、毎年力作を發表され、出世作は彼の有名な鴨、七面鳥、朝露、そして豫讓において斷然頭角を表はし、立派な社會的位置も得られた次第です。明治四十二年七月に日本山岳會へ入會され登山もせられた様です。高野鷹藏君が、山岳の表紙を御願ひして描いて頂いたのを、たゞ此の儘印刷屋に廻すのも興趣がないからと言ふので、私がそれでは刻して版を作らうと、凝り屋の高野君と一緒に版木や木彫の道具一式を、たしか上野廣小路邊で探し、同君が原畫を薄紙に寫し、それを私が版木に張り刻したのが例の「山岳」十年一號です。其の後お面會した折その話をしたら大變恐縮され、それなら、もつと山岳向の適當なものを描いて上げればよかつたね、とニコ／＼笑はれました。尠しく私事に互りますが、大正七年初冬の頃、武藏野の一角、世田ヶ谷

松蔭神社附近の所謂雀のお宿と稱する竹藪内の破屋に獨居して、私はひたすら畫業に従事してゐた。毎日、茶畑や桐の木の間から眞白な富士山を眺めたり、陽光

をうけた稻叢の傍で繪を終日描いて居た樂しさは、全く遠い思ひ出になつてしまつた。或る日、三宿草堂主人がぶらりと來訪され、海苔の罐詰、牛罐其の他食糧品を携へ、お土産として下さつた。貧しい自炊生活者には何より有難い事でした。そして極めて朗かに笑ひあの親しみあるお話のうちに全く尊敬の念にうたれました。あの頃の事を考へると再び來ない藝術的生活だつたと、つくづく思ひ懐しい氣持がします。何んだか昨今の様でもあり昔の様でもあり、思ひ出はそれからそれと偲ばれます。平福さんは上目黒のお宅から三宿の畫室にかよひ同時に白田舎塾を起し、門下生を熱心に指導なされ共に懸命に勉強なされた様でした。私も時々お邪魔して随分お世話になりました。震災後伊豆西海岸土肥温泉に約半ヶ年程居を移し、従つてお邪魔する機會が遠ざかりました。それでも新年會は必ず庭園

で家庭的に福引や餘興、おでん、かん酒、しるこ、そば、甘酒、立食で春温く楽しい集りをされたものでした。

本夏登山旅行から歸り、上野に二科院展を觀に行く途次偶然公園でお逢ひし、暫らく立話をしました。「小兒は大きくなつたかね、丈夫かね、此の頃どうしてゐる。私はお蔭で好きな山へも行き、繪も描いてゐますと、申したら、「あゝそれは何より結構」と極めて平凡な會話でしたが、どうも常の元氣なく大變寂しい様で何んともお氣の毒な位でした。其の後他から聞きましたら、身邊に御心配でとか、健康上の點で大分に御心痛の様でしたそうです。秋關西旅行中、新聞紙上で計報を知り、何んと申していゝやら傷々しく、哀悼にたへぬ次第であります。何かと自分の事にとりまぎれ數日を経て歸京しました。頃日武藏野原頭多摩墓地あの赤松林下に嚴肅な埋骨式が行はれ、初冬の雑木林は全く先生の畫中の如く、靜寂な大自然のうちに永眠せられたのです。餘りにも早く餘りにも夢の様です。



故平福百穂氏



## 東京農大山岳部員奥穂高

遭難に就いて

先般我々は有爲なる部員鈴木君を奥穂高瘤尾根に失つた。鈴木保衛君は大正元年生、東京府立五中を経て今年本學豫科に入學、同時に山岳部に加したものであります。彼は中學時代より山を好み、穂高に於ては今夏涸澤池ノ平に週日を送りました。尙後立山、谷川岳に夏秋夫々行つて居ります。此處に顛末を概記します

一行 油井寅太郎、鈴木の二人

昭和八年十月十日(晴)松本——上高地德澤迄行つて先行の油井と落合ふ筈の處都合あつて松本發が遅くなり丸西に泊る

十一日(晴)丸西——德澤 午近く牧場に來て一緒になつ

た

十二日(曇)德澤——唐澤——穂高小舎

十三日(曇)小舎(八、〇〇)——奥穂高——ジャンダルム

——飛脚尾根——奥穂高——小舎(二、〇〇——四、一〇)——

德澤(七、〇〇) 小舎に泊る積りのをやめて歸る

十四日(晴)德澤——上高地西糸屋

東京農大山岳部員奥穂高遭難に就いて

十五日(晴後曇)西糸屋(五、二五)——瘤尾根疊岩尾根間  
ルンセ入口(八、二〇)——瘤尾根(二、〇〇)——瘤(二、三〇)——遭難(二、〇〇頃)——現場(二、二〇)——穂高小舎(三、一〇)——現場(四、四〇) 尾根迄はルンセ通し登つて瘤の下に出た。瘤に着いた時は岳川にはガスが捲いて、時折見える明神の山稜が素晴らしい立派なものになつてゐた。瘤の下りのアップザイレンに綱を用ひた。

奥穂主稜に十かそこいら、ジャンダルム側をトラヴァースしてリツヂに出た地點で二米位左下から後れて來る鈴木に何時もする注意をしてゐたその時、彼の前に落ちて來た石が彼を支持して居た岩にシヨックを與へた。と同時にそのシヨックに耐え得ずして離落する岩を抱いて、歪んだ顔を見せたつきり後に倒れて行つた。下は垂直に近い斜面。その落ちて行く彼の後を追ひかける様に附近の不安定な岩層のマススが、前穂の圍谷壁に物凄い反響を續け乍らからくと雪崩れ込んで暫らくは止まなかつた。その餘りにも突然の出來事その状態に一度は愕然としたが次の瞬間、はつきりした意識に呼び戻されてゐた。背のサックを其處に遮二無二に驅け下り、頭を上溝谷のガラの所に紅に染つて仰向けの友を抱き起して呼び續けても、何の答もしてくれない。ふと見た彼の後頭部に信じられない程の大き

な裂傷、兩手で支える頭がぶく／＼と音がする。もう温かい一個の肉體にしか過ぎない。傍の彼のルックから水筒を出して血を拭ふてやらうとしても粘つて拭ひ得ない。こんな姑息な手當は無用、急報だ。そう思つてルックから出した毛糸のチョッキを枕に、セーターを上にかけて穂高小舎に走つた。小舎では居合せた神戸鐵道俱樂部の方に涸澤を登高中の部員に傳令を御願ひして現場に歸つた。

途中先刻の地點に廻つてルックを放つて、降りて來て拾つたが底の糸が切れて中のものはすつかり飛び出してゐた。僅か二時間半位の時間なのに身體はすつかり冷たく硬直してゐた。その横はつてゐる處から一間許り東に移したそこが暗い谷でありながら幾分か明るい感じのする處だったので。移し終つて慘ましい頭部に耄りとれたチョッキを蔽ひ、スエーターと上衣を上にかけた。水で手だけふいた。手の甲は四寸もの厚みに紫色に膨上つてゐる。不完全ながら思ひ附いたゞけの骸への手當が濟んだとき、丁度五時半だつた。

友の眞向ひの岩陸に膝を抱えて蹠まつた。間もなく友の姿も見えない間に包まれ、先刻の雪が霏になつて溝谷を頂目がけて吹き上げてくる強風に凌ぎ難い一夜、落石の度に體を縮めなければならぬ。

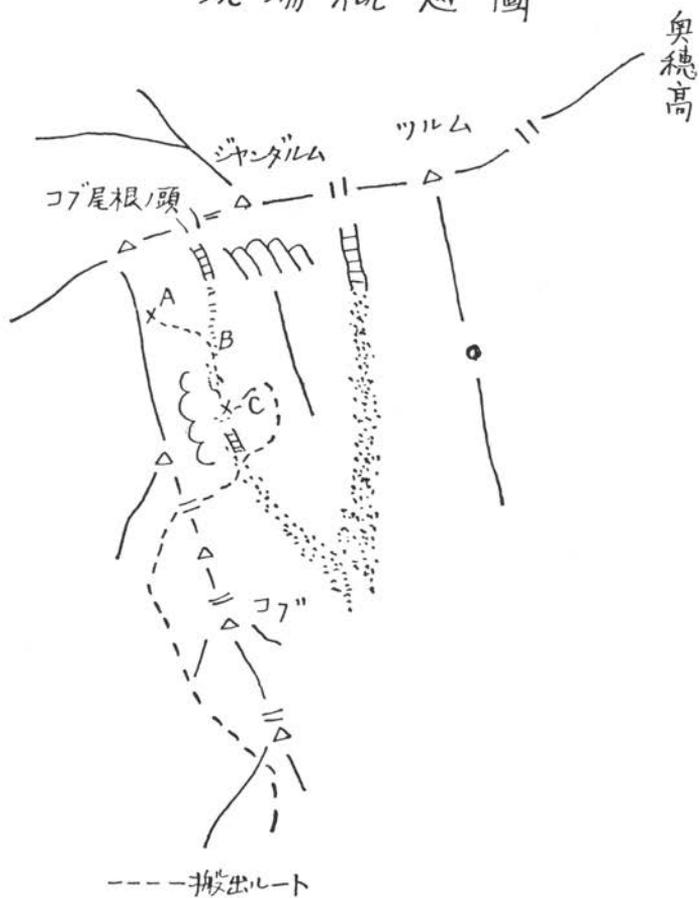
あらしの裡に朝を迎へた。誰れか来るだらうと七時半迄待つた。聲を限りに呼んでも、あらしに吞まれて風の唸りばかり。救援隊の戸配が案じられて穂高小舎に行く。小舎に田口氏等居られ手配なつたと聞き、種々御世話になり十二時半發德澤を経て西糸屋に歸つた。(午後五時半)

鈴木各の轉落に就いては圖を参照されたい。A B間約三〇米、翌日の觀察、傷等より恐らく頭部を眞下に空を切つて逆に落ちたと思ふA B斜面は七〇度位のものでなからうか。ルンゼの底は急傾斜のガラ、ために鈴木君がその上に乗るとそれと共に流れたものである。B C間約五〇米。頭部は數ヶ所にも裂傷ありて内容物も飛散してゐた。手は強い打撲の内出血が。背はチョッキが耄りとれたが擦過傷だけ。檢視で判明したのだが左の鎖骨が折れてゐた。他に大した傷なし。

### 救援の概況

十五日。報により穂高小舎を出た岡田氏は涸澤の本學部員結縁、名古屋醫大の出射氏の二名に會ひ、出射氏之を繼いで德澤に走る。結縁直ちに現場に赴かんとせしも既に夜に至り且つ吹雪烈しく引返す。田口氏等三名應援に來る。九時横尾岩小舎より中島作之進來るも同じく救援は不可能であつた。

# 現場概念圖



七時出射氏德澤着。報告と同時に角田氏等の御厚配により人夫上高地に飛ぶ。

傳令によりて西糸屋に居合せた堀、加藤、横井、竹内氏等一人名と共に岳川に向ふ（八時半）。然れども當時豪雨且落石多く明朝を期して下る。島々に應援を求め、また堀氏德澤に至り（午前二時）上高地德澤の連絡をとる。

十六日（雨）穂高小舎六時半發現場に向ふも吹雪の爲め中止田口氏等パーティーの他は夫々下山す。結縁途中にて德澤よりの報告を受く。後油井來り田口喜多兩氏代りて現場に急行す。油井は休憩後上高田に歸る。

上高地にては西糸屋に救援本部を置き、潜在の學生諸氏此の任に當る。此の日人夫の救援隊行動は

第一班、奥穂南面を登り現場へ。五名、午前六時半發。

第二班、前穂より奥穂に至り小屋との連絡をとり且現場應援

三名、七時發。

第三班、岳川奥部に至り焚火して一行を應援す。二名、傳令一名を附す。九時發。

第四班、島々よりの救援隊、第三班地に至り上よりの傳令により出動す。五名、十一時發。

十二時池野氏等二人應援に焚火場に行く。午後七時二十分全員

本部歸着。結果は第一、第二班共に現場着。協議の上本日遭難の搬出は中止した。加藤、堀氏德澤に人夫依頼に行く（午後十時半）。

十七日（晴）昨日現場に赴きし者、猛烈なる吹雪なりしため疲勞甚しく尙新雪のためにコンデション悪く、本日再び登高搬出する事は不可能なる故休養日とす。午前鈴木君の遺族三人、瀧本部長、部員二名來る。本部に於いて夜遅くまで搬出ルートその他鳩首協議す。

十八日（晴）人夫と學生の混成せる各班を分ち人夫は搬出の主力となり學生は傳令、アンザイレンの確保、食料の運搬等の任につくものとした。

第一班、現場迄、人夫五名、本學部員三名。

第二班、瘤尾根鞍部迄、人夫四名、加藤、堀、池野の三氏。

第三班、ルンセ入口、人夫四名、能澤、小山、横井、竹内、湊鈴木、渡邊、太田、井上の諸氏。以上三班は午前三時半發。

第四班、岳川最奥部、人夫三名、遺族部長部員の四名。午前九時發。

第三班はルンセ入口にて残り、第一、第二班はルンセより瘤尾根に入る一番下の支ルンセを發つて稜に出て、コア下にて二つに分れ降路の偵察を行ひつゝ、進んだ。鞍部にて第二班を留め

十時現場につく。骸は淡い雪にうつすらと蔽はれてゐた。朝の寒氣の弛みでの間斷なき落石をさけながら急遽鞍部迄背負上げ、其處にてゆつくり繻帶その他をなし兩班協力してルンゼを往路の如く下降す。傳令として部員三名降る。各班メンバーの比類なき統制と奮闘によつて意外にもはやく、五時ルンゼ入口六時半本部に收容し得た。

檢視は明日を待ち、同夜は遺族、部長、部員、他校山岳部の方々並びに人夫衆等の多數によつてお通夜なされ、翌十九日松本にて茶毘に附した。

以上不秩序乍ら報告を終ります。

此の度の遭難に就いて我々には何等言ふべき辭を持つてゐません。たゞ彼にとつては「満足して受け入るべき悔のないブレステイナツイオン」であつたにしても我々の受けたこの痛手は癒さるべくもありません。

最後に當時在上高地の日本山岳會の諸氏、各學校その他の山岳部員諸氏並びに上高地の人達の碎骨の御盡力に紙上にて厚く御禮を述べさして頂く次第であります。

(東京農業大學山岳部)



## 會報

## 會務報告

## 本年度役員並に事務分擔

昭和八年十月二日の役員總會、十二月並に本年一月の定例理事會の協議の結果により本年度に於ける役員並に理事事務分擔左の如く決定したり

會長 高頭仁兵衛

副會長 木暮理太郎、松方義三郎

評議員 (常任) 小島久太、高頭仁兵衛、(常任) 高野鷹藏、(常任) 武田久吉、山川默、近藤茂吉、中村

清太郎、三枝守博、田部重治、木暮理太郎、(常任) 冠松次郎、(常任) 横有恒

理事 庶務 會計

圖書 山小屋 山日記

庶務 研究調査

會計

庶務 研究調査

山岳 圖書

伊藤秀五郎

圖書 山日記

黑田 孝雄

會報 山日記

額田 敏

山岳 會報 研究調査

福島 昌夫

山岳 山小屋 山日記

三田 幸夫

庶務 圖書

飯塚篤之助

山岳 會報 山小屋 山日記

逸見 眞雄

關西一般事務

津田 周二

同上

高橋 健治

同上

三木 高嶺

山日記 山小屋

(囑託) 角田 吉夫

## 十一月定例理事會

十一月九日(木) 午後六時半 於本會事務所

出席者、小島、高頭、木暮、冠、島山、横、神谷、松本、角田

額田、伊藤、黒田、津田、福島

一、山小屋建設豫定地出張報告(角田)

一、理事在室當番制復活に決定(角田)

一、理事選任に關する件(横)

一、來年度豫算及會計報告(神谷)

## 十二月定例理事會

田中 蒼雄

十二月六日(水) 午後六時半 於本會事務所

出席者 小島、高頭、鳥山、横、松本、角田、伊藤、神谷、茨木、黒田

一、新任理事の件(横)

會員中より理事候補者の投票なきを以て、役員總會の推薦により左記六氏を來年度新任理事に當選と決す

松方義三郎 鳥山 悌成 飯塚篤之助 三田 幸夫

三木 高嶺 逸見 眞雄

一、會員大會開催に關する件(小島)

一、山日記編輯の件

來年度改めて山日記係を選任の上編輯出版のことに決定。

一、會計報告(神谷)

一月定例理事會

一月二十五日 於本會事務所

出席者 高頭、小島、近藤、冠、茨木、神谷、額田、伊藤、福島、横、津田、鳥山、三木、三田、飯塚

一、理事事務分擔の件

二月定例理事會

二月十五日 午後七時 於本會事務所

出席者 高頭、武田、木暮、鳥山、松方、茨木、額田、飯塚、

逸見、三田、黒田

一、山小屋設計者に挨拶の件(松方)

一、山岳の海外發送(寄贈)方の件(松方)

一、會員章をA・Cへ寄贈の件(松方)

一、ウエストン氏に高山深谷贈呈の件(松方)

一、山岳第二十九年第一號編輯の件(黒田)

一、有志晚餐會の件(松方)

一、山日記編輯の件(松方)

一、會計報告(鳥山)

三月定例理事會

三月八日 午後六時半 於事務所

出席者 小島、高頭、冠、横、松方、神谷、茨木、飯塚、額田

三田、黒田

一、山岳第二十九年第一號編輯の件(黒田)

一、山日記編輯の件(黒田)

一、黒部川保勝運動に關する件(冠)

一、山小屋雪崩調査に關する件(額田)

一、會員優遇に關する希望(小島)

## 第六十回小集會記事

十一月二日午後六時より赤坂三會堂に於て

「懐古の夕べ」と題し、創立當時よりの人々の懐舊談と明治時代よりの珍らしい幻燈によつて盛會であつた。併せて英國山岳會へ寄贈せる幻燈板の複製板も公開す。講演の内容左の如し。

- 1 槍ヶ岳登山以前 小島 烏水氏
  - 2 「山岳」の定まる迄 武田 久吉氏
  - 3 多摩川上流今昔 田部 重治氏
  - 4 日本山岳誌の發行 高頭仁兵衛氏
  - 5 木曾御岳に登る 木暮理太郎氏
  - 6 昔の山岳食糧と服裝と幻燈板の作成など 高野 鷹藏氏
  - 7 登山の思出 藤嶋 敏男氏
- 出席者左の如し。

小島 久太 安田登茂次 荒井道太郎 山田 力

|       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|
| 矢島 幸助 | 高野 鷹藏 | 酒井 忠一 | 額田 敏  |
| 渡邊 漸  | 福島 昌夫 | 山崎 武士 | 田部 重治 |
| 横 有恒  | 清水 龍三 | 岩崎京二郎 | 岡田 喜一 |
| 戸塚 武彦 | 川崎 吉藏 | 島田 巽  | 小林 義正 |
| 藤嶋 敏男 | 田中 菅雄 | 角田 吉夫 | 岡本 勝二 |
| 高頭仁兵衛 | 大熊 保夫 | 木暮理太郎 | 西村 雄二 |
| 塚本 閑治 | 伊東 虎夫 | 河合 秀治 | 武田 久吉 |
| 中村 貞治 | 安藤 正一 | 櫻井 信雄 | 藤枝 義男 |
| 木村 一男 | 村井 榮一 | 吉田 禮二 | 塚本 繁松 |
| 小川登喜男 | 多賀 富藏 | 菊地 明次 | 吉田 竹志 |
| 佐藤誠次郎 | 伊藤秀五郎 | 中屋 健次 | 山下助四郎 |
| 木村久太郎 | 高木菊三郎 | 原田 恭雄 | 星野光之助 |
| 神谷 恭  | 飯塚篤之助 | 本郷 常幸 | 井上 良則 |
| 鈴木 治孝 | 中村清太郎 | 大村那次郎 | 山口 清秀 |
| 黒田 正夫 | 矢作 太郎 | 小南 清  | 新庄 球生 |
| 田邊 主計 | 福田 昌雄 | 鈴木 勇  | 村越 匡次 |
| 飛川 維之 | 近藤 恒雄 | 吉田 次男 | 笈川 一  |
| 山口 成一 | 坂江 善治 | 宮崎 健一 | 中司 子夫 |
| 佐藤野里路 | 丹羽 惠  | 行方 沼東 | 三澤 龍雄 |
| 山根 雅男 | 田中 常介 | 中村 貞雄 | 石川 孟範 |

黒田 孝雄 浅原 重繼 長澤 佳熊  
外に會員外三十二名

## 第六十一回小集會記事

二月八日赤坂三會堂に於て

午後七時より福島理事司會にて開催。去月廿四日外遊の旅より歸朝された本會副會長松方義三郎氏の講演を伺ひ極めて盛會であつた。

松方氏の講演は「ウェストンさんのこと」「英國山岳會の育立の話」「蘇聯邦の登山界の現況」等々、興味多く有益なものであつた。殊にエヴェレスト登攀隊員から直接聞かれた種々のお話は、松方氏を通じて我々も亦この感と同じくし得る喜びであつた。松方氏が持歸られたウィンドジャックは、エヴェレスト登攀隊員の使用せると同種のグレンフェルのもので、講演後會員一同手にして精巧さに一驚した。

出席者

木暮理太郎 木村 庸夫 澤 智子 澤井徳太郎

會 報 第六十一回小集會記事 會員大會

|       |       |          |       |
|-------|-------|----------|-------|
| 伊藤秀五郎 | 飯塚篤之助 | 大澤 照貞    | 神谷 恭  |
| 丹羽 惠  | 小林 義正 | 酒井 忠一    | 小島 久太 |
| 佐伯幸兵衛 | 武田 久吉 | 高頭仁兵衛    | 橋本晋七郎 |
| 横 有恒  | 關根 吉郎 | 松方義三郎    | 黒田 孝雄 |
| 福島 昌夫 | 國分 貫一 | 安藤 正一    | 角田 吉夫 |
| 浅原 重繼 | 園村 孝  | 櫻井 信夫    | 飛川 維之 |
| 岩崎京二郎 | 野口 未延 | 尾崎 喜八    | 渡邊 漸  |
| 木村 鑛吉 | 西川 信義 | 中屋 健次    | 茨木猪之吉 |
| 吉田 竹志 | 池田 政雄 | 中司 文夫    | 中村 太郎 |
| 芋川 稔一 | 田中 蒼雄 | 岡本 勝二    | 渡邊 達三 |
| 山本幸次郎 | 矢作 太郎 | 木村 一男    | 笈川 一  |
| 本郷 常幸 | 三田 幸夫 | 外に會員外十二人 |       |

計 六十二人

## 會員大會

十二月七日午後六時半より赤坂三會堂に於て

小島會長より八年度に於ける一般會務並に來年度新任役員選舉に就き説明あり、伊藤理事は本年度に於ける本會事業山小屋、山日記、寫真展覽會、高山深谷共

の他に關する報告をなし、次いで神谷會計理事より本年度會計及び明年年度豫算に就き詳細なる報告あり、八時半閉會す。

出席者左の如し

|       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|
| 酒井 忠一 | 大澤 照貞 | 小島 久太 | 神谷 恭  |
| 澤 智子  | 伊藤秀五郎 | 冠 松次郎 | 澤井德太郎 |
| 吉田 禮二 | 原田 恭雄 | 名古屋常治 | 松本 善二 |
| 近藤 恒雄 | 高頭仁兵衛 | 佐藤誠次郎 | 茨木猪之吉 |
| 鳥山 悌成 | 多賀 富藏 | 高橋良之助 | 齋藤威三男 |
| 淺原 重繼 | 飛川 維之 | 岩崎京二郎 | 山口 清秀 |
| 行方 沼東 | 小野金太郎 |       |       |

## 新舊理事送迎會

一月二十五日午後六時より

新舊理事諸君の送迎會が一月二十五日芝區田町の司俱樂部で催された。關西から新任理事の三木高岑君と津田周二君が見えた。中原繁之助君も見える豫定であつたが風邪の爲めお見合せとなつた。

昨年で満期となつた理事諸君のうち松本善二君は出席の途中腦貧血で新橋から引返されたと電話があつたのは、浦松佐美太郎、逸見眞雄兩君の御缺席とともに残念の至りであつた。一昨年は三會堂階下の東洋軒、昨年は晚翠軒、今年はこの司俱樂部、と處は變るが例の通り堅苦しい御挨拶は抜きで萬事どうぞよろしくと御互に云ひあつただけで此の愉快なる一夕を送る。

去年の忘年會もさうであつたが、日本山岳會の晩餐と云つたので凝性の此の店では獻立に山の名をつけた例へば汁は雲畑の猪汁、御飯は阿蘇山爆發かやくめしと云つた次第の面白があつた。かくて九時頃終つて皆家路につく。

筆を擱くに當つて今回退任される横、角田、松本、浦松、中原の五氏に厚く感謝の意を表すると共に新任の松方、飯塚、三田、逸見、鳥山、三木の五氏の努力を切望する。當日の參會者左の如し。

横 有恒 角田 吉夫(以上退任) 鳥山 悌成  
飯塚篤之助 三田 幸夫 三木 高岑(以上新任)

津田 周二  
冠 松次郎  
額田 敏  
小島 久太  
茨木猪之吉  
木村 鑛吉  
高頭仁兵衛  
神谷 恭  
伊藤秀五郎  
近藤 茂吉  
福島 昌夫





### 「山岳」投稿規定

- 一、投稿は何人も自由とす。日本山岳會員たると然らざるとを問はず。
  - 一、原稿の採否は理事會に於て決定す。
  - 一、原稿は返却せざるものとす。
  - 一、別刷所要の向はその旨原稿に朱記せられたし、その費用は筆者の負擔とす。
  - 一、原稿にはその梗概を付せられたし。
  - 一、紀行には概念圖を添付せられたし。
  - 一、寫眞は光澤印畫紙に焼付けられ度、裏面或ひは別紙に説明記入を乞ふ。
  - 一、校正は編輯者に一任せられたし。
  - 一、地名及び外國語は特に明確に書かれ度、地名には振假名を附せられ度し。
- 原稿蒐集所  
 東京市芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室
- 日本山岳會編輯所  
 原稿用紙所要の向は前記編輯所宛て申込みあり度し。

昭和九年五月廿五日印刷  
昭和九年六月一日發行

〔定價金貳圓〕

## 發行所 日本山岳會

東京市芝區琴平町一、不二屋ビル内

電話芝一六四九番  
振替口座東京四八二九番

編輯兼發行者 逸 見 眞 雄  
東京市豐島區池袋四ノ四七三

印刷者 高田 壬 午 郎  
東京市神田區神保町一ノ三四

發賣所 東京 神保町 堂  
東京市

廣告取扱所 進 恒 社  
東京市牛込區富久町一四

株式會社 關明堂 東京支店 印刷

# 日本山岳會々則

第一條 本會ヲ日本山岳會 (Japanese Alpine Club) ト名

ツク

第二條 本會ハ山岳ニ關スル科學、文學、藝術其他一切ヲ

研究シ以テ健全ナル登山氣風ノ振興ヲ期シ且ツ會

員相互ノ連絡親睦ヲ圖ルヲ目的トス

第三條 本會ハ前條ニ掲ケタル目的ヲ達スルタメ左ノ事業

ヲ爲ス

(1) 機關雜誌「山岳」ノ發行、又時宜ニ依リ臨時

又ハ定時ノ出版物刊行

(2) 其他登山者ノ爲メ適宜ノ事業

第四條 本會ハ每年大會及小集會ヲ開ク

第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長一名、副會長若千名、評議員十五名以內、理

事十五名、監事二名以內

第六條 會長ハ本會ヲ代表ス 但シ會長ニ事故アル場合ハ

副會長之ニ代ル

第七條 會長及副會長ハ役員總會ニ於テ役員ノ内ヨリ之ヲ

推薦ス、會長及副會長ノ任期ハ三ケ年トス 但シ

役員トシテ任期滿了シタル場合ハ會長副會長トシ

テノ任期滿了前ト雖モ交替スルコトアルヘシ

第八條 評議員ハ本會ノ重要會務ヲ審議ス

第九條 評議員ハ本會發起人ノ總テト元役員タリシ會員中

ヨリ評議員會ノ推薦セル者ヲ以テ之ニ任ス 發起

人以外ノ評議員ノ任期ハ三年トス 但シ重任ヲ妨

ケス

第十條 評議員ハ互選ヲ以テ常任評議員若干名ヲ選任ス

第十一條 常任評議員ハ評議員會ヲ代表シテ會務ニ參與ス其

任期ハ三年トス

第十二條 理事ハ別ニ定ムル細則ニ依リ候補者中ヨリ會員ノ

投票ヲ以テ之ヲ選任ス其任期ハ三年トシ、理事定

員數ノ三分ノ一ヲ毎年改選スルモノトス

但シ引續キ重任スルコトヲ得ス

第十三條 監事ハ評議員會ニ於テ會員中ヨリ之ヲ推薦ス其任

期ハ三年トス 但シ重任ヲ妨ケス

第十四條 役員總會ハ評議員、理事ヲ以テ組織ス

第十五條 役員總會、評議員會及理事會ノ議長ハ會長之ニ當

ル 但シ會長ニ差支アルトキハ副會長之ニ代ル

第十六條 役員ハ任期滿了後ト雖モ後任者ノ就任スル迄ハ其

任務ヲ行フモノトス

役員ニ缺員ヲ生シタルトキハ前各條ニ依リ夫々之ヲ補充ス補缺役員ノ任期ハ前任者ノ殘任期トス前項ノ場合ニ於テ特ニ補缺ヲ必要トセザルトキハ次ノ改選期迄之ヲ行ハサルコトヲ得

第十七條 役員總會、評議員會及理事會ハ會長之ヲ招集ス

第十八條 役員總會ハ役員二分ノ一以上評議員會ハ評議員二分ノ一以上理事會ハ理事二分ノ一以上出席スルニ非レハ議決ヲナスコトヲ得ス

第十九條 役員總會、評議員會及理事會ノ議決ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第二十條 役員ハ總テ無報酬トス 但シ其職務ノタメ必要ナル實費及旅費ヲ給與スルコトアル可シ

第二十一條 本會ハ會員ヲ分チ左ノ三種トス

- 一、通常會員 會費年額六圓ヲ納ムル者
  - 二、終身會員 一時金百圓以上ヲ納メタル者
  - 三、名譽會員 役員會ニ於テ推薦シタル者
- 右ノ二、三ニ該當スル會員ハ爾後會員籍ヲ有スル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス

第二十二條 本會々員タラントスル者ハ會員二名ノ紹介ヲ以テ

申込ムモノトス、入會許可ノ通知アリタルトキハ入會金五圓ニ會費ヲ添へ拂込ムモノトス 入會許可ノ通知アリタル後一ヶ月以内ニ右ノ手續ヲナササル者ハ入會ノ許可ヲ取消サル可シ

第二十三條 入會ノ許可ハ理事會ノ議決ニ依ルモノトス

第二十四條 本會會則ノ變更ハ役員總會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム  
第二十五條 前條ノ議決ハ役員三分ノ二以上出席シ其出席者三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

第二十六條 本會ハ適當ト認ムル地方ニ支部ヲ設クルコトヲ得 支部規則ハ役員總會ニ於テ之ヲ定ム

細則

一、會費其他ニ關スルモノ

- (イ) 會費ハ毎年二月末日迄ニ納付スヘキモノトス
- (ロ) 毎年一月一日ヨリ八月三十一日迄ノ入會者ニ限り其年度ノ會費ヲ二ヶ月間延納スルコトヲ得 但シ此適用ヲ受ケントスル者ハ其旨入會申込ト同時ニ申出ス可シ
- (ハ) 毎年九月一日以後ノ入會者ニ對シテハ其年度ノ會費ヲ免除ス

(ニ) 本會ハ會員ニ會員章ヲ交付ス會員章ヲ紛失シタルモノ

ハ實費ヲ以テ再交付ヲ受クルコトヲ得

(ホ) 本會ハ機關雜誌「山岳」ヲ毎年發行シ每號一部ヲ本會

會員ニ頒布ス。但シ毎年九月一日以後ノ入會者ニハ頒布

セズ

(ヘ) 毎年九月一日以後ノ入會者カ其年度ノ雜誌「山岳」ノ頒

布ヲ希望スルトキハ更ニ一ケ年分ノ雜誌代ヲ納ムルコト

ヲ要ス

(ト) 本會會員ハ別ニ定ムル所ニ依リ本會所藏ノ圖書ヲ閱覽

スルコトヲ得

(チ) 會員ニシテ退會ヲ欲スルトキハ其旨事務所ニ必ス書面

ヲ以テ申出ツヘシ

(リ) 會員ニシテ本會ノ體面ヲ毀損シ又ハ會費納付ノ義務ヲ

怠リタル者ハ理事會ノ決議ニ依リ除名ス

(ヌ) 本會ハ既納ノ金品ヲ一切返付セス

(ル) 團體加入者ノ代表者交付シタル場合ニハ新舊兩代表者

ノ連署ヲ以テ代表者變更届ヲ提出スヘシ

(ヲ) 本會集會室及圖書室ヲ東京市芝區琴平町一番地不二屋

ビル三階三〇七號室ニ置ク

(ヅ) 海外旅行其他ノ理由ニヨリ十二ヶ月以上、三十六ヶ月

以下ノ間不在トナル場合ハ、會員ハ其ノ理由、不在期間

等ヲ詳記シ、取扱手数料金貳圓ヲ添ヘ事務所ニ届出ツル

事ニヨリテ、不在會員ノ取扱ヲ受クル事ヲ得、此場合ニ

ハ不在期間ハ會員章ヲ返納スルニ及ハス、會費納付ノ義

務ナキモ本會ノ出版物ノ頒布ヲ受クル事ヲ得ス

二、理事選舉ニ關スルモノ

(イ) 理事定員十五名ノ内三名ハ之ヲ關西在住ノ會員中ヨリ

選任ス

(ロ) 役員總會ハ理事改選又ハ缺員補充ノ際ニ會員中ヨリ候

補者ヲ推薦スヘキモノトス

(ハ) 會員中十名以上ノ推薦ニヨリ會員中ヨリ一名ノ候補者

ヲ舉グルコトヲ得。但シ一候補者ヲ推薦シタルモノハ他

ノ候補者ヲ推薦スルコトヲ得ス

(ニ) 理事候補者タルヘキモノハ入會後滿三ケ年ヲ經タルコ

トヲ要ス

(ホ) 團體ノ代表者タル資格ニ於テ會員タルモノハ候補者タ

ルコトヲ得ス

(ヘ) 候補者ノ氏名ハ豫メ本會ヨリ全會員ニ通知シ投票ヲ求

ムルモノトス

(ト) 候補者ノ數力改選又ハ補充セラルヘキ定員ノ數ヲ超過

セザルトキハ投票ヲ要セザルモノトス

(チ) 改選ノ際五名ノ内一名ハ關西在住ノ理事トス

(リ) 投票ハ記名連記投票トス









**The Journal of the Japanese Alpine Club**

**SANGAKU**

**Vol. XXIX**

**1934**

**No. 1**